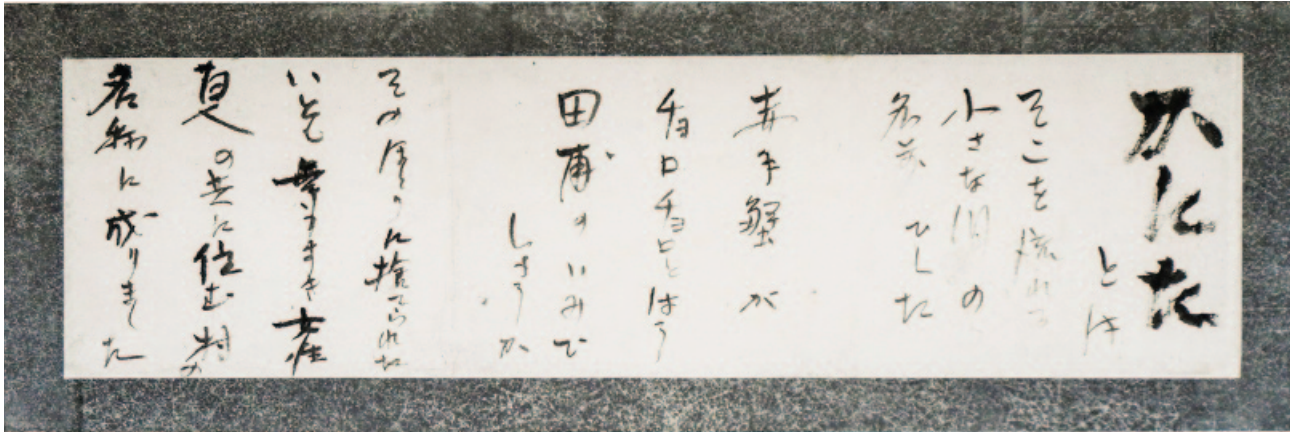


婦人保護長期入所施設

かいた婦人の村
創立50周年記念誌



かにたとは

そこを流れる

小さな川の

名前でした

赤手蟹が

千瀬口千瀬口とはう

田浦のいみでしようか

そのほとりに捨てられた

いとも幸うすき女性

百人の共に住む村の

名称に成りました

(深津文雄書)



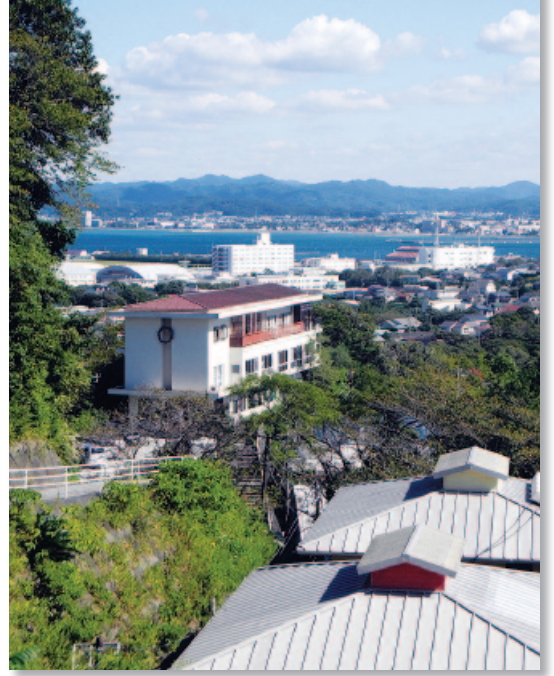
1976年10月10日、かにたを訪れた市川房枝氏を見送る。



90歳の朝を祝う。



ユッカ落成式



坂道より管理棟を望む。



会堂定礎式



会堂と
パイプオルガン





作業いろいろ







昔の運動会は鼓笛隊の演奏と行進で始まった。



ワークキャンパーは夏まつりでも大活躍。

楽しい行事





恵みに感謝



イースターの朝



初めてのクリスマス





かにたで生まれた
美しいものたち



序 文

障害のある弱い女性たちが、助け合って生活する“コロニー”として出発した『かにた婦人の村』は、関わってくださった多くの人々のご助力やご支援を受けながら、目の前にある困難に、入所者と職員が共に汗を流して立ち向かい、もがいているうちに、気がつけば、いつのまにか半世紀を過ごしていました。

この奮闘の歴史を振り返り、遺しておくことは、新しい50年をこれから担っていくであろう法人や施設の職員に引き継ぐために欠かせないという思いと、私たち自身が、この半世紀の取り組みを振り返り、自分が遺した、あるいは既に故人となった女性たちや職員が遺した足跡を記録して後世に伝えたいという思いで、この記念誌を編纂しました。創設者深津文雄牧師はじめ、かにた婦人の村の運営にご尽力いただいたすべての方々に、この冊子を捧げます。

2015年11月吉日

かにた婦人の村
施設長 五十嵐逸美

かにた婦人の村 創立50周年記念誌

目 次

かにたとは	1
写真で見るかにた婦人の村	2
序 文	9
目 次	10
創設者 深津文雄 プロフィール	12
『かにた婦人の村』の50年の歩みを感謝して 社会福祉法人 ベテスダ奉仕女母の家 理事長 大沼昭彦	14
50年の重みと未来への展望 婦人保護長期入所施設 かにた婦人の村 施設長 五十嵐 逸 美	16
『創立50年』の果実 かにた婦人の村 名誉村長 天羽 道子	18
「売春防止法改正」に伴う全国婦人保護施設等連絡協議会活動の流れ 全国婦人保護施設等連絡協議会 会長 横田 千代子	20
かにた婦人の村50年に想う 元文京学院大学人間学部教授 林 千代	22
私のかにた、40年 かにた作業所 エマオ 所長 佐々木 清	24
かにた婦人の村へ48年 LBF（労働兄弟愛舎）鈴木 俊治	26
かにた婦人の村と上尾合同教会の関わり 日本キリスト教団 上尾合同教会 坂田 雅雄	28

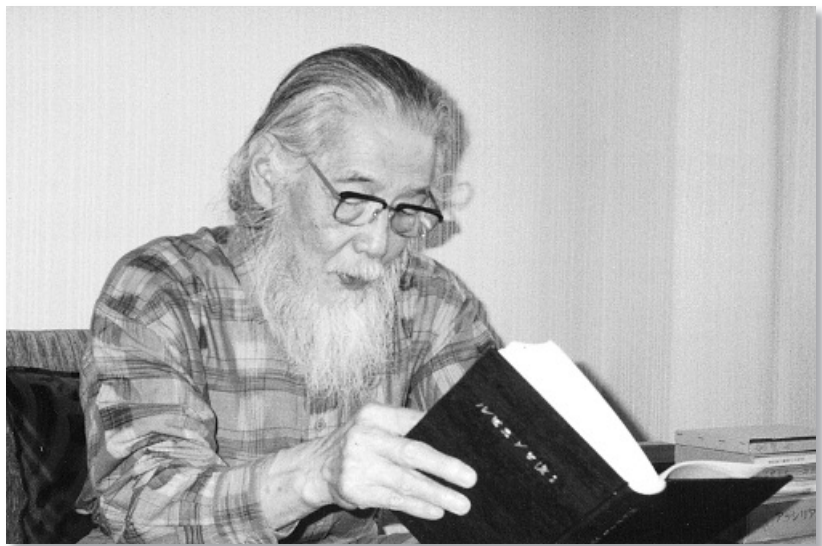


社会福祉法人 ベテスタ奉仕女母の家 について	30
コロニーへの道	32
かにた婦人の村50年の歩み (年表)	33
1954 - 1969	34
1970 - 1979	42
1980 - 1989	50
何がやりたい? かにたの作業	57
1990 - 1999	58
2000 - 2009	70
かにたの入所者と家族とのつながり	83
2010 - 2015	84
かにたで生まれた歌	92
村人たちの座談会	93
座談会その1	94
座談会その2	100
ベテスタ奉仕女母の家の姉妹たちから	106
42年間のかにた生活を終えて (聞き取り)	
元職員 小林 いさ	110
職員からひとつ	112
入所者数の推移	118
あとがき	120



1965年10月

1991年10月



創設者 深津文雄 プロフィール

1909. 11. 22 福井県敦賀で牧師の子に生れる
金沢、台北、営口（旧満州）、阿用、大連を転々とし、11歳で孤児になる
1927. 2. 21 大連第二中学校第1回卒業
4. 16 明治学院神学部予科（英文科）に入学
木岡英三郎とBACHに出会う
1929. 7. 16 豊島区高田本町で、陽光会の盲女子教育に携わり、ヘレンケラーと出会う
1933. 3. 21 日本神学校第3回卒業 教職を辞退し、日本基督教牛込教会長老のまま自宅で聖書講義
1934. 3. 28 東京大学の石橋智信の旧約学の聴講生となり、日本宗教学会会員となる
1935. 11. 7 東京市板橋区に移り、茂呂塾創立（塾長）
1937. 9. 7 富坂に移り、東亜伝道会宣教師ヘンニッヒの助手を兼ね、普及福音上富坂教会を再開 講壇を守る
1938. 4. 4 茂呂塾幼稚園開設（園長）
1941. 6. 24 日本基督教団に参加（正教師、青年部委員、教育部委員）
1942. 6. 1 錬成会に出て、古事記の研究に凝る
1950. 4. 14 日本聖書学研究所を開設（主事）
1950. 9. 3 NHKラジオチャーターで『旧約文学』を16回放送
1951. 1. 18 NHKラジオチャーターで『聖書の真髓』を12回放送
1952. 4. 1 AVACOの『日曜レコード』（BACH）160回放送
1954. 4. 10 『オリエント学会』を創立し、三笠宮殿下と出会う
1954. 5. 23 ベテスダ奉仕女母の家創立（館長） 奉仕女4名の着衣式
1955. 3. 29 上富坂教会牧師を辞職し、板橋区茂呂町に移る
1955. 4. 5 AVACOの『BACHを遡る』を12回放送
1955. 5. 15 AVACOホールで『バッハ研究会』開催10回
1956. 10. 11 ベテスダ奉仕女母の家が社会福祉法人として認可される
1958. 4. 1 婦人保護施設いずみ寮創設（寮長）
1965. 4. 1 婦人保護長期収容施設かいた婦人の村創設（施設長）
1974. 11. 6 藍綬褒章受章
1980. 1. 3 朝日社会福祉賞受賞 副賞100万円で会堂建設を始める
1989. 3. 31 かいた婦人の村施設長を退任、かいた教会牧師は続ける
2000. 8. 17 “コロニー”の一室で永眠

『かにた婦人の村』の

50年の歩みを感謝して

社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家

理事長 大沼昭彦

創設者深津文雄牧師の「イエス様が最も弱く小さい者の側に立ったように、抑圧され人としての尊厳を傷つけられた女性の側に寄り添い、安心して平穏に生活できる場をこの日本の中に築きたい」という祈りと願い、情熱、行動。それに応答する奉仕女並びに多くの支援者の思いが一つになって、長期婦人保護施設『かにた婦人の村』が事業を開始したのは、今から50年前の1965年4月1日でありました。

かにた年表により、事業開始前後の歩みを見ますときに、1961年の全国社会福祉大会におけるコロニー建設のための決議、予算獲得のための街頭行進、国会陳情や予算折衝、1962年～1963年の館山市にある国有地の払い下げの交渉、1964年の施設建設と整備、職員体制の確立など、『かにた婦人の村』の開所に向けた準備が記録されておりますが、その歩みは私どもの想像を超える困難の中で、進められたのではないかと思います。

『かにた婦人の村』の建設は、国家予算

の裏付けはあったものの、その建設に必要なすべてを賄うことはできず、建設資金を集めるためのチャリティー映画会の開催や寄附金集め、施設建設のためワークキャンプの実施など、多くの祈りと奉仕の中で進められたと記録されております。この多くの方々の祈りと奉仕の業は神様によって聞き上げられ、事業開始に至ったとの歴史的歩みを振り返るときに、その一步一步の足跡を静かに思い起こし、今日まで、50年の歩みが神様によって導かれ、守られたことをみなさまと共に感謝したいと思えます。

私は『かにた婦人の村』を訪れ、坂道の崖の擁壁を見るたびに、また礼拝堂に入り静かにベンチに腰をかけるたびに、さらには村で生活する多くの方々とお話しをするたびに、この50年間の『かにた婦人の村』の歴史の一つひとつを知らされます。

建物、道、果樹園、作業所、畑、すべてを包み込み、そこに生活する人と自然が一体となった環境……それぞれの一つひとつが、このような現在の形になるまでに、ワークキャンプや作業班のお仕事

として関わってくださったお一人おひとりの汗と涙と喜びに、思いを馳せることができます。そして、開所以来の一刻一瞬の時と共に積み重ね形成されてきた“かにたの文化”をつくり上げてこられた方々に、心からの敬意と感謝の思いを捧げたいと思います。

『かにた婦人の村』の経済を顧みますと、村で生活して居られる方々に安心安住の環境と生活の場を提供し、神様の下での一つの家族として過ごし、個々の人のもつ個性と能力が発揮できるような仕組みを作り上げるための、独自の活動を進めれば進めるほど、資金不足は避けられない状態でした。しかし、施設開所以来お支えいただいている、日本全国、全世界におられるかにた後援会員のみなさまや、祈りの友、キリスト教会、ミッションスクール等に関わりのあるご支援

者のみなさまからお送りいただいているご寄附やご寄贈品によるバザー等により、毎年足りないものは補われ、今日を迎えることができましたことを、心より感謝申し上げたいと思います。

最後に、創設者深津文雄牧師が築き上げられた『かにた婦人の村』の文化、並びに生活共同体としてのコロニーを一層発展させ、『かにた婦人の村』でお働きいただいた多くの先達、既に神の国に入っておられる方々の思いを受け継ぎ、さらには現在『かにた婦人の村』で生活されているお一人おひとりが、より豊かで安心して人生を送ることができるような『かにた婦人の村』の完成をめざして参りますので、今後ともお祈りとお支えを賜りますよう心よりお願いし、感謝のご挨拶に代えたいと思います。



わたしも、あなたを、さばくまい

『裁判 (キリストと姦淫の女)』
掛井五郎 作 (1959年)

50年の重みと未来への展望

婦人保護長期入所施設

かにた婦人の村

施設長 五十嵐 逸美

創立50年を迎え、このような記念誌を皆様にお届けできる恵みを賜り、かにた婦人の村を支えて下さったすべての方と神様のご加護に感謝いたします。編集資料を整理するにあたり、法人の黎明期から保育事業の開始、母の家の創立、社会福祉法人化、いずみ寮の創設、コロニー後援会の発足、そしてかにたの創設までに至る深津文雄先生の足跡をあらためて振り返り、“人に寄り添い、共に生きる”姿勢を貫いた、先生の法人事業に対する思いを再確認しているところです。

かにた婦人の村は、短期的な支援では社会復帰が困難な女性たちが、安心して長期間生活することが可能な“コロニー作り”をコンセプトとして発案され、多くの人々のご賛同とご支援を受けてスタートし、運営を続けて参りました。豊かな自然環境と、入所者が“村人”として自ら村づくりに参加できる多種多様な活動機会（農産・畜産・手芸・家事・洗濯・寄付物品の整理・陶芸・食事作りetc）の提供を通じて、貧困、障がい、性的被害、家族問題など、困難さを抱えた生活

史の中で、それぞれの入所者が負ってきた心の傷や、失った自尊心や自己肯定感を回復していただくことに、支援の重点をおいてきました。

私たち職員がこの50年間してきたことを言葉に集約するとすれば、“もっとも弱い人を捨てない”ことと、時間や空間を共有し“共に生きる”ことです。それは深津先生の「この世に生まれて来て、無用な人は一人もいない」や「底点志向」という基本理念の実践の歴史であったと思います。この思いは、入所されている女性たちの心の奥にも浸透し、村全体が自然に共有している“かにた文化”となり結実しました。見学に来られる多くの人からいただく「本当に優しい人たちですね」とか「今日は私自身が癒されました」というご感想が、そのことを実感させてくれます。

創設された50年前とは、社会福祉施策が大きく変化する中で、「障がい」は人の特別な状態ではなく、人の状態を連続的に捉えた中での個性の一つと理解され、

むしろ、本来個別の状況にある人々すべてが地域で快適に生活できない社会的障壁があるならば、それこそが「障害」であるという、環境を重視する障害観が常識になりつつあります。しかし、それはまだ障がい者支援に係る福祉従事者の間での常識であって、一般的に共有されるまでには至っていないのが実情です。

かにたでは、一人ひとりの個性と尊厳を、“村人”がお互いに尊重する文化を育んできました。職員も村人の一人です。このような包摂的な文化が地域に広まり、社会が成熟すれば、施設としての“コロニー”は必要なくなるでしょう。

2011年に国が改訂した『婦人保護長期入所施設運営要領』により、「婦人保護長期入所施設は終身的な入所を行う施設ではない」と規定され、長期の支援の中で地域生活移行支援を行う施設とされました。最近入所された方たちの特徴は、地域の障がいサービスの利用経験のある方が多い点です。しかし本人の問題行動により、地域のサービスの利用が困難とされ、地域生活ができなくなり、かにたに來られました。そのような人たちが、この村では生活できている。それが何を意味するかを私たちは深く考える必要があります。

最近、ソーシャルワークの世界では、ストレングス（Strength 強み）とかエンパワメント（Empowerment 湧活）などの言葉がキーワードとして多用され、個

人の個性を肯定的に捉え、そのことを前提に、外部環境との調整を重視する支援が推奨されています。かにた婦人の村は、そのような支援を50年前から実践してきたので、自負してもよいのではないかと思います。そして、この文化を地域に広めていく実践が、今私たちに求められています。その意味で、昨年6月に隣接して事業を開始した『かにた作業所エマオ』は、かにたの精神を地域に繋ぐ拠点ですので、村としてもバックアップしていきたいと考えています。

現在、入所者の高齢化、施設・設備の老朽化など、大きな課題を抱えた中で、施設運営を継続して行かなければならない状況ではありますが、女性支援・障害者支援の最前線を担ってきた誇りをもちつつ、“もっとも弱い人たち”と“共に生きる”姿勢を継承していかなければならないと決意を新たにしております。引き続き、皆様の温かいご支援とご指導ご助言をお願いいたします。

『創立50年』の果実

かにた婦人の村 名誉村長

天羽道子

かにた婦人の村『創立50年』を“共に生きる”村人の一人として迎え、感謝と喜びを共に主に捧げ、共に分かち合えますことは、なんと有難く、幸せなことでしょう。言葉に尽せない思いです。

創立7年前、誕生まもない『いずみ寮』の中で語り始められた“コロニー”の必要と実現の願いに、即刻“52円”を種として捧げてくださった久布白落実先生のお言葉と行為。そこから始まった『コロニー後援会』に一奉仕女として参加し、募金活動に会社四季報を手会社に廻り、チャリティー映画会を企画開催するなど、コロニー実現に向けての一途な歩みも、一つひとつ懐かしい思い出、すべて貴重な体験でした。

こうして、“コロニー”の誕生に関わり、その有り様にも深い関心を寄せていた私自身が、具体的に村の暮らしの一員となったのは、1978年の4月。まず施設長に尋ねられたことは「何をしたい？」でした。必要なところで、と答えて、洗濯作業担当とゼミア寮担任に。

「かにた村に来て2か月が過ぎた——さまざまな経験を新たにする中でも、6月の崖くずれと、その後始末——土砂運びのバケツリレーに仲間入りして、共に汗を流した体験に、この共同体の仲間入りを実感した——」と『ディアコニア』誌に記した実感は、今も鮮明に心に残り、その思いは今日も、かにたに暮らす私の原点ともなっています。

「何をしたい？」主体性や自発性をだいにした言葉は、入所の一人ひとりにも投げかけられる言葉であり、精神であり、信頼に満ちた言葉ともなって、どれほど一人ひとりはこの言葉によって自己を見いだし、隠れた^{ちから}能力が引き出され、生きる喜びと誇りへと導かれ、また育てられたかを思います。わたし自身も然りなのです。主体的に自発的に発想し、提案し、実行に移すことが許された世界。もちろん、創設者の後を受けて施設長の立場に就くことを命じられた1989年以前のことです。

1981年1月に、デイジー寮をB型肝炎罹患者と重症夜尿の人と心身病弱者のた

めの準看護棟とすることを提案して担当し、その人たちと、木工作業班を再興して、塗装屋となり、村内を廻って剥がれた白壁をローラーを使って塗り直し、錆が出た手すりの錆落としと塗り直しなどの作業は楽しく、しかし、2年半後、新豚舎に全員で鞍替えし、安田寿太郎さん指導のもとで養豚作業に就きました。が、1年半、調理職員全員交代の折、請われて私のみ調理で1年。その後庶務2年を経て、1989年4月施設長職に就き、2013年3月31日までの24年間を、同労の全職員と村人たち、そして間接的にベテスダすべての方々、また婦人保護関係の方々に支えられ、助けられ、励まされて、五十嵐逸美現施設長にバトンタッチできましたことは、本当にありがたいことでした。

施設長としての能力^{ちから}を持ち合わせた者でないことを承知しつつも、ただ“共に生き”、共に創造する村を愛し、『底点志向』を原点にしつつ、また、主体性、自発性を重んじることを唯一の姿勢として務めさせていただきました。そして、なお現在も、引き続き村での暮らしが許され、感謝にたえません。

1998年5月に深津春子先生を、2年後8月に創設者を天にお送りし、更に54名もの村人を天に送りました。残された者の淋しさを重ねつつ、一面天に大家族の在る思いを、村人と共に深くしてきてもいるのです。

創設者を天にお送りしたころの村の状況は、高齢化が進み、見守りの手の必要

を訴えに厚生省を訪れたのは2000年のこと。2002、2003年に指導員2名の加配を受けたのですが、一方“健全な運営計画”を求められ、同時に新規入所が止められました。この深刻な問題に『高齢者問題検討委員会』を立ち上げて検討を重ねて10年。

2013年、長期入所施設に対する国の『運営要領』が改められ、新規入所者受け入れの停止も解除されて、さっそく9名の友を新たに迎えました。

長期であっても、地域生活への移行が可能となるよう支援する方向へと大転換しつつあります。この10年は重い10年でしたが、神の助けと導きを切に願う10年であり、また神の備えを思う10年でもありました。

この“変革”の中で、変えるべきものと、変えてはならないものを見極めつつ、殊に“創立の精神”を失うことなく、自分たちで作り出す村、創造する村、施設の独自性をもち続けていくことができますように。一人ひとりが生き生きと生きる社会であり続けるために。

“共に生きる”中で、時に生じる人間関係の難しさや苦悩の中に、生まれ育った赦し合い、認め合い、助け合い、信じ合う心を『共生』50年に実った果実として尊く思います。

50年を顧みて、改めて思いますことは、この50年を共に築いてくださった強力なご支援についてです。ここに心からの感謝を申し上げ、さらに今後ともご支援いただきますようお願い申し上げます。

「売春防止法改正」に伴う 全国婦人保護施設等連絡協議会活動の流れ

全国婦人保護施設等連絡協議会

会長 横田千代子

全国婦人保護施設等連絡協議会（以下全婦連）は女性相談所（都道府県に義務設置）と婦人保護施設（任意設置）によって構成されています。

1956年に売春防止法（以下売防法）が制定され、法律第4章「保護更生」に婦人保護事業として位置づけられ、事業活動が始まりました。その前身は1951年の『全国婦人福祉施設連合会』であり、売防法ができる以前から、終戦後の混乱期にあった女性たちの支援が行われていたのです。当時、施設も全国に17か所ありました。当時の施設が今なお引き継がれている施設もあり、半世紀を超えた女性支援の歴史を感じます。

売防法制定時、連絡会は婦人保護施設のみでしたが、1999年に女性相談所が加わり、名称に「等」が含まれるようになりました。相談所が施設協議会に加わることで、措置から支援へ、関係の流れが可視化され、婦人保護事業の働きが機能的・有機的に動き始めました。

売防法第4章「保護更生」にある対象女性は“要保護女子”と規定され、法律上“性行又は環境に照らして売春を行うおそれのある女子”とされています。し

かし、売春を行うおそれのある女子の背景には当時、貧困・障害・家族問題・暴力等複合的な問題を抱え、行き場所のない女性たちの姿がありました。まさに福祉的支援が必要な女性たちであり、対象の枠はさらに拡大されていったのです。婦人保護事業は、そのような状況に追い込まれた单身女性を支援する、日本でただ一つの事業なのです。

2015年現在、婦人保護施設は全国に48施設（公立公営22、公立民営8、国立民営18）あります。うち、『かにた婦人の村』は、厚生労働省直轄の、日本でただ一つの長期婦人保護施設です。自然に恵まれた環境の中で、全国からの入所者がゆっくりと心の交流を図っています。婦人保護施設の原点にある施設として位置しています。

現在、婦人保護施設全体の利用率は年々低下の一途をたどっていて、その理由について、全婦連としても様々に検証しています。施設形態の違いから一概には言い切れませんが、公立公営施設の様態が自立支援機能には程遠い状態にあるため中長期の支援に利用ができない現状も、低下の要因の一つと思われます。

しかし、いちばんの大きな要因は、根拠法の売防法にあると思われます。売防法は、法務省所管の刑事特別法である部分と、厚生労働省所管の福祉的支援が求められる部分とが混在し、現状の女性たちのニーズとはかなり乖離しており、法制度の狭間にある女性たちに手が届きません。支援の限界に突き当たっています。

今、全婦連では、「保護・更生」から、女性の人権擁護と自立支援へ、現行法（売春防止法）の限界と課題を超えて新たな法制度を考える動きが始まっています。さらに、性暴力被害者への回復支援センターの設置を求める声も、多くの支援者から切実な訴えとなって動いています。

2008年4月、全婦連・民営施設長会の下部組織として『売春防止法見直し検討会』を設置し、座長に宮本節子氏（フリーソーシャルワーカー）を招き、概ね毎月1回の検討委員会を開き、改正に向けて活動してきました。しかし、改正の道りは厳しく活動は行き詰まっていました。「このままでは終われない」と突破口を開くべく、当時の厚生労働大臣小宮山洋子氏を訪ね、現状をお伝えし、売防法改正の要望を申請いたしました。2012年4月12日のことです。大臣から「改正しましょう」と励ましの回答をいただき、一気に改正の機運が高まりました。

2012年5月、厚生労働省雇用均等・児童家庭局により『婦人保護事業の課題に関する検討会』が設置されました。お茶の水女子大学名誉教授の戒能民江氏を座長とし、学識者、行政関係者、施設現場、民間シェルターなどから検討委員が選ば

れ、5回の検討会が開かれました。国主催の検討会に関係者一同が会したのは、売防法制定以来初めてのことでした。

残念ながらこの検討会が改正につながることはありませんでしたが、2013年3月『婦人保護事業の課題に関する検討会のこれまでの議論の整理』がなされ、『女性相談センターガイドライン』（2015.3）、『婦人相談員相談・支援指針』（2016.3）が策定されました。現在は、『婦人保護施設調査検討会』（2016.8）が設けられ、第1回は全婦連、婦人保護施設（慈愛寮）からのヒアリングが行われました。まだ、スタートしたばかりです。

2014年12月、全婦連として『売春防止法改正に係る要望書』を作成、厚生労働省・法務省・内閣府男女共同参画局に届けました。上川陽子法務大臣には、直接お目にかかることができました。

要望事項の中心は「**女性の人権を保障し、自立を支援する視点から売春防止法を改正すること**」とし、売防法の第4章を抜出して新法の制定を行うこと、買春者の処罰、性暴力禁止への整備などを含むことを明確に打ち出しました。また、時間を見てロビー活動も行なっています。さらに、『売春防止法改正実現プロジェクトチーム』も立ち上げ、より明確な活動にも踏み切りました。

2016年、売防法制定60年を迎えます。今、この時に歴史を振り返り、全婦連として女性の人権に起立した新法の制定に向けて、多くの方々のご協力のもと、しっかりと取り組むべきと、一同心新たにしています。

かにた婦人の村50年に想う

——人・思想・営み・継承——

元文京学院大学人間学部教授
慈愛寮を支える会会長
社会福祉法人大洋社スーパーバイザー

林 千代

「かにた婦人の村50年」と声にして言ってみました、2、3回。さまざまなことが浮かんできました。しかし、私の脳裏が描けるのは、ほんの断片でしかありません。けれども、どれもこれからのこと、もちろん「女性の生が性を理由に脅かされる状況への支援」（私は「女性福祉」をこのように定義しています）を考え続けていく限り、私にとって「かにた婦人の村」は大切な存在であり続けます。

深津文雄先生は、全国社会福祉協議会（以下全社協）が売春防止法全面施行の時点において設置した売春対策関係者懇談会の委員でした。いずみ寮の寮長として。1960年（昭和35）1月のことです。以後、この懇談会は、名称を変えて継続していくのですが、たびたび深津先生や中野ツヤ東京都婦人部長から、精神薄弱、性格異常者（これらは当時の用語）が多いとの指摘があり、委員会のたびに会議の項目の一つとして上っていました。

その少し前、1957年（昭和32）ごろから深津先生は、コロニーという発想を有していて、郷司浩平氏の紹介状を持って

厚生省を訪ねています。広い所で、一生そこを出なくてもよい永住地をつくろうという構想でした。ともかく「手のかかる人をとってくれませんか」と言われ、精神薄弱者、性格異常者のためのいずみ寮をつくりました。周知のように、開所式の1～2か月後に訪れた久布白落実女史と彼女を囲んだ寮生たちとの会話からコロニーへの舵が切られるのは、その直後のことです。「コロニーをつくってください」という一寮生の願いと、久布白先生が小銭入れを逆さにしてテーブルに乗せた幾ばくかの小さなお金——その時点から、かにた婦人の村はスタートしたというのです。もう一つのきっかけは、そのころ開かれた全国の施設長会議で、婦人保護施設の施設長たちが「半年で社会に帰すはずだと思っていたが、そんなわけにはいきませんよ」と言い始めたことがあって、先生の意志は、確実になっていました。

全社協の婦人保護委員会は、以後これらの諸問題をテーマとし、政府に対する予算対策にも取り上げ、厚生省関係の要

求の中には、そのトップに「1. 長期収容保護施設（コロニー）設置費を確保されたい」と載せています。先生からお話をうかがったとき、予算獲得のために寮生とともにデモをした写真を見せていただいたこともあります。一方、いずみ寮にてひたすら利用者と向き合って、全力をもって働き続けたディアコニッセの方々がおられました。時折、いずみ寮を訪ねるとき、お昼をご一緒しご挨拶します。柔和な表情に無言の教えを感じます。

学生の実習のお礼としてたびたび、夏休みなど泊めていただいたときは、少々の畑仕事、稲の収穫のお手伝いもさせてもらいました。寮生と一緒に。

先日、『エマオ』の開所式にうかがった折、式典が終わり施設内を散策しました。そのとき、あちら側から「先生」と声をかけられました。年を取るにつれ、お名前とお顔、その重なりを忘れがちになっていますが、寮生の方々であることはわかりました。手を上げて大きく振りました。どんなにうれしかったことか。あのシーンははっきりと脳裏に刻まれて離れません。田や畑、食堂などでご一緒した寮生の方々でした。

それともう一つ、個人的に特に関心があったのは織物です。全国から送られてくる古い着物を裂いて創る裂織です。着物を裂く作業をさせてもらいました。着物をほどき、裂いていくのは、あれほど埃が出るものとは思いませんでした。もうもうと埃が——その中で隣に座って

いた寮生たちから質問せめにあいました。一生懸命答えました。寮生の作った製品はどれも素敵でした。あるとき、全国裂織展を知りました。何回目かの展覧会の折、私はあるタペストリーの前で釘づけになるのです。その“夕焼け”の美しさに感嘆の声をあげました。かにた婦人の村の誰々との名前にも。あの美しさは忘れることができません。

2000年11月23日は、「深津文雄追悼のつどい」でした。私は、追悼の辞を申し上げる一人として出席していました。先生からいただいた『底点志向者ジェシュアガ』から「底辺ではなく底点まで降りて……『たったひとり』から始めるのです」と書かれてあるところを引用してお別れの言葉にしました。

小さな声をすくいとり、見えない力を見つける、小さな声を、見えない力を大きくする——私はこのことを深津先生から学びました。

——納骨堂の、あの静謐と

「噫、従軍慰安婦」の碑を

想いながら——

参考

『婦人福祉委員会から婦人保護委員会へ——全国社会福祉協議会の取り組みに関する資料集』

林千代編著 ドメス出版（2014年）

『深津文雄先生に聴く』

聞き手：林千代 制作：いずみ寮（2014年）

私のかにた、40年

かにた作業所エマオ

所長 佐々木 清

かにた婦人の村に就職したのは、開所10年目の1974年。ここは、まだまだこれからみんなで造ってゆく村でした。最初は作業Ⅲ班で果樹園の草刈、田植えや野菜作りをしました。3年が経過するころ、牛が来て、豚が来て、職員が入れ替わり、それぞれの職員に得意分野がありました。私はといえば、農業はあまり得意ではありません。臺のたったホーレン臺（ホーレン草）虫食いだらけのレース菜（山東菜）等を作っていました。でも無農薬で、化学肥料の使用は極力抑え、かにたの山中で集めた落ち葉と米ぬかで作る堆肥が主たる肥料でした。「虫も食わない野菜なんか食えるか」と強がっていましたが、名人が作れば無農薬でもそれなりの野菜ができました。

そんな中の1978年、秋山ちえ子先生から「盛岡に市民福祉バンクという障害のある方たちが働く団体があるから、見に行ってきたら？」とのお話があり、見学者の中に私も入れてもらいました。

盛岡市民福祉バンクで見たものは、新鮮で目から鱗が落ちるようでした。「盛岡市民からいらなくなった物をもらい、

みんなできれいにして買ってもらう。仕入れがタダだから損は出ない。障害のある者もみんなで働いて税金を納めよう」と言っていました。かにたにも少しずつ寄付品がありましたが、たくさん集めれば館山でもバンクのような仕事ができる、と思いました。

創設者の深津文雄牧師は、私の申し出に「まあやってみたまえ、衣のことは任せるから」と。かにたには“衣食住”のうち住は建物があり、食は牛と豚、果樹園、水田を借りて米作り、季節の野菜、毎朝の牛乳とヨーグルト、時々肉や乳製品（チーズ、バター等）がありました。足りないのは衣と現金収入、バンクのような活動が軌道に乗れば、それらも賄える。1人の職員が自分の給料を稼ぎだせば、次の1人が雇用できる。（お百姓さんは土地を元手に自分の給料を稼ぎ出している……深津文雄）

1980年から国際障害者年が始まり、障害者福祉とか地域福祉とか言われるようになり、かにたの職員も『わたぼうしコンサート』や『われら人間コンサート』の実行委員として活躍しました。コン

サート終了後の1981年、実行委員の方たちと会をつくりました。障害のある方もない方も共に一人の会員として活動する『ふれあいの会』です。初期の名称は『ボランティア・ふれあいの会』でしたが、「私、ボランティア」「私、障害者」という垣根もなく、行事や催事では一人ひとりができることをできるだけ、協力し合って進めました。『デフパペットシアターひとみ館山公演』『われら人間コンサート』『障害者用トイレマップ』事務局は、ずっとかにた婦人の村の職員が致しました。

1988年、障害のある方たちと交流する中で、ある車いすに乗った方から「佐々木さん、俺達の働く場所はないかねー？」と。館山市にも福祉作業所はできていましたが、そこに馴染めなかった方たちもいました。そんなとき思い出したのが『盛岡市民福祉バンク』のことでした。「いつかは地域の障害のある方たちと共に働く場所をつくりたい」と思っていたこと。でもそのときは実現しませんでした。

それから25年、2014年4月発足、6月1日千葉県の認可で『**就労継続支援B型事業所 かにた作業所 エマオ**』が開所しました。かにた婦人の村に就職してからちょうど40年が過ぎたときでした。

エマオの職員は私と私の妻を除いて30～40歳代の働き盛り。かにた婦人の村での経験が6～8年の5名の女性と1人の男性。PTAの役員や自営業など、子育てや地域活動にも忙しい方たちですが、働いている時間を無駄にせず、気がついたことは自らの判断で進めてくれます。彼女たちの判断も私が求めるものからあま

り違ってないので、任せられることが増えてきています。

全国からたくさんの方の寄付物品いただき、値段を付けてバザーで買ってもらう。送ってくださる方には、「何でもいただきますが、バザーで買っていただけそうな物が嬉しいです」とお願いしています。

当初1名だった利用者も、現在（2015年8月末）は9名、他にも利用希望の方がいます。今までの作業所に馴染めなかった方や10年近く引きこもりだった方など理由はいろいろですが、エマオが利用者さんたちの再出発の場所になれば幸いです。エマオを卒業してA型事業所や一般就労に行けるよう、職員一同支援してゆくつもりです。

『わたぼうしコンサート』や『われら人間コンサート』の実行委員として参加したとき、深津施設長から「福祉施設は地域福祉の資源であり職員は地域福祉のリーダーたれ」と言われました。先日、実行委員の親睦会が35年ぶりに開かれましたが、役場の若手職員だった方は「〇市の福祉課長を最後に定年退職しました」とか「暴走族の〇〇連合が障害者の送迎をしてくれたよなー」「〇〇連合の会長は今じゃ〇〇市議員だし…」とか。

かにた婦人の村も、初期の「自給自足」「最後は看護棟のユッカで暮らそう」「墓へ入るまで一緒に暮らそう」「死んだらみんな納骨室へ入れる」などの話は、夢の中の夢のような話になってきましたが、この40年で社会が変わってきたのだから、「かにたも時代にあった施設が変わってゆくのだろうなー」と思っています。

かにた婦人の村へ48年

LBF(労働兄弟愛舎)

鈴木俊治

67年夏休み直前、大学の同寮の宮下輝男君から、「千葉の館山でワークキャンプが有るのだが、鈴木も来ないか？」と誘われたのが始まりであった。卒論の実験も本格化する前でスケジュールは厳しくは無かった。むしろ、長期休みなると始めにアルバイトをしてお小遣いをためないといふ休み中の費用が捻出できないので、少しの間アルバイトを済ませて、お盆休みのワークキャンプに参加した。

内房線での館山は初めての訪問であった。仕事の内容は、陶芸の作業小屋建設ということで、泥岩の瓦礫のような土地に溝を掘り基礎を打つところから行われた。聞けば、千葉大学の建築科の学生が設計したとのこと。土木作業は、田舎で家の新築、改造などを見てきたので、手順は大凡分かっていた。問題は瓦礫のような土地に建てたとき安全なのかと心配になったことを覚えている。

それまで、社会貢献的なことといえれば、高校時代に赤十字の関係で目の不自由な人たちのための点訳を少し行ったことがあるぐらいである。連休ごとのアルバイトでは、「今日で何日仕事をしたか

ら収入は幾らになる」という計算をしてしまうのに対し、ワークキャンプはお金とは無縁なので、その想念に支配されないことに新鮮さを感じたものであった。

ワークキャンプの主催団体名は、労働兄弟愛舎(Labor Brother Fellowship)で『LBF』と称していた。リーダーは早稲田奉仕園を出た埴谷安弘さんで、熱心、かつ、厳格なクリスチャンで、ズボラに暮らしてきた私から見ると、融通が利かないという印象であった。このころに参加したメンバーは、東京大学、東京工業大学、早稲田大学、東京女子大、外語大学の学生やその卒業生が中心で、その他にクリスチャンの方や、勤め人などがいて総勢20人ぐらいであった。田舎育ちで口下手な私にとって、文科系学科出身のメンバーの弁舌の達者さは驚きであった。しかし、一方では、そんな観念的な議論はあまり意味がないようにも思えた。

これを切っ掛けに、長期連休ごとにワークキャンプに参加するようになった。次の年は、技術者として、研究開発の仕事に就くことになり、新しい環境で緊張の連続ではあったが、連休毎のワー

クキャンプの方も続けてきた。

作業の内容は、道路の整備、崖の補強、作業小屋の建築、台風や大雨による土砂崩れの後始末等、素人でも可能なものであったが、もともと手先が器用な性分で前述の、観念的な議論をするよりは、実際の作業に関わっていた方が存在感が得られた。

寝泊まりは、旧日本軍が東京湾入口を監視するために掘った洞窟であった。じめじめし、ゲジゲジが這い回っている洞窟に木製パネルを敷いて座り、就寝には米軍からの払い下げの野営用折り畳みベッドを使った。夜は、洞窟内で議論をしたり、歌を歌ったり、ゲームをして過ごした。リーダーであった埴谷さんは、厳格なクリスチャンで、アルコール、煙草は禁止。仕方がないので、洞窟を出て外で煙草を吸ったり、時には抜け出して、町の居酒屋で飲酒をしたりもした。

LBFの内部では、68、69年に盛んであった学生運動が萎んできて、社会に対するアピール力に限界を感じた人たちから、この活動をやめようと言う提案が出された。私はといえば、社会へのアピール力が乏しくとも、受け入れてくれる施設側に多少なりとも喜んでもらえるのであれば続けるべきだと主張した。かにたとしても、日ごろ閉ざされた中であって、偶にはあれ他の世界の人と接することは、経済的、物質的な支援のほかにも意味があるのではないかと考えた。実際、我々のような素人が作業小屋を建てたり、道路を整備したりするより、休日出勤や徹夜業務をして割増賃金

をもらい、それを送って専門の業者にやってもらった方が、明らかに実効的である。

このようにして、続けてきたワークキャンプであるが、90年ごろから、かにたで作業を行うことが無くなった。理由は、我々も高齢に達したこともあるが、かにたとしても、専門の業者さんに頼む余裕が出てきたものと考えている。現在は、多少の労力提供と年に一度の再会のために、70歳前後の7、8人(家族)で暮れの餅つきに通っている。

特段、アピールすべき主張や誇るべき成果もなく、かにたに48年間関わってきたわけであるが、私にとっては、かにたの人たちや、職業的に専門性の異なる人たちと接することができ、ともすると技術の世界に埋没しがちな自分の世界観、人間観を広くすることができたように思える。このような活動は誰かのためではなく、自分の為であるということ。さらに大袈裟に言えば、自我を確立した個人としてこの世界に向き合ったとき、そこで起こっていることは、多少なりとも責任のあることであり、その責任を果たす微かな行為であると考えている。

殆どが古希を迎えた我々は、良くも悪しくも枯れてきている。一方で、ささやかなこととは言え、枯れても続けられるのは本物ではないかとの考えもある。体が動く限り、寮生や、職員の方との交流を続けてゆきたいと考えている。

かにた婦人の村と上尾合同教会の関わり

日本キリスト教団 上尾合同教会

坂田 雅雄

上尾合同教会は、今から40年ほど前に、青年会の育成が課題となったとき、担当者に指名された佐藤健治さんと私が相談のうえ、何か中心になる活動が必要と考え、かにた婦人の村でワークキャンプをさせていただけないかとの話となりました。私の母が、一人のベテスタ奉仕女（青木しのぶさん）の『祈りの友』であったので、かにたのことは以前より母から聞いていたことと、私の母教会である聖和教会に所属していたときに、高校生とキャンプさせていただいた経験からの提案でした。

深津春子先生の『かにた物語』の末尾の年表には、1967年8月、聖和教会高校生会6名来援（6日間）と書かれています。このときに高校生を引率したのは、船戸良隆牧師（当時伝道師）と高校生会担当だった私、そして高校生4名でした。作業は山林の開墾、大木の根っこ掘り、1日かかっても掘り起こせない大木の根でした。聖和教会のワークは2年で終了しています。

次に年表の記録に登場するのは、1977年8月8日上尾合同教会高校生会9名来

援（3日間）との記載です。このときの参加者は、高校生4人（羽倉信彦、内田史子、飯田初生、佐久間牧人）と土門牧師、佐藤、坂田、他2名でした。

そしてそれから毎年、多いときには30名という人数の参加するワークキャンプが続けられました。作業の役にも立たない私たちを快く引き受けてくださったかにた婦人の村のみなさまに、心より感謝するしだいです。

最初のころ、宿舎は旧日本軍の指揮所があった洞窟でした。洞窟でのキャンプ生活は何よりも涼しさが魅力の場所で、板のすのこの上に毛布を敷き、そこで裸電球の下、食事や礼拝、聖書研究などを行うのが日課でした。

作業も最初のころは重労働（私たちにとっては）で、汗を流しながらの森林伐採、牛舎の隣にメタンガス発生装置造り、急斜面の階段造りなどをさせていただきました。

1981年には礼拝堂の最初の土掘り作業にも携わらせていただき、今でも礼拝堂を見るたびに感慨深いものがあります。その後、杉の下草刈りを数年、また宿舎

や階段手すりのペンキ塗り、礼拝堂の掃除などが続きました。

1985年には、深津牧師は、従軍慰安婦の碑を山の上に建てることとし、その作業にも携わらせていただき、重い木の柱をキャンパーの男性4人で山の上まで担ぎましたが、その柱の重いこと、イエスの十字架の重さを実感するような厳しい経験でした。

その後、洞窟の入り口が土砂崩れを起こしたため、キャンパーの宿舎は山の上の『たちばな亭』に移りました。趣のある古民家を移設した建物で、深津先生の所蔵する多くの書籍が本棚に置かれており、そこでも快適な日々を過ごしました。

かにたでは労働のほかに、寮生のみなさんとの交流も盛んに行われ、夏の夜店などの企画にも参加させていただき、フォークダンスなどでも楽しい交わりの時を持つことができました。

2001年には寮生のみなさんの宿泊旅行

で、上尾を訪問したいとの要望があって、壮年会や婦人会の多くの教会員の協力を得て、かにたのみなさんを埼玉に招待できたことも嬉しい、そして楽しい思い出の一つです。丸木美術館見学や川越の小江戸の見学などを企画し、また上尾合同教会で一緒に懇談するなど、寮生のみなさんにも喜んでもらったことも嬉しいできごとでした。

2015年で夏のかにた訪問は39回目を迎えました。これほど長く交流できたことを、心から感謝しております。しかし残念ながら教会員も高齢化が進み、近年はキャンプの参加者もわずかになってしまっています。作業などでは役に立たなくなっていますが、上尾合同教会員は、今後もかにた婦人の村と長く交流を続けていきたいと願っております。

心よりの感謝を込めて。

2015年 9月



1977年 8月 上尾合同教会として最初のワークキャンプ。作業と洞窟内での聖書研究のようす。



社会福祉法人 ベテスタ奉仕女母の家 について

奉仕女とは ドイツ語でディアコニッセ (Diakonisse) という。1836年ドイツでフリートナー牧師によって再興された、プロテスタントの社会救済事業に奉仕する女性献身者のことである。

その精神は、イエス自身が、神の国の福音を説くと共に、苦しんでいる人々を助けるために弟子たちを遣わされた事実
に端を発し、原始教会で7人の奉仕者が選ばれた意義もそこにある。

フリートナー牧師の再興により、今日ドイツをはじめ世界中に、国によって形態の違いはあるが、数万人が奉仕女の働きについている。

ディアコニッセとの出会い 深津文雄は日本神学校を卒業後、「既成教会に入ったら、イエスに従うことはできない」と牧師になることを拒んでいたが、宣教師の秘書になったことをきっかけに上富坂教会の牧師となる。

日本聖書学研究所を開設し、ラジオや講演などに多忙な生活を送っている時、「神学より実践を」と熱心に話すドイツ人宣教師ヘンニッヒから、ディアコニッセの実践のすばらしさを聞かされ、深く影響を受ける。その原点には青年時代にヘレンケラーに出会って、「弱い者の味方になろう」と誓ったことがある。



空腹のときに食べさせ



渴いていたときに飲ませ



旅をしていたときに宿を貸し

ツェーレンドルフの祈禱室にある

『慈悲の聖卓』より

ウィルヘルム・グロス 1948年作



わたしの兄弟である
この最も小さき者の一人にしたのは
わたしにしてくれたことなのである

マタイによる福音書25:40



裸なのを見て着せ



病気のときに見舞い



牢にいたときに訪ね

ベテスタ奉仕女母の家の誕生 「イエスの愛を運ぶディアコニッセ」の話をあちこちでしていたときに、その話を「心で聴いた」天羽道子が、日本で最初の奉仕女として献身を願い出た。

1954年5月23日、ベテスタ奉仕女母の家を創立。4名の奉仕女志願者の着衣式が埼玉県加須市の愛泉教会で行われた。

奉仕女の教育と訓練は、ドイツから来日したハンナ・レーヘフェルト姉とエリザベット・フォーリンガー姉の2人の奉仕女によってなされた。



1957年5月26日 第4回着衣式(茂呂)

ベテスタの初期の仕事 訓練期間を終えた奉仕女は、愛泉乳児院、双葉修道園、茂呂塾保育園など、必要とされるところへ遣わされた。

売春防止法の成立 1869年津田真道は『人ヲ売買スルハ禁スベキ議』を講義所に建白。1920年代には、公娼廃止運動がキリスト教矯風会や救世軍を中心になされた。矯風会は1894年1月大久保に慈愛館を開設、1900年7月には救世軍が築地に婦人救護所を開設している。彼らの根強い運動の結果、自治体も次々と「公娼制度の廃止」を可決するようになっていった。

1956年3月7日、国会の売春対策審議会が設置され、『売春防止法』をつくり上げた。1955年に提出された『売春等処罰法案』は否決されたが、この『売春防止法』は、前年の反対票も集めて、1956年5月21日に成立。「彼女たちは加害者ではなく被害者である」と売春対策審議会会長菅原通済は知っていた。

いずみ寮の開設 奉仕女の仕事とはなんであるべきか。安い労働力として安易に使われてはならない。

「日本で生まれた奉仕女——ということは、日本独自の問題を奉仕女独自の方法が解決するというでなければならぬ。日本独自の問題と言え、売春ほど大きなものはない」「しかし、牧師と奉仕女にそれがやれるか——という声は、きわめて強かった」

「イエスは、どのようにして、税吏、罪人、遊女を救済したか。経験によってか、いや経験がなかったゆえに……ではなかろうか。異物を異物と知りながら、そのまま受け入れる心である。愛である」

売春防止法が成立したその夏、深津は久布白落実を訪ねた。久布白は「そのほ



いずみ寮定礎式

うがなんぼいいかしのないねえ」と言った。その言葉に背中を押されて、売春

防止法完全施行の1958年4月1日に、婦人保護施設いずみ寮は開設された。

コロニーへの道

コロニー構想 「コロニーというのはむかしからの、ぼくの理想なのである。上富坂で、茂呂で、いやもっと以前から、いろいろな人の世話をした。けれども、それはうまくいかなかった。要は、コロニーがないからである。ひとり社会に生きるには弱すぎる人を、清くたくましく、生きさせる場所がなくてはならない」

いずみ寮の実践 「よそで引き受け手のない人を、みんなどうぞ……」と始まったいずみ寮の生活は、奉仕女たちが共に暮らすことから始められた。

しだいに寮内外の家事や園芸などを分担することができるようになると、仕事らしい仕事がしたいと言い始め、洋裁、ビニール紐のバッグ作り、ガリ版印刷などが始められた。また、希望に応じて、料理、国語、英語に加えて聖書の勉強などの夜間大学も始まる。その中から1958年の降誕祭には、9人が洗礼を受けた。

そして、カマボコ兵舎をもらって、パン屋を始め、1960年の夏には、コロニー

建設への熱意を分かちあう学生たちのワークキャンプで



ブロック積みみの小舎が狭い敷地内に建てられる。鶏舎、豚舎、印刷部、廃品部、洗濯部、製菓部が次々と始められた。これを、“小コロニー”と呼んでいた。

コロニーの必要性 売春防止法施行の4月、都道府県ごとに婦人保護施設が開設されたが、どこも困難を極めていた。「いずみ寮を始めて直ぐに分かったことは、彼女たちは重いから落ちたのだということ」「ひとりの人間が、苦しみの海に身を沈めるからには、ただ貧しいだけではあるまい、それに先立つ障害があるのではないか……。果せるかな、彼女たちの大部分は、何らかの意味で知・情・意に障害を持つ、不運な人々でした」

その時代、社会には受け皿もなく、彼女たちは社会に出ても、またすぐに転落。社会復帰の難しい人々が、肩寄せ合って生きていくためのコロニーの必要性が、厚生省などからも上がった。



コロニー実現に力を尽くした人々 いずみ寮の実践は広く報道され、国家の売春対策審議委員会・松原一彦は、「どこかにそういう所を作らなければならない。宗教家でなければ、そういうことはできない」とコロニーの実現を強く押し進めた。

「何人もこの世に生をうけるかぎり、全く無用の存在というものは、ありえない。これらの無用といわれる人々のなかにも、かならず、なんらかの可能性を発見しうるにちがいない。それがどうしても見えないとならば、それこそ、信ずるほかはない」と、コロニーは出発する。

かにた婦人の村50年の歩み (年表)



1964年5月 台地の上が管理棟の建設予定地

1970年9月23日 ベテスダの日の集合写真



1954年

- 1月10日 文京区小石川の上富坂教会に奉仕女志願者4名が集まる。
- 5月23日 奉仕女志願者4名の着衣式。ベテスダ奉仕女母の家創立。館長深津文雄。

1955年

- 7月20日 第1回理事会開催。ポール・エス・メーヤー、小崎道雄、賀川豊彦、榊原千代、池田春江。

1956年

- 5月24日 売春防止法成立
- 8月25日 キリスト教婦人矯風会の久布白落実氏に婦人保護施設開設について相談。
- 9月25日 慈愛寮に奉仕女1名派遣。
- 10月11日 社会福祉法人認可。

1957年

- 2月2日 練馬区大泉学園町の土地買収。
- 6月25日 東京都へ婦人保護施設の打診。
- 11月9日 婦人保護施設計画書を東京都受理。
- 12月11日 厚生大臣堀木鎌三に100万坪のコロニー提案。

1958年

- 4月1日 大泉学園町に婦人保護施設いずみ寮開設。施設長深津文雄。
- 6月6日 久布白落実氏、いずみ寮を訪れ、財布にあった52円をコロニー建設の種としてまく。
- 11月30日 ディアコニ誌28号『コロニー特集』
- 12月1日 コロニー後援会始まる。

1959年

- 1月4日 朝日新聞に『新しい村づくり』
- 12月18日 コロニー予算のため各所に陳情

1961年

- 1月19日 コロニー予算通らず。
- 10月25日 全国社会福祉大会でコロニー要望決議。
- 12月21日 予算獲得大会、デモ、国会陳情。

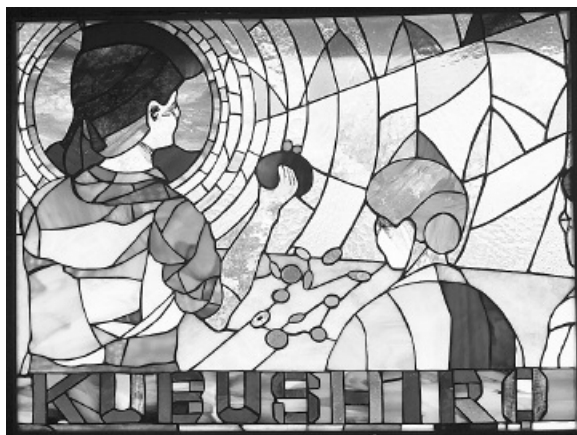
1962年

- 1月12日 コロニー予算通り、小委員会開く。施

コロニーの種

1958年4月にいずみ寮が開設され、その6月にキリスト教婦人矯風会の久布白落実氏らが訪れた。深津施設長が案内を終え、食堂で寮生たちとお茶を共にした。そのとき、寮生の1人MYさんが自らの希望を語った。「わたしたちは身も心も弱いから、助け合って、一生きれいに暮らせる村をつくり出したい。先生は顔が広いから、ぜひ国会の方にも働きかけて、わたしたちのコロニーを実現するように助けてください。」

これに対し久布白氏は、「何ごとも、人頼みでできるものではない。そう思ったら、今日、自分で始めなさい。足元の第一歩から……。わたしが今日、種をまくから、これを育てなさい」と言いながら、食卓の上で財布を逆さまにした。ジャラジャラと落ちたものが52円あった。これがコロニー後援会の始まりとなった。



久布白落実氏がコロニーの種をまいた場面。かいた教会のステンドグラスのモチーフになっている。

種を育てる

コロニーの種はまかれ、コロニー後援会も始められた。が、1961年の予算には通らなかった。そこで、いずみ寮の人たちは、予算獲得のために街頭行進をし、国会に陳情し、ようやく1962年にコロニー予算は国会を通過する。



朝倉満千子氏を中心にB5・8頁の立派なパンフレットが作られ、それを持って寄付集めにかける。大企業や大手銀行などにも突撃。東京銀行協会より150万円の寄付の知らせを受け取り、銀行廻り担当の奉仕女と喜んだり、大晦日に資金繰りの目途が立たないところへ、西独の『世界のパン』より900万円の寄付が届くなど、多くのドラマもあった。

このパンフレットには菅原通済（売春対策協議会々長）、久布白落実、郷司浩平（日本生産性本部専務理事）、市川房枝、小崎道雄（霊南坂教会）、秋山ちえ子、鶴見俊輔、神崎清の各氏らが名を連ねた。「この仕事は、普通の月給取りにできる仕事ではありません」「やりたい人があるうちにやってもらわねば」「彼女たちに平安な生活のできるコロニーを与えることは国はもちろん、私たち一人一人の責任ではないでしょうか」「奮発をお願いします」と書かれている。

設連合会、婦相会、全社協、都の代表。

- 2月7日 厚生省生活課長の案内で、千葉県館山市の国有地、双子山砲台跡3万坪を視察。
- 7月3日 石原憲治博士、同地を視察。
- 8月29日 岩井要建築士、同地を視察。

1963年

- 2月15日 国庫補助金交付申請ようやく提出。
- 17日 朝日新聞に資金難が報道される。
- 5月17日 館山市福祉事務所長、いずみ寮視察。
- 7月1日 館山市長の同意書届く。
- 9月3日 立木は地元民に、土地は3,000坪までという反対運動。
- 10月21日 地境確認、立木測量。
- 11月19日 『コロニーへの参加』パンフレットができ、募金活動開始。大手企業を廻る。
- 12月26日 千葉県財務部にて国有地9,003坪売買契約。

1964年

- 1月10日 八千代建設KKと工事契約。
- 4月1日 年度内開設を予定して職員6名採用。
- 5月8日 売春対策推進委員5名現場視察。
- 29日 神田共立講堂で、『路傍の石』慈善試写会1800人余。
- 7月7日 キブツ・セミナー・ワークキャンプ（以下WC）18名来援5日。
- 7月20日 エキュメニカルWC34名来援25日。
- 8月18日 早稲田奉仕園WC56名来援8日。
- 10月10日 早稲田奉仕園、兄弟会WC25名来援5日。
- 11月5日 カニタWC準備会22名来援5日。
- 26日 全国婦人相談所心理判定員43名来訪。

1965年

- 2月8日 職員4名移住。布団200枚つくる。
- 14日 職員2名移住。
- 27日 カニタWC準備会38名来援9日。
- 3月25日 職員9名と寮生2名移住。全職員揃う。
- 31日 朝日新聞『かにかた開村』

- 4月1日 **かいた婦人の村開設。**
施設長深津文雄、他職員14名。
兵庫5名入所。
- 5日 岩手1名、東京17名入所。
- 7日 長野2名入所。
- 8日 福岡5名入所。
- 9日 静岡2名、佐賀1名入所。
- 10日 岐阜2名、群馬1名入所。
- 11日 北海道7名入所。
- 13日 山形2名入所。
- 14日 神奈川1名入所。
- 15日 神奈川2名入所。
- 16日 神奈川3名入所。
- 18日 山上で復活祭。礼拝後の卵探しは以後恒例となる
- 23日 大阪3名入所。
- 26日 **開所式。三笠宮殿下はじめ53名の来賓。**
- 29日 カニタWC21名来援7日。
- 5月2日 日曜日は食堂を閉じ、各寮で自炊。
- 4日 NTV『完成した婦人の村』放映。
- 24日 井上文子さん、隔週で華道教室始める。
- 6月1日 崖崩れ甚だしく、D寮生をE寮へ移す。
- 14日 政治学習始まる。
- 28日 愛知3名入所。
- 29日 全国婦人保護施設連合会150名来観。
大阪の坂田京子さん、会堂建設のためにと寄付金を集めてくださる。
- 7月6日 武蔵野教会青年会15名来援4日。
- 10日 カニタWC24名来援11日。
- 26日 聖和教会シオン会11名来援4日。
- 8月1日 **夏祭りが始まる。踊り6夜、遊戯、音楽、映画など2週間続ける。**
- 2日 東京9名入所。
- 10日 大阪1名入所。
- 13日 広島1名入所。
- 18日 中央大学YMC A12名来援7日。
- 27日 カニタWC20名来援10日。
- 9月15日 東京1名入所。

かいた婦人の村誕生

4月26日、開所式は、三笠宮殿下はじめ53名の来賓を迎えて、バッハのブランデンブルグ協奏曲4番の2が静かに流れる中、始められた。



三笠宮殿下は、日本聖書学研究所での関係を述べられた後、「研究と実践は両立しがたいのに……」と結ばれた。厚生大臣の祝辞は社会局長が代読、国会議員として市川房枝氏、売春対策委員として菅原通済氏と千葉県知事夫人、館山市長と祝辞をいただいた。中村屋の長塚さんらにより準備された祝宴では、「深津さんが来て、千葉県はたいへんな得をした」と松原一彦氏。「コロニーができて、深津さんは大損をした」と久布白落実氏。



玄関前には、54人の村人と職員一同が、並んで、歌を歌った。

「主よ われらたつ

手に 手を とりて……」と。

最初の1年

初年度の入所者は87名。いちばん困る人からどうぞと言ったものの、一刻も早く引き受けたため、「気の狂いそうな事故続出です——苦情、脱走、拒食、暴力、自殺未遂、発狂——。そのころは全職員が住み込みで逃げる場所もない。職員も入所者も、まるで伸びきったゴムのよう疲れ果てて、リズムを失っていた生活」の中で、「日曜日は食堂を閉め、土曜日は大掃除と遊戯会という希望が出、華道でも政治でも勉強しようというグループが生まれた」（『かにた便』9号より）

夏…「思いきって毎日のように海水浴に引率し、近隣のにぎわいに対抗して、かにた夏祭りを、ドドンコ、ドドンコと連夜打ち上げるまでに盛り上がった。村のエネルギーを発散させるために、ゲーム、仮装行列、音楽会、映画会と大盛況」

秋…山の畑の芋掘り、芋喰い、生まれて初めての運動会、近くの里見城址へ本物の遠足。



冬…「そして1年中のハイライト——降誕祭。歓楽と狂態の思い出しかない人たちに、だからこそ本物の降誕祭を最大のエネルギーを傾けてやってみせようと決意。古くティロルに伝わる民謡を組み合わせて、自作のページェントをした」

- 23日 法人のつどい『ベテスダの日』をかにたで開く。89名来訪。
- 10月3日 バッハ合唱団12名来演。
- 4日 愛知1名入所。
- 9日 山上で初の収穫感謝祭。
- 11日 新潟1名入所。
- 24日 山上で大運動会。NHK取材。
- 11月20日 カニタWC10名来援4日。
- 25日 『いと小さく貧しき者に』出版。
- 28日 会議室でアドベント第一主日礼拝。日曜礼拝を食堂から会議室に移してミサ形式に。
- 12月7日 文集『かにた』創刊。233部。
- 25日 市民を招き食堂で降誕劇。終了後は会議室で茶会。
- 29日 白を借りてもち米140キロを皆でつく。以後29日の苦餅つきが恒例に。

1966年

- 1月1日 山上で元旦礼拝。
- 2日 歌合戦。
- 3日 羽根つき大会。幻灯会。
- 13日 北海道3名入所。
- 15日 成人式2名。卓球大会。
- 19日 宮城1名入所。
- 25日 共立講堂で慈善試写会『かもめの城』
- 2月4日 寄付衣料を食堂でバザー。
- 17日 喜村永哲氏の心理相談始まる。
- 19日 毎月の誕生会始まる。
- 3月3日 救世軍とインマヌエル教会婦人会6名来援。
- 7日 東京10名入所。
- 14日 大阪1名入所。
- 18日 石川1名入所。人生の勉強会、週1回で始まる。
- 24日 鶴川学院保育科生2名来援。
- 4月4日 マタイ受難曲を3日3晩に聴く。
- 8日 TBS『婦人ニュース』に放映。
- 10日 雨のため食堂で復活祭と競技会。

- 11日 市川房枝氏ほか婦人会館職員来観。
 28日 琴の勉強会始まる。
 29日 製陶作業棟建設始まる。
 5月3日 管理棟前で月1回の競技会始まる。
 6日 小湊の誕生寺、清澄山へ全員バス旅行。
 6月16日 絵画の勉強、週1回で始まる。
 24日 貯水槽工事開始。館山市の水道をひく。
 7月2日 朝日新聞山口秀和氏来援。映画会。
 10日 カニタWC37名来援14日。
 18日 茂呂塾保育園27名、会議室に3泊。
 24日 千葉大学SC30名来援21日。
 8月2日 香川学園生金龍道子さん調理奉仕1日。
 6日 かにた夏祭り8夜。
 26日 労働兄弟愛舎(LBF)18名来援10日。
 9月3日 初めての稲刈り、餅米150キロ。
 製陶工場棟上げ。
 16日 仙台の阿部明子さん来援7日間、D寮に起居。
 10月9日 桶谷正一氏と東京合唱団7名来演。
 16日 毎週日曜午後のバツハ鑑賞始まる。
 18日 退所1名。
 26日 ついに水道くる。給水制限解除。
 11月2日 日体大プラスバンド15名、桶谷正一氏他2名来演2日。
 23日 23品におよぶ収穫を感謝する。深津施設長重態、館山病院入院60日。
 12月25日 無断退所第1号。

1967年

- 1月12日 雑誌『太陽』に「楽園」と紹介される。
 17日 農園を開墾、甘夏みかん134本植える。
 29日 12名を除く全員が衆院選に投票。
 2月3日 美術クラブ始まる。
 28日 退所1名
 3月20日 大島晃子さん来援4日。
 30日 東京3名入所。
 4月5日 時報としてウエストミンスター・チャイム鳴り始める。
 16日 NHK教育『一隅を照す』

水との戦い

「あの山は水がありませんよ」と断言した市の助役の言葉どおり、初年度から深刻な水不足に悩まされ続けた。毎日確保できる水はサク泉より5トンと市の給水が4トン。水道は引かれていなかった。

お風呂は週1回、行水1回。調理の皿洗いのためには1日3回1時間ずつ屋上のタンクのバルブを開けた。個人の生活用水はバケツ1杯と決められ、掃除用には雨水を貯めたものを使う。洗濯には洞窟の池の水を汲み出して用い、元気のいい人はかにた川まで下りて洗濯。熱いお湯にざんぶりと入りたい人は、作業班別に町の風呂屋へ歩いて行くことに。

ある日、地方紙の記者が、性病をばらまかれては困るという風呂屋の苦情を“市民の声”として伝えに来た。深津施設長は「性病は完治している、保菌者は行かせていない」と反論。その記者が、かにたの窮状を大きく取り上げてくれ、館山市が30万円の追加予算を取り、水道管を450m伸ばしてくれることになった。

早速みんなで力を合わせてツルハシで貯水槽を埋める穴を掘り、ついに水道がやってきた。水制限解除の翌日、浴室棟は朝から銭湯に早変わり。賑やかな笑い声が終日窓の外まで聞こえた。それでも夏には海水浴客で人口が4倍にふくれあがり、かにたの丘までは水が上がらない。給水車に頼る夏が何年も続いた。

1977年に、地元の農業用水を使わせてもらえるようになり、飲用水以外は「大賀用水」を濾過・消毒して用いている。

かにたの絵画

会議室の立派なテーブルの上にベニヤ板をのせ、四つ切の画用紙にポスターカラーで自由画を描く寮生13名。この日で22回目を迎えた『絵の勉強』である。

8か月たったこの日は、何かエネルギーの爆発が相次ぎ、1時間半があつというまに経ち、100枚一メの画用紙が足りなくなるほど。絵の具がまだ濡れて、ポタポタと落ちるのを、並べる場所に苦勞。

問題行動の多いASなど入って来るなり「くしゃくしゃするから今日は、うんと描くんだ」と云って、14枚の傑作を残した。

青のチューリップに青の背景からはじまって、畑・木・落葉・石、凡て力強い太い線描き。窓、黒一色の冬の梢。快い空間のリズム。無心に、思うところを描いていく。全く既成概念に汚されていない原始美術である。それにつられて、他の12名も黙々と絵筆をうごかす。

もし、このような平和な心情が彼女たちの生活の大半を占めうるならそれでも問題行動が起こるだろうか？

(『かにた物語』より)

この時のASさんの木の絵をもとに、かにたの入口の大きな陶板は作られた。

絵はその人の心の表現

絵画教室は途切れながらも続けられ、自室で描いた絵もプレゼントしてくれる。「どんなものをどんなふうにも描いてもいいのよ」という、すべてを受け入れてもらえる暖かい雰囲気の中で、一流のすばらしい作品が次々と生まれている。

- 5月12日 鎌倉江の島バス旅行。
- 6月16日 作業場建設の資金づくりのため共立講堂で慈善試写会『雨のニューオリンズ』1,400名。
- 7月10日 LBF14名来援15日。製菓作業場の建設にあたる。
- 21日 鶴川学院保育科13名来援5日。
- 26日 千葉大SCI 14名来援14日。
- 8月2日 茂呂塾児童団18名野営。
- 9日 いずみ寮より36名来訪、会議室に2泊。
- 9月7日 笠原美寿さん織物指導に来援。千葉支区婦人部19名来援2日。
- 24日 **製陶作業場竣工初窯。**
- 11月9日 全寮を紅白に分けて対抗運動会。
- 16日 藤原道子氏、長谷川俊氏、来訪。
- 26日 静岡1名入所。
- 28日 通院車として8人乗りボンゴ購入。
- 30日 退所2名。
- 12月4日 退所1名。
- 14日 新潟1名入所。

1968年

- 1月17日 神奈川1名入所。
- 2月9日 明星大学教授、学生4名来援。
- 23日 LBF16名来援7日。
- 3月6日 五味百合子氏来訪。
- 8日 LBF6名来援6日。
- 25日 信濃町教会WC16名来援5日。
- 31日 退所1名。
- 4月1日 満3年にあたり寮の編成替え。寮名変更あざみ、ばら、こすもす、だりあ、ふじとする。
- 24日 神奈川1名入所。
- 27日 LBF9名来援7日。
- 5月20日 テレビ東京『私の昭和史』に出演。
- 26日 バッハ合唱団24名来演。
- 6月4日 **絵画療法始まる。**
- 7日 陶芸班解散。
- 19日 縦笛の組(練習)始まる。

- 7月3日 韓国節制会長方好善氏ほか来訪。
 8日 清野久子さん来援13日。
 10日 明星大学酒井清氏らによる作業素質検査。
 13日 LBF10名来援11日。
 17日 神奈川1名入所。
 18日 聖書の組(勉強)始まる。
 25日 岩手1名入所。
 8月1日 毎朝のラジオ体操19日。
 8日 北海道1名入所。
 11日 小林いさ来援17日。
 15日 中野教会13名来援7日。
 21日 東京3名入所。
 23日 D寮でリズム訓練の試み。
 29日 静岡1名入所。
 30日 LBF10名来援9日。
 9月15日 中野教会10名来援7日。
 16日 大阪1名入所。
 27日 明星大学岡野恒也、森井恵美子、川村敦子3氏による行動評定尺度。
 28日 森井恵美子氏による合唱部始まる。
 11月1日 運動会に初めて鼓笛隊あらわれる。
 23日 収穫感謝祭、芋掘り。茂呂塾14名参加。
 12月15日 退所1名。
 23日 真殿史子さん来援7日
 25日 降誕祭、NHK国際英語放送『日本のクリスマス』に。

1969年

- 1月7日 明星大ギターマンドリン部22名来演。
 15日 板橋カトリック聖歌隊25名来演。
 24日 東京2名入所。
 3月25日 木村佳津子さん武田晶子さん来援7日。
 29日 製菓作業棟竣工。
 4月2日 明星大プラスバンド27名来演。
 3日 大山国男さん来援17日。
 16日 北の擁壁完成祝『コンクリの唄』
 19日 麓の洞窟開き、地下大水槽(水125トン)発見。

音楽の力

1969年7月25日NHKで『かにた音楽療法』が放送された。かにたの音楽療法とは、どんなものだったのだろうか。

当時、各国で音楽療法協会が発足、日本でも山松質文、桜林仁らが音楽療法についての啓蒙を始め、精神科病棟などでも音楽療法の実践が始まっていた。深津施設長は、米国音楽療法協会の機関誌を全部取り寄せて読み、かにたで何ができるかを模索した。

また、森井恵美子氏主宰の東京バッハ合唱団も初年度からかにたを訪れて、度々その歌声を聞かせ、かにたにも合唱団を作り、明星大学の研究チームとして、心理学的なアプローチも実施していた。

その中で、深津施設長は独自の『かにた音楽療法』を実践していった。

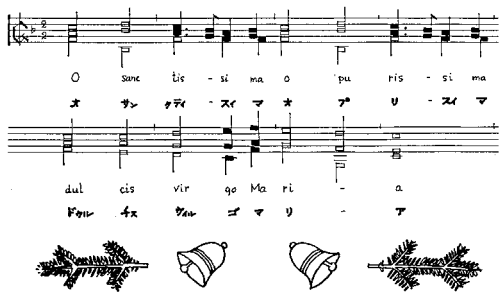
初年度の大混乱の中、愛犬の散歩にかこつけて海に出た彼はこう記している。「“祈ることもできないときは歌え!”というルッターの言葉を思い出し、ある限りの声量で、サンタルチアを怒鳴りました。……すっかり力をとりもどして帰ってきた私は、夕食の行列のあとに並ぶと、“みんなも、歌おう!”と『主よわれらたつ』から教え始めました」

「歌なら何でもいいとは思いません。身も心もささげてその歌になりきれのようなものでないと、まず自分がひるんでしまいます」

「はじめのうちは、だれも乗ってくれません。チョットこちらを見ただけで、あ

とは顔も上げないもの、全然口の開かないもの、唇のあいだに紙が1枚入るぐらいなら良いほうです)(じつは全国からさまざまな入所者を迎えた初めての夏、彼は美空ひばりの『真赤な太陽』を密かにひとり練習していた)

そうして教えた歌の数はどんどん増えて行った。降誕祭のラテン語の歌の数々も、告別式のレクイエムも、「コマ切れにして、くりかえしくりかえし教えるうちに、いつの間にか、ひとりのこらず、すっかりおぼえて、みごとに歌うようになるのです」(『かにた便』9号より 深津文雄)



「ある特定の限られた時間だけではなく、生活全体、丸ごと音楽に浸る」ために適当な歌が見つからないときには、誕生日の歌、ALKZOの歌など、自分でも歌を作り、絵入りの楽譜も作った。

こうして、混乱の中から、かにたという共同体ができていった。音楽は、みんなを一つにする素晴らしい力をもっている。いま降誕祭で、認知症の進んだSAさんは車いすに座り、大きな声で『オーサンクティーシマ』を歌う。また、命の終わるとき、『アデステフィデレス』は、THさんの耳に確かに届き、安らかな表情を見せる。音楽の力は大きい。

- 25日 東京1名入所。
- 30日 えにしだ寮を開設、自治で始まる。
- 5月16日 深津施設長夫妻、赤坂御苑に招かれる。
- 31日 西岡清志氏によるギター演奏会。
- 6月6日 **製菓作業開始。**
- 25日 東京2名入所。
- 7月20日 千葉大SCI12名来演17日。
- 25日 NHK『かにた音楽療法』放送。
- 8月5日 夏祭り10夜。館山民謡保存会来援。
- 8日 千葉大SCI10名来援13日。
- 11日 群馬1名入所。
- 14日 中野教会20名来援7日。
- 21日 基督高WC15名来援7日。
- 29日 LBF16名来援6日。
- 31日 退所1名。
- 9月1日 退所1名。
- 23日 厚生省児童家庭局長一行来訪。
- 10月31日 退所1名。
- 11月22日 『いと小さく貧しき者に』日本キリスト教団出版局より出版。
- 30日 退所1名。
- 12月2日 宮城2名入所。
- 15日 東京1名入所。
- 17日 小林美紀子さん来援10日。
- 24日 本格的聖夜の会食ついに実現。
- 25日 二声、三声、楽器も加わり降誕劇。

1970年

- 1月7日 石井豊氏の陶芸指導始まる。
15日 成人式1名
- 2月2日 **製陶作業班1年半ぶりに再開。**
7日 本籍不明の3名、館山で就籍。
17日 川崎静子さん河田真理子さん来援7日。
25日 岩手2名入所。
- 3月10日 東京都婦人部長、相談所長、相談員一行49名来訪。
20日 **銘菓『エンツィアン』完成。**
27日 明星大学岡野恒也氏による知能テスト。
- 4月2日 明星大ギターマンドリン部12名来演。
3日 明星大吹奏楽部29名来演。
15日 退所1名。
24日 退所1名。
- 5月1日 いずみ寮の洗濯作業機材をすべてかにたへ移し、**洗濯作業班始まる。**
2日 LBF15名来援5日。
- 6月1日 **自家製パン食始まる。**食堂での朝食始まる。
29日 衣料バザーに寮生委員9名参画。
- 7月9日 明星大学生12名ロールシャッハ検査。
17日 東京2名入所
- 7月27日 片柳和子さん来援24日。
- 8月3日 夏祭りは各寮選出の委員が計画し、新しく華道展、試胆会加わる。
7日 中野教会13名来援。
10日 館山民謡保存会来援2日。
19日 退所1名。
20日 早稲田奉仕園15名来援11日。
- 9月7日 川口シズエさん、千葉知夏子さん来援8日。
8日 明星大一行によるカラーピラミッド検査始まる。
17日 林千代氏来訪。
23日 ベテスダの日の会場となる。78名来訪。
- 10月11日 『ゾンタの泉』除幕式。
22日 12名の委員あげて運動会。

かにたのパン屋

いずみ寮の“小コロニー”で食パンを焼いていた製菓・製パン機械一式を、かにたにもらってきたが、電力不足で使えなかった。慈善試写会で資金を集め、ワークキャンプの青年たちの力で、製陶工場に次いで製菓作業棟が完成した。いずみ寮から来たSTさんを中心にして、共同作業のおやつに乾しブドウ入りのロックケイクを焼いたのが始まり。

ヨーロッパ旅行より帰った深津施設長のアイデアで、5種類の極上クッキーを『銘菓エンツィアン』と名付け、立派な箱に入れて売り出した。



エンツィアンを焼く

それ以来45年間、毎朝の食卓に、何もつけなくてもそのまま美味しいライ麦入りのパンやシリアルパン、ぶどうパン、上食パン、天然酵母パンが並ぶ。農園でかぼちゃが採れる時期には、かぼちゃあん入りのパンもリクエストされる。

かにたならではの食文化として忘れてはならないのは、復活祭のオスターツォフ（三つ編みのドイツ風フルーツ入りパン）と、降誕祭のフルーツケーキ。

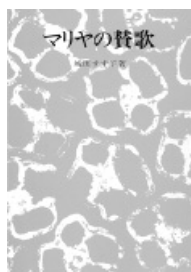
また、パウンドケーキやクッキーなども登場して村人たちを喜ばせている。

モーテル反対運動

かにた婦人の村の前にモーテルを建てる計画がもち上がり、事業主に建設中止を申し入れたが、頑として受け入れない。旅館業法では、禁止の措置が取れないことがわかり、藤原道子、市川房枝らの国会議員、厚生省生活課、千葉県婦人児童課等の協力を要請する一方、職員が笠名大賀地区の各家庭を回り、832名の署名を集める。地域の主だった人たちで『反モーテル地区代表会議』を結成。2か月後、相手方と、「健全な宿泊施設ならいざ知らず（中略）万一風紀上いかがわしい問題が生じ近隣に好ましからざる影響を及ぼした場合、即時閉鎖すること」等という契約書をもって終止符が打たれる。

マリアの賛歌

MYさん（城田すず子）は、1957年秋、ベテスダ奉仕女母の家に転がり込んだ。実家のパン屋が破産して16歳で売られ、国内外を転々とした末に更生の道を見つけたが、再転落しそうだとのこと。いずみ寮開設までの5か月間、軽井沢の古い家に奉仕女と住まわせていた。いずみ寮入所後の1958年11月、脊椎骨折で倒れ、絶対安静の病床で、小コロニーの第一歩としてのパン工場建設を夢見ながら自らの半生を口述した。扉に「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主をたたえます。この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました」という聖句が書かれている。



- 25日 退所1名。
- 11月18日 退所1名。
- 20日 LBF、ラザロ、エクレシア、早稲田奉仕園33名来援5日。
- 12月4日 宮城1名入所。
- 11日 毎日『夢でなかったかにた焼』報道。
- 17日 「主の道をそなえよ」と道普請。
- 20日 斎藤真子さん来援7日。
- 29日 やっと自前の臼杵で餅つき20臼。

1971年

- 2月1日 深津大慈来援。古い車庫をもらってきて編物作業棟を建てる。（完成8月、8/23編物作業再開）
- 3月6日 **モーテル建設反対運動**。大賀・笠名、海員学校などと共に署名を集め阻止する。（2/23～4月下旬）
- 14日 NHK『イエスの苦しみ』
- 29日 東京7名入所。
全寮メンバー移動。寮名変更あざみ～ふじからアネモネ～フリージア。行き詰まった人間関係を打開するため、ソシオメトリー調査も参考に。正副委員を互選し、委員会は深津施設長が指導。2寮に1名の寮母(ADF寮に常住)を置く。
- 5月31日 チャペルサイトで運動会。
- 6月26日 古沢渉氏のチェロ演奏。
- 7月8日 建築士岩井要氏と彫刻家掛井五郎氏来訪。
- 9日 海水浴開始。
- 30日 水道が止まる。夏は海水浴客で水が回らない。地下水槽の水も涸れ、奥の池の水も使い、飲料水は給水車を待つ。
- 31日 『マリアの賛歌』日本キリスト教団出版部より出版。
- 8月10日 中野教会、霊南坂教会、鳥居坂教会より12名来援7日間。東端の崖工事。
- 27日 早稲田奉仕園26名来援10日間。
- 9月1日 **木工作業班発足**。

13日 寮ごとの宿泊旅行。柏ブドウ園、西岬荘、榛名富士センター、九十九里センター。

10月2日 豆餅について月見。

11月8日 管理棟前で運動会。

11月19日 友愛学舎11名来援5日間

12月1日 YMさん退所。後に歌集を出版する。

1972年

1月3日 千葉銀行提供の映画会。

20日 AIさん入水自殺未遂。(2回)

2月24日 TBS取材1週間。沢木耕太郎同行。

3月19日 TBS『いま、この時に』

28日 作業中にSNさん指2本切断する事故。

4月2日 明星大ギターマンドリン16名来演。

5月4日 平本葉子さん、ボランティアでの散髪始まる。

17日 作業班別の宿泊旅行。鴨川シーワールド、鹿野山センター、上野動物園、養老溪谷、仁衛門島、上野・日比谷・銀座、鳩山荘、箱根。

20日 明星大弦楽合奏同好会14名来演。

28日 管弦楽部発足。

6月7日 深津夫妻ニューヨーク出張37日。

8月2日 夏祭りに縁日(模擬店)初登場。

9月15日 豪雨のため崖崩れ。エリカ寮埋没。

18日 16名を臨時で東京都に移す。

10月4日 水曜学校開始。

14日 食堂西側の階段開通。

30日 隣接地・笠名(ゼミア南半分)購入。

この後隣接地を購入し続け、ゼミア、ユッカ、2班、農園拡張と広げる。

11月23日 バッハ合唱団22名来演。

1973年

1月 正月の行事。卓球、羽根つき、映画会、歌合戦、マラソン、ゲーム、ダンス・ロックと若さの発散。

6日 深津施設長、フィリピン、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーラン

作六窯

1970年2月2日、1年半閉鎖されていた製陶作業班が再開され、作業6班と呼ばれ『作六窯』と名づけられた。当時指導をしていた深津文雄に「縄文人との出会い」と言わしめた、OSとの出会いの日でもあった。



推定27歳。4年たっても環境への不適合は嵩じるばかりで、相手を引っ掻く、噛み付く、ガラスを破る、食事の拒否。あらゆる作業からもはみ出していた。雑巾掛けに選ばれ、役割

りがある事が嬉しくて休まず通い始める。

ある朝、粘土の塊を一つもらうと、自分で小さなオダンゴを作る。作り続けること4週間。「陶芸家が来て、何か暗示を与えなければといいましたが、私は彼女のオダンゴが地球をひとめぐりして戻ってきても待っている」(文雄)

果せるかな、数週間の後、オダンゴは大きくなり、潰れてオセンベになり、オサラに見たてられ、やがて壁をめぐらし籠となり、器となった。



学びたい——水曜学校

エリカ寮の埋没から心機一転、何か楽しいことをやろうと、職員総出で開校。午前・午後・夜の部があり、第Ⅰ期は、国語、数学、童話、政治、絵、管弦楽、自由学級、手芸、ワンダーフォーゲル、茶道、料理、琴、卓球、コーラス。みんな、いそいそと村の中を行き交った。

ゼミア寮誕生

崖崩れのためエリカ寮が使えなくなり、急ぎよゼミア寮を建設。1階には個室が6部屋。2階の明るいホールは、日曜日の礼拝やクラブ活動などに使われる。ある日の礼拝には、市川房枝氏も来訪。

かにたの山の洞窟

戦時中、かにた婦人の村の山の麓一带に洲ノ崎海軍航空隊（洲ノ空）があった。乙22期洲ノ空会は所属していた方々の集まりで、当時中学を出たばかりの彼らは、飛行機の構造と修理、無線の勉強、あとは防空壕掘りの強制労働という日々を過ごしたようだ。29年ぶりに懐かしの山を歩き、谷を下り、その変貌に驚いていた。「山へこっそり入って百合根や山芋を掘って食ったなあ…」「風呂で石けんをよく盗まれた。近所の農家へあれを持っていくと飯を食わしてくれるから…」

彼らが掘った洞窟は2万人入れると言われ、かにたの山の地下全域にわたっている。帰りがけ、食堂で「7つボタンの予科練の～」と声をはり上げ、全員で歌ってくれた。

ドへ出張19日。太平洋ディアコニア会議出席。

- 17日 第2期（冬期）水曜学校始まる。
- 3月18日 NHK『生きる力』
- 26日 隣接地・笠名（衣料作業棟）購入。
- 4月1日 衣料作業班発足。
- 5月1日 **ゼミア寮開設**。15日落成式、20日より日曜礼拝をゼミアで。助手（各作業班の班長）6名。寮母（奉仕女による濃厚な生活指導）を廃止し、担任を置く。寮の編成替え（平均化）。村中の引越し。購買作業発足。
- 2日 東京より16名帰還。
- 14日 **土木作業班発足**。
- 26日 業者によりエリカ寮上の崖工事完了。
- 7月7日 水道止まる。
- 8月8日 食中毒発生、夏祭り中止。
- 9月24日 ベテスダの日に69名来訪。
- 10月26日 全国身体障害者スポーツ大会にSNさん出場。
- 11月1日 内閣の売春対策審議会菅原通済氏ら4名、厚生省生活課課長らとともに9年ぶりの視察。
- 23日 山頂で収穫感謝祭。例年と趣向を変え、作業班ごとに1品ずつ作る。腕によりをかけた豚汁、粕汁、お汁粉、五平餅、おでん、おにぎりなどが並ぶ。
- 12月18日 調理室床を修繕。

1974年

- 1月7日 降誕祭の献金をニューギニアへ。
- 2月11日 **乙22期洲ノ空会80名来訪**。
- 24日 日本テレビ『心やさしい女達』
- 4月28日 『潮』誌に『堀はあなたがた』
- 6月1日 FYさん逝去。これをきっかけに、各都道府県に6歳になったら措置元の県の老人ホームに移してもらえないかと打診したがナシのつぶて。10年目にして、終生収容と書きかえる決断を迫ら

れる。

8月1日 委員による夏祭り7夜。
早稲田奉仕園来援。かにた2号線の舗装工事、坂下から調理へ。

2日 洗濯作業棟完成。

11月6日 深津文雄に藍綬褒章。

12月18日 隣接地・大賀中神田（看護棟）購入。

25日 降誕祭。ページェントをやめて『カロールの祭典』に変える。来賓30名。

1975年

1月22日 5名の助手、水曜日の調理に当たる。

2月2日 朝日新聞『羽ばたけ思う存分』

3月31日 かにた婦人の村開設10周年を祝う。

4月1日 10周年無事故賞贈り始める。Nさん重荷だと返しに来る。

27日 市議選に“精薄者”の投票を断られる。

5月31日 平井信義氏らを招き、いずみ寮、茂呂塾保育園からも参加して10周年記念職員研修会5日間。

7月23日 浄水槽工事開始。水不足の夏に備え、大賀用水を有料で分けてもらうことが決まり、1km弱の導水路整備などの作業に夏のワークキャンプが全力投球。

9月10日 週刊文春に沢地久枝のルポ『性の地獄』

10月1日 コロニー後援会を発展的解消して、かにた後援会発足。『かにた便』第1号。

11日 園芸作業棟完成。

21日 10周年記念大運動会。県民の森で2泊3日。

11月25日 三芳村で自然農法を学ぶ。

12月4日 精米機購入。

17日 自家製半つき米食始まる。

1976年

1月9日 看護棟が建つまで、デイジー寮を看護棟にする。

12日 貯水槽工事開始。

2月4日 デイジー寮で看護作業班発足。

23日 ゼミア寮で毎週ビデオ教室始まる。初

10年目の決断

—— 長期から終生へ

1974年6月、クロッカス寮でFYさんが急性肺炎のため60歳で亡くなり、かにた婦人の村も10年目の反省として老齢化問題を考えるときがきた。

都道府県に「60歳になったら措置元の県の老人ホームに移してもらえないか」と申し入れたが、返事も来ない県がほとんどだった。婦人保護施設で生活した者は引き受けられないというのである。前の施設で指導困難とされた、人間関係の困難な人たちであれば、老人ホームでも難しいのかもしれない。

かにた婦人の村が10年目を迎えた1975年10月30日、婦人保護事業研究協議会関東ブロック大会で、深津施設長は、『かにた婦人の村の最重要課題・長期収容施設の終生化』について発言した。

一方、視察に来た厚生省生活課課長等にも、「収容者の4分の1が60歳を超え、今後のことを考えなければならない。どこも引取ることができないのであれば、住みなれたこの村を『終の栖』にしてやりたい。そのための特別養護老人ホームのようなものを建てたいが、政府から補助金を出してはもらえないか」と訴え、たびたび関係省庁に働きかけた。

ついに厚生省から「20名定員増」という形で、特別養護棟建設が認められる。この知らせを聞いてデイジー寮に待機していた人たちは、フトンの中で泣いた。

『街角の福祉』の応援



世田谷ボロ市

秋山ちえ子氏が「特別養護棟建設募金のための映画会に協力してほしい」という深津施設長からの手紙を受け取ったのは、1976年4月のことである。

「やはり、かにた婦人の村は彼女たちの終生の故郷として、手厚い看護のもとに人生を送るところでなくてはならなかったのです」と書かれていた。

秋山氏はさっそくその年の暮れに、歴史ある『世田谷ボロ市』（毎年12月と1月に開催）に『街角の福祉』という看板を掲げたチャリティーバザーを2回も実施。寒い中、タレントさんたちも駆けつけて、有名人の洋服などをオークションにかけ、できるだけ高く売ろうと盛り上がった。

かにた婦人の村開設以前から深津施設長と親交のあった秋山氏は、その後も、館山での講演会で「福祉を理解する心が大切」と説き、TBSの『秋山ちえ子の談話室』でも、度々かにた婦人の村のことを話題にして応援。その後、館山市民センターでのチャリティーバザーも開催。お金ではつくれない温かい心を加味することの大切さを広めた。

回は志野焼、北川民治の絵、『いま家畜になにかが』。感想を語り合う。

4月10日 三芳村『安房食糧生産グループ』の稲葉氏を職員7名で訪ね、神作氏より雛を40羽いただき、フリージア寮裏で養鶏が始まる。合成洗剤に代わって、石けんの使用を始める。

28日 共立講堂でかにた後援会主催『お話と映画の集い』。山口児童文化研究所のご厚意により『人魚がくれたさくら貝』の試写。各作業班の作品、製品の展示即売会。看護棟建設の資金集めの火ぶたが切られた。

5月24日 売春防止法制定20周年。厚生省の表彰式記念品に、かにた婦人の村の陶芸作品『香合』が使われる。

6月2日 朝日新聞『売防法ひっそり二十才』。このころ、かにた婦人の村が買い残した国有地2万坪の山頂に、海上保安庁がレーダーを建てるための測量に来る。国有地購入へ向けて動き始める。

25日 隣接地・花輪購入（農園）

7月1日 玄米食始まる。

8月10日 国立コロニーの三浦公嘉氏来援9日。

9月5日 『人と日本』誌に深津文雄の寄稿『汚穢の海』

10月1日 乳牛飼育班発足、6日に牛舎完成。『大草原の小さな家』にあやかり仔牛にローラと名付け、飼育が始まる。

10日 市川房枝氏他4名来訪。

12日 ドイツより奉仕女5名来泊7日。

27日 看護棟敷地で運動会。

11月19日 『あけぼの』誌に紹介。

20日 館山同好会まごごろ市に参加2日。

12月13日 TBS『この人にも』

15日 世田谷ボロ市参加2日間。

27日 九重の農家にみかん狩り。

1977年

- 1月15日 世田谷ボロ市参加2日間。
- 2月6日 秋山ちえ子氏らバザー収益金贈呈式。
- 3月5日 子持山学園相馬晶子さん研修10日。
12日 秋山ちえ子氏講演会。千葉銀行2階で。
- 5月14日 市民センターでチャリティバザー2日。
20日 甘夏を植えた小川辰蔵職員逝去。
29日 国際ソロプチミスト21名来援。
- 7月1日 **看護棟定礎式**。詩篇77編を聞く。
18日 大賀用水の使用開始。
寮生と職員が一丸となり、炎天下に食堂屋根のペンキ塗り。若いエネルギーを発散させるため、夜は夏祭りのプログラム。あちこちの稲刈りにも手伝いに行き藁をもらう。
- 8月8日 上尾合同教会高校生会WC9名、初めての来援9日。
22日 安房南高JRC10名来援。
24日 大浴室修理完了。
- 9月23日 ベテスダの日に55名来訪。
29日 牛小屋で縄文土器発掘。
- 10月1日 マラソン大会。
- 11月15日 やまばと学園中里武子さん研修3日。
17日 収穫感謝祭。雨天のため室内ゲーム。
20日 沢木耕太郎『人の砂漠』出版。

1978年

- 2月1日 このころ、看護棟ユッカのための共同作業が続く。1人ずつ葉っぱ型の陶器を焼き、外壁にYの字に貼りつける。老いた日をここで過ごせるように。
- 3月2日 安房南高校JRC8名来援。
12日 **看護棟ユッカ落成式**。来賓35名。館山市長祝辞「かにたが市民のコミュニティづくりの指標となるように」
30日 中神田の建売住宅3棟購入し、職員住宅とする。
- 4月1日 **医務室を管理棟からユッカに移動**。責任者は桜庭歌子。

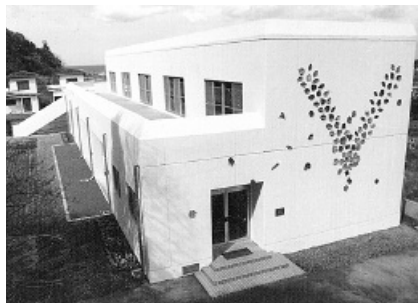
夢のユッカ誕生

ユッカ寮と命名された看護棟の落成式は、ボランティア手作りのピンクのエプロンドレスを着た村人たちが歌うコーラルで始められた。

主よわれらたつ手に手をとりにて

みこえにこたえ あめつちともに
みな思いがあふれ、力いっぱい歌った。
「かにた婦人の村の落成式というのとはとてもいいと思いました。普通の落成式は、土地の偉い人がずらりと前に並んで次々に挨拶する方式ですが、かにたの場合は、寮生と一緒に立っていて、建築者への感謝状も月並でなく、『この淋しい人々に終の栖家をつくってくださったことを感謝します』という感銘深いものでした」

(秋山ちえ子 TBSラジオより)



完成した
ユッカ寮

玄関の鍵は、工事関係者から秋山ちえ子氏に、八代英太氏が間に入り、いちばん身体の不自由なMYさんに渡された。広い居室、広い廊下、北の窓からは海が見え、南側には広い庭。「私たちの一生住めるところなのね」と、感謝が一度に爆発して泣き出す人もいた。

立食会には、甘夏みかんのジュース、茶巾寿司、自家製銘菓エンツィアン、秋山家特製のローストビーフなど、かにたならではのメニューが並んだ。

みんなで作る自分たちの食べ物

かにたの最初の収穫物は、さつま芋。「収穫感謝祭には芋を掘って腹いっぱい食べる」と記録されている。

ワークキャンパーの力を借りて、旧海軍砲台跡の雑木林が開墾され、チャペルサイトを作り、畑を作り、野菜を植えた。そして、牛を飼い、豚を飼い、かにた農園が充実していく。村人は牛や豚をとても可愛がって話しかけ、世話をした。

1978年5月11日、牛のローラが初めて出産し、自家製の牛乳が飲めるようになった。牛を増やして、牛乳が飲みきれなくなると、ヨーグルトやバターになって食卓を豊かに彩った。チーズ作りにも挑戦。豚からはハム、ソーセージ、ベーコンの加工品も生れ、仔牛の四郎は降誕祭のビーフシチューに身を捧げた。

一方で、牛糞を利用したメタンガス発生装置を作りあげ、乳脂肪のついた器具や、泥や糞尿にまみれた体を洗うお湯を沸かせるようになった。

われら人間コンサート館山'79

秋山ちえ子氏、永六輔氏らの提唱する『われら人間コンサート』が、上野の文化会館小ホールに次いで館山でも開催された。1981年の国際障害者年に向かって、障害者と一緒に人間愛がいっぱいの音楽祭を開けたら楽しいだろうという企画。この年は、視覚障害者の演奏家団体・新星'78の音楽家、ピアニスト、サキソフォン奏者を迎えてのコンサートで、かにたの職員も実行委員になって走り回った。

- 2日 明星大マンドリン部10名来演。
- 4日 寮の編成替え、助手制を廃止。
- 6月23日 大雨のため食堂東側の擁壁倒壊し、調理場の屋根に倒れ掛かる。
- 7月10日 退所1名（のち再入所）。
- 13日 養豚始まる。同時に農耕と畜産の共同作業場を自分たちで建て始める。
- 31日 LBF11名来援7日。
- 8月6日 上尾合同教会28名来援7日。
- 10月28日 衣料班拡張の資金集めのため、**教育会館で中古衣料市**。（かにたバザーの始まり）
- 30日 花輪630番地（農園拡張）購入。
- 12月13日 宅地化により、借用していた田畑を返却。谷の奥の飛地16筆購入。もち米、セリ、ハス、栗を植える。
- 18日 農園作業場を山上へ移す。
- 26日 白百合合奏団来演。

1979年

- 1月24日 橋本八重子さんによる編物指導始まる。
- 2月9日 **手製ヨーグルト始まる**。
- 3月16日 教育会館で衣料市2日。
- 19日 富山へ登山。
- 4月15日 食堂で復活祭。谷の奥の背羽谷^{せぼやつ}で卵探し。
- 7月13日 旧防空壕に**チーズ熟成室完成**。
- 22日 NHK『下へ上る』
- 10月17日 牛舎の前に牛糞を利用した**メタンガス装置完成**。
- 19日 台風のため崖崩れ。
- 11月5日 ゼミアで衣料市。社協ボランティア23名来援8日。
- 14日 教育会館で衣料市。社協ボランティア12名来援2日。
- 12月17日 かにた婦人の村が事務局となり『われら人間コンサート』開催。館山商工会館に400名。
- 25日 大賀用水太陽熱入湯装置完成。

1980年

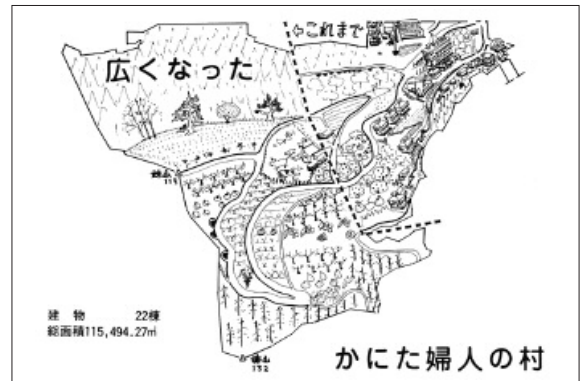
- 1月3日 深津文雄に『朝日社会福祉賞』
 11日 NHK『関東ネットワーク』
 16日 新ボイラー完成。
- 2月7日 NHKラジオ『人生読本』3日間。
 12日 白浜町加藤基八郎氏の古民家を譲り受け、解体に2日。
- 3月21日 兵庫1名入所、1名再入所。
 27日 教育会館で衣料市。社協ボランティア25名来援2日間。
 このころ地域活動へ新たなプロジェクトとして児童館オープン。
- 6月2日 **国有地70,767㎡購入。農園を拡張へ。**
 “かいた農園の夢を買いませんか”プロジェクトで、かいた農園生産品取得権利証を発行。ワークキャンプにより開墾。
 20日 フィリピンよりサリド女史来訪。日本人の売春ツアーについて訴える。
- 7月1日 NHK『女ばかりの村』
 27日 深津夫妻、辻宏氏と伊仏研修旅行18日間。かいたのオルガンを探しに。
- 8月31日 **衣料作業棟完成。**
- 9月13日 水道料金減額の申請。
 18日 自家製米の玄米食始まる。
- 10月16日 土砂防備保安林工事始まる。
 22日 テレビ朝日『女の広場』
- 11月6日 TBS『さっちゃんの幸』
 10日 牧場予定地開墾開始。
 16日 牛舎の下から縄文土器再度発見。黒曜石の鎌や石斧など。
- 12月25日 降誕祭。フィリピンへ献金。

1981年

- 1月18日 職員有志の廃娼史研究会を始める。
 2月9日 東京1名入所。
 3月3日 安房南高JRC3名来援。
 13日 予防治山事業土留工事完了。
 22日 『大賀デー』近隣の大賀地区住民31名を招き施設公開とお茶会。

かいた農園の夢を買いませんか

100万坪のコロニーを造るという夢は、当初3万坪が提示されたが、その後100人定員の施設にそんなに広い土地は必要ないと、1万坪足らずになってしまった。農業や酪農を始めると、家畜の運動場や牧草地も必要になってくる。谷の奥の田んぼや、隣接地を少し買い足したが、もっと広い土地が欲しい。



(『かいた便』20号より)

そこで「かいた農園の夢を買いませんか」と、国有地買収資金の募集をする。好きな果樹の苗木を1本10万円で購入してもらい、5年後から15年間、果物を届けるという斬新なプロジェクトだった。

開墾された果樹園には、温州みかん、あんず、梅、栗、ネーブル、キウイなど13種類の果物が植えられた。すでに甘夏みかんは、1967年、初代農園担当の小川辰蔵により134本植えられている。

現在では、びわ、梅、ブルーベリー、柿、栗、かぼす、柚子、キウイ、温州みかん、はっさく、きんかん、ネーブル、紅甘夏、ポンカン、甘夏みかん等が村の食卓をさわやかに彩っている。

納骨室付き会堂の建設

「コロニーができれば、そこに納骨室を」と言ったのはいずみ寮の寮生STさん。海に見える丘の上にチャペルを建てて、そこに眠る——これは、かにたができる前からの念願だった。

それを聞いた大阪の方が20円献金袋を作り、50万円を集めてくれた。その他アジア各国からの「リストコイン」、ドイツやスイスからの遺産などが、会堂のために寄付されたが、なかなか建設資金には満たない。

1980年、深津施設長は『朝日社会福祉賞』の副賞100万円を手にして、納骨室建設に着手する決心をする。



「お金がないというのは良いことで、自分たちでやろう! という力が湧いてくる。ブロック一つでもいい。自分で積み、自分の眠る場をみんなで作ろう」

開所前にワークキャンパーが開墾したチャペルサイトに、ワークキャンパーが基礎を作り、それに引き続き、かにた総出で汗を流し、鉄筋を組み、ブロックを積み、柱を組み、梁を組み……まるで、とりつかれたように建築を押し進めること16か月。苦しい激しい戦いの末、ついに納骨室付きの会堂が完成した。

- 4月2日 明星大学ギターマンドリン部19名来演。
- 5月2日 LBF 5名来援3日。
- 7月1日 看護棟ユッカで佐久間寿々代さんの朗読ボランティア始まる。
- 10日 神奈川1名入所。
- 8月7日 男坂開通式。深津施設長自ら切り開いた管理棟前からチャペルサイトへ通じる急勾配の坂。
- 会堂定礎式。**自分たちの手で石を積み、納骨室付チャペルを建設開始。
- 9日 上尾合同教会23名来援7日。
- 13日 LBF 6名来援4日。
- 10月16日 西武デパート福祉バザーに出品6日。
- 11月21日 大阪1名入所。
- LBF 4名来援3日。
- 25日 教育会館で衣料市3日。
- 12月5日 バドミントン、卓球部発足。
- 8日 未明フリージア寮に侵入者。

1982年

- 1月3日 毎週月曜夜ビデオ教室開始。
- 31日 秋山ちえ子氏、母の橘川八重さんと共に来訪。
- 3月10日 ベゴニア寮前で崖くずれ。
- 朝日新聞『天使の声』
- 16日 安房南高JRC 7名来援。
- 4月1日 明星大学ギターマンドリン部20名来演。
- 17日 東京上野学園でパイプオルガン試聴会。
- 19日 **パイプオルガン、かにた婦人の村に到着。**会堂未完成のため会議室に設置。朝日新聞天声人語に取り上げられる。
- 29日 オルガニスト宮本とも子氏来演。
- 5月1日 LBF来援5日。
- 6月18日 エリカ寮の修理始まる。
- 22日 秋山ちえ子氏を通じて小田切ケイ様より遺産贈呈を受け、会堂建設資金に充てることとする。
- 7月19日 臨海保育の茂呂塾保育園児一行を初めて迎える。牛乳、マーブルケーキ、

ヨーグルトなどで歓待。

- 23日 白浜の民家の古材を山頂のゲストハウス『たちばな亭』として建て始める。1月に来訪された橘川八重さん、積まれた古材に目をとめ傷んでゆくのを嘆かれたが、その10日後に急逝。橘川さんに供えられた香花料が古材活用のために寄付された。
- 29日 LBF 5名来援 4日。
- 8月8日 上尾合同教会21名来援7日。
- 10月9日 LBF 5名来援 3日。
- 25日 かにた便号外『臨調の狂気』を発行。
- 11月8日 ゼミア寮の修理始まる。
- 30日 衣料班増築倉庫完成。
- 12月16日 会堂竣工検査。翌日、会議室に置いてあったオルガンを会堂へ移設。
- 25日 新しい会堂で降誕祭。

1983年

- 1月1日 新しい会堂で元旦礼拝。
- 5日 フランスのテゼ兄弟団3名来訪。
- 2月1日 納骨室の許可が下りる。
- 15日 会堂とたちばな亭の落成式。82名招待。
- 3月30日 明星大学ギターマンドリン部16名来演。
- 31日 会堂にてマタイ受難曲(リヒター指揮)を2夜にわたり聴く。館山市在住の佐久間駿氏製作の真空管アンプによるすばらしい音響システム。
- 4月3日 会堂で復活祭、山頂で卵探し。
- 4月7日 イタリア・ピストイアのピネスキー教授によるオルガン研修会と演奏会。10日まで。
- 23日 オルガニスト深井李々子氏他日本オルガン研究会10名来訪。
- 5月3日 オルガニスト河野和雄氏他5名来訪。
- 7月31日 LBF 5名来援 5日。
- 8月7日 上尾合同教会22名来援 7日。
- 16日 ドイツ・マリア福音姉妹会3名来訪。
- 9月3日 日本社会事業大マンドリン部20名来演。

天上の和声

深津文雄牧師が、かにた婦人の村の納骨室つき礼拝堂で使うオルガンを求めて、世界的オルガン建造家・辻宏氏と共に、ヨーロッパを旅したのは1980年の夏のことでした。

イタリアのピストイア市立マベリーニ音楽院で、1762年ドメニコ・ジェンティーリ作の中全音律のオルガンに出会い、その“澄んだ柔らかい天上の和声”に心を奪われました。そして1982年、ジェンティーリ・オルガンの忠実な複製が、辻オルガンにより、岐阜の山奥の峠の樅の木で造られました。



この愛らしいイタリアオルガンは、かにた婦人の村の人たちが、ブロックを

ひとつひとつ積んで建てた村の礼拝堂の正面に納まり、日曜日の礼拝はもちろん、復活祭や降誕祭には高らかにうたい、遺骨の引き取り手のない幸薄い女性たちの告別式にも、寄り添ってくれています。

バロック時代の曲は、中全音律の楽器で演奏してこそ、本来の透明な美しい音楽として甦ります。平均律の楽器で演奏されたものとは全く違う音色に、聴く人

たちの心も共鳴して歌うことでしょう。
(2011年 オルガンCDライナーより)

天声人語 (1982年 4月21日朝日新聞)

イタリアの旅で、深津さんは一台のパイプオルガンの、そぼくでなめらかな音色にひかれた。そこには“不純なものを削り落として、素裸の状態になった美しさ”があった。▲村には90人の女性がいる。言葉では理解しあえない場合でも、共に歌い、共に音楽をたのしむことでふれあうものがあることを深津さんは経験で知っている。▲プラニアフスキー氏(ウィーン国立音楽院教授)の演奏でイタリアの数々の名曲が流れる。緑の森や草原を吹き渡る風の音をきく快さがあった。深津さんは感謝状を辻さんに渡した。“天来の響きに和して心なごむ名器再現の君に感謝して”▲高さ3.2メートル幅1.2メートルのパイプオルガンはきのう、かにた婦人の村に運び込まれ、その“天使の声”を響かせている。

納骨室完成

「君たちが死んだら僕が葬式をしてやろう、僕が死んだら君たちがしてくれ。そうして、ここに一緒に眠ろうな」

現在、34人の村人が文雄・春子と共に“もうひとつのかにた”に住んでいる。



- 5日 ドイツから奉仕女メラニー姉、エリザベト姉来泊11日。
- 23日 ベテスダの日に54名来訪。
- 11月6日 初めての納骨式。奏楽は林祐子氏。
- 9日 朝日新聞千葉版『永住の地』
- 20日 NHK『イバラの道』
- 25日 フィリピンへ中古衣料発送。

1984年

- 1月12日 東京1名入所。
- 4月1日 横浜のシオン少年少女合唱団来演。
- 7日 土曜日を共同作業の日とする。
- 5月3日 ピネスキー教授の第2回オルガン研修会と演奏会。
- 6月1日 大口寄付者へ甘夏発送始まる。50箱。
- 25日 NHKラジオ『人生読本』3日。
- 8月1日 LBF2名来援5日。
- 9日 上尾合同教会30名来援7日。
- 25日 この年から館山反核フェスティバル始まる。かにた婦人の村からもカンパを持参して参加。以後恒例となる。
- 9月4日 アイルランド農相夫人来訪。
- 8日 朝日新聞千葉版『底辺女性を救う信念』
- 30日 新しい豚舎の床工事。
- 10月1日 インドの社会事業家パティア氏来訪。
- 11月19日 立派な豚舎落成。
- 25日 養護施設ひかりの子学園を招き、収穫感謝祭。
- 12月12日 キウイ発送始まる。

1985年

- 1月25日 兵庫1名入所。
- 2月15日 はっさく発送始まる。
- 18日 共同作業で各寮屋根のペンキ塗り開始。
- 3月20日 バッハ生誕300年記念の研修旅行『バッハを求めて』に、深津文雄が解説者として同行12日。
- 4月16日 ピネスキー教授のオルガン演奏会。
- 5月21日 朝日新聞『底点の女性』
- 30日 新潟1名入所。

- 31日 浴場貯湯タンク修理完了。
- 7月1日 台風のため寮、調理場破損。
- 5日 東京1名入所。
- 15日 調理場大修理5日。床面をドライシステムに。
- 27日 ドイツ・ベートルよりヒュウステベック一家来訪。
- 31日 LBF4名来援4日。
- 8月11日 上尾合同教会19名来援7日。
- 15日 **従軍慰安婦の鎮魂の柱を山頂に建てる。**
「贖罪」と刻んだ大谷石を礎石として埋めて。19日朝日新聞『天声人語』掲載。
- 19日 長年懸案だった寮ごとの夕食が始まる。
- 29日 朝日新聞『鎮魂之碑』
- 9月12日 深津施設長『**新日本男子売春不買同盟**』の運動提起。
- 25日 寮生の希望で、鴨川で梨狩りをする。
- 10月18日 『バッハを聴く会』始まる。市内の愛好者が会堂に集まる。
- 27日 会堂の**ステンドグラス献窓式**。廃娼運動に尽力したマーフィー氏と禁酒運動を進めた守屋東氏を主題にした作品。寄贈者は水野百合子さん、山田厚子さん。制作は松田日出雄氏。
- 11月19日 フィリピンへ衣料雑貨を送る。
- 12月25日 降誕祭。献金はフィリピンへ送る。
- 1986年**
- 1月19日 TBSラジオ『石の叫び』放送。
- 22日 毎月1回の**アルクゾー**始まる(10km、7km、5kmのコース別ウォーキング)。
- 4月1日 **編物班を衣料班に合併**。
- 8月7日 LBF4名来援4日。
- 10日 上尾合同教会25名来援7日。
- 8月15日 **鎮魂碑除幕式**。前年建てた木の柱が、多くの人々の善意により石の碑となる。TBSテレビ中継。
- 9月23日 ベテスダの日に65名来訪。

丘の上の碑

「深津先生…戦後40年…日本のどこから、ただの一言も声があがらない。軍隊がいった所、どこにも慰安所があった。…死ぬ苦しみ。なんと兵隊の首をしめようと思ったことか。半狂乱でした。死ねばジャングルの穴にすてられ…、それを私は見たのです。この眼で、女の地獄を…。40年たっても健康回復はできないでいる私ですが、まだ幸せです。1年ほど前から、祈っていると、かつての同僚がマザマザと浮かぶのです。私は耐えきれません。どうか慰霊塔を建ててください」

(MYの手紙)



1985年8月15日の夕方、旧海軍砲台跡の丘の上。一本の桧の柱に「鎮魂之碑」と墨で書かれひっそりと建てられた。「上尾合同教会青年部の若者4人が担いで登った姿は、クレネからきたシモンの映像と頭の中で重なってしまった」
「そこで、僕の志したことは神のまえに詫びることでした。あれから10年たっても日本は詫びたがりません。間違いだったという意識がないからです。神を知らないからです」(文雄)



なないろの虹・大規模修繕

かにた開設21年を契機に、手狭で不便な居住棟を改造し、埋め立ての陥没による床面の段差など、今のうちに手を打たなくては、と大規模修繕にふみ切る。

担任たちの意見を取り入れ、寮母室(1973年5月より住み込みの寮母制は廃止)を広い台所に改修、トイレは水洗になり、太陽熱利用で洗面所にお湯が出るようになる。居室を2部屋通して納戸を作り、季節外のフトンなど各部屋に入りきらないものを保管する。

サビだらけでいつ落下するかわからなかったベランダを撤去し、非常階段もアルミで付け替える。(予算の都合で、新しいベランダは叶えられなかった。)

居室を改造したホールには出窓をつけ、色とりどりのシクラメンが暖かい日差しを受けている。

居住棟は小舎制で6寮。アネモネ、ベゴニア、クロッカス、デイジー、エリカ、フリージアと呼ばれ、各々がクリーム、紅、赤紫、アイボリー、うす紫、明るい黄色に塗られる。「一見派手に見える建物の色も、山の緑に囲まれ、少しも不自然でなく、食堂棟の水色を加えて七色の虹のよう。」(『かにた物語』より)

鎮魂碑に献花

1988年8月15日、^{イム ジョネ}任展慧氏より送られたお花代で小鉢の花を求め、夕暮れに村人と碑に献花。「レクイエム・エテルナム(永遠の休息を)」と歌い、祈る。

今も毎年、お花代は送られている。

1987年

- 1月1日 鎮魂碑の下で焚火をして元旦礼拝。
- 10日 鎮魂碑周囲に芝はり、古田栄さん来援。
- 21日 アルクゾー年間完歩賞メダル授与。食堂で初めての文化祭開催。
- 2月6日 大規模修繕のための見積書を東京都に提出。
- 24日 沈陽魯迅美術学院教授劉栄夫氏来訪2日。
- 3月29日 NHKラジオ『受難曲を味わう』
- 4月11日 養鶏再開。
- 12日 シオン少年少女合唱団13名来演。
- 19日 退所1名。
- 23日 法政大学講師任展慧氏来訪。鎮魂碑に真っ赤なバラを捧げて祈る。
- 6月17日 古田栄さん来援。
- 20日 市民センターで『われら人間コンサート』
- 8月15日 終戦記念日に山頂に集う『鎮魂祭』が始まる。
- 9月26日 大規模修繕始まる。エリカとフリージアの寮生はゼミア寮へ移って生活。以後2寮ずつ入れ替わりながら全寮の修繕。
- 10月29日 大房岬で9年ぶりの運動会。笠名天神の土地購入。
- 11月27日 東京共同募金会2名来訪。食堂のテーブル椅子購入申請のための調査。

1988年

- 1月12日 東京都福祉局2名来訪。工事の進捗状況確認。
- 2月13日 共同作業で旧作業棟修繕開始。
- 3月4日 食堂の床張り工事。コンクリートの床を木の床にする。
- 5日 ゼミア寮修築。八角形の大屋根設置。
- 15日 大規模修繕完了。
- 17日 東京都の改修工事完了検査。食堂に木製のテーブルと椅子納入。
- 4月14日 中国から張海迪氏ら来訪。講演など。

- 6月10日 牛乳処理室完成。
- 8月4日 LBF 3名来援4日。
- 5日 ソウル梨花女子大学教授尹貞玉氏来訪。
- 7日 上尾合同教会32名来援7日。
- 30日 男坂の下に擁壁建設。
- 9月19日 アジア学院の留学生ら21名来訪。
- 23日 ベテスダの日にあわせ、かにた後援会員のための公開見学会を実施。生まれ変わったかにたを見ていただく。
- 11月17日 館山レインボータウン計画のため大手ゼネコン幹部ら来訪。かにた南側の谷を含む一帯を開発するリゾート計画に地元からも反対運動が起こる。
- 12月8日 ドイツよりウェーバー夫妻来訪。
- 12月9日 NHK教育テレビ『あすの福祉』放映。

1989年

- 1月2日 静岡1名入所。
- 2月14日 厚生省社会局生活課長和田勝氏ら来訪。高齢化が進み介護者の人材の必要性を訴える。
- 3月16日 ユニオンチャーチ6名来訪。
- 31日 深津文雄、施設長退任。
- 4月1日 天羽道子、施設長就任。
- 5月23日 月1回の職員研修始まる。
- 7月7日 バザー委員会発足。
- 10日 パプアニューギニア、ザンビア、フィリピンへ中古衣料18箱発送。
- 8月9日 近隣向けに初めてのミニバザー開催。
- 13日 上尾合同教会16名来援7日。家畜の糞の堆肥場のブロック積み。
- 9月2日 嘱託医田村利純氏による精神衛生講義。
- 25日 火種工房富山妙子氏来訪、スライド『海の記憶』上映。
- 10月 衣料班が機織（裂織）を始める。

海外へゆく中古衣料

1980年6月20日に来訪したフィリピンの女性サリド氏の訴えを聞いて、「きわめて迂遠な方法ですが、比国の貧しさに手をのべる方法を討議」「その結果、われわれに溢れている夏物衣料がきわめて有効に比国で役立てられることがわかり」衣料や雑貨、クレヨンなど10箱を郵便で送る。サリド氏からは、草木を集めて家を作っている人たちの子どもに自宅を開放して教育を始めたとの報告がくる。

その後も、中古衣料などがアジア・アフリカへ送られていった。

臨調の狂気との闘い

1982年10月12日、会堂建設に全力を傾けている最中、毎日新聞が一面の冒頭で「臨時行政調査会、補助金5兆円の見直し」を報道。効果の薄いと思われるところの補助金を廃止していくという方針で、婦人保護費も含まれていた。

その日、鳥羽に集まっていた全社協の婦人保護部会で反対決議を提案。

婦人保護事業は国庫補助金の無駄遣いのように考えているが、それは誤解で、この事業がどういう状況の中で始まり、如何に困難なケースを抱え、数字では見えない成功をしてきたか、かにた便号外で訴える。反響は大きく、多くの著名人の応援もあり、カンパ350万円、土光会長へ直送した反対署名ハガキは2万通を超えた。公務員の労組でも反対決議が出され、ついに60日後、補助金打切りの対象から婦人保護費は外された。

何がやりたい? かにたの作業

かにた婦人の村の作業班は、そこに集まってきた人たちによって、その時々につくり出されてきた。

「どんな小さいことでもいい、できることを見つけてやりはじめようという気風が生まれ、寮内の掃除、食堂の皿洗い、山の開墾、道路作りと、みな、それぞれに合った仕事を探して動き出した。そして1時間20円の小遣いが支給された」

「STは食堂にあらわれた施設長にパン屋がしたいといった。KYは、ブタやトリを飼いたいといった。みな、いずみ寮にいたときやっていた作業である」

(『かにた便』2号より)

弱い人々に下請け作業をさせてはいけない。まず、職員の目が輝いて、創る喜びを味わえるようなことを。子供が無心に遊ぶように。

——かにた労働哲学——

まず職員が目を輝かせて、自分のしたいことをする。それに村人を巻き込んでいく、という哲学が共有されてきた。

名誉村長の天羽は、かにたに来たときに深津施設長に「何をしたい?」と尋ねられたという。

「コロニーができたらぜひ陶芸をやるといい」とやって来た職員は、土地を買うところから始め、労働奉仕の青年たちの力を借りて陶芸作業棟を建て上げ、陶芸を始めた。次いで製菓作業棟も完成し、やっとパン焼きが始められた。

山から木を切り出して、作業棟を建てた初期の木工班の職員は、「搾取も差別もない牧歌的な仕事」と記録している。

必要に応じて作られた作業班には、現在は既に閉じられたものもある。木工班、土木班、園芸班のほか、手すりのペンキを塗ったり、鶏を飼ったり等。残念ながら酪農も閉鎖されてしまった。

現在の作業内容

- ・調理の手伝い
- ・食堂の掃除と配膳手伝い
- ・風呂場の掃除
- ・リネン類の洗濯
- ・パン焼きとジャム・お菓子作り
- ・野菜・米・果物栽培
- ・ハーブティー作り
- ・石けん作り
- ・編物・織物 ・陶芸
- ・使用済切手の整理 ・外掃除
- ・看護棟の掃除などの手伝い

村人は、いろいろな作業の中から自分のやりたいものを選んで参加している。人間関係が難しかったり、その人に合う作業がなければ、1人のために新しい作業を用意することも考えられる。

現在、養護棟以外の村人42名の平均年齢は62歳(25~79歳)。高齢者にはゆったりできるように配慮し、それぞれの作業班で、午後の時間は好きなことをして過ごしたり、早めに入浴したりと工夫している。誕生会の朝、これからの1年についてたずねられると、「さぎょうがたのしい」「まいにちやるのがあってしあわせです」という人も多い。

1990年

- 1月11日 東京・山谷へ防寒用衣類、毛布などを発送。厳冬期には凍えて亡くなる人も。
- 23日 厚生省生活課長浅野史郎氏来訪。
- 2月6日 浴室棟のタイル修理3日。
- 9日 管理棟の床修理開始。
- 3月24日 土曜日の『たんぽぽ文庫』始まる。絵本や童話の読み聞かせに初回は27名。
- 4月11日 ドイツのベテスタよりエンマ姉、メラニー姉、エリザベト姉の3名来訪6日。
- 24日 劉栄夫氏滞在36日。
- 27日 退所1名。
- 5月2日 韓国聯合通信金溶洙氏来訪取材。
- 21日 ソウル文化社孫德基氏来訪取材。
- 6月19日 東京ディズニーランドへ1泊旅行。
- 28日 KBS『挺身隊』の取材のため来訪。
- 29日 釜山女性経済人連合金文淑氏来訪取材。
- 7月4日 北海道1名入所。
- 22日 張海迪氏ら滞在61日。
- 26日 **お菓子の教室**始まる
- 8月2日 ソウル梨花女子大生山下英愛さん来訪。MYさんに面会。
- 12日 上尾合同教会24名来援7日。
- 9月30日 台風のため旧作業棟裏で崖崩れ。
- 11月9日 新たな試み“勝敗のない運動会”。意気も揚がり、心底楽しむ。
- 22日 厚生省社会局生活課長補佐奥村隆氏ら3名来訪。
- 28日 誕生会で深津文雄へのプレゼントとして、五十嵐逸美職員が自作の歌『やすらぎのいえ』を披露。村人たちの愛唱歌となる。
- 12月1日 東京で開かれた『人権と戦争を考える＝朝鮮人強制連行従軍慰安婦』の集いに、鎮魂碑の写真を携え天羽施設長参加。
- 4日 ソウル梨花女子大教授尹貞玉氏来訪。

1991年

- 1月11日 **絵画教室**始まる。

クラブ活動

初期の水曜学校も、道作り、崖工事、会堂の建設などに忙殺され、ふと気づくと、途絶えてしまっていた。

仕事ばかりじゃなくて何か好きなことがしたい、という声に応じて、クラブ活動が始められた。

たんぽぽ文庫

読み聞かせを主にする。理解力の差も大きいので、本を選ぶのも真剣。上質な本を選べば、ブルーナの『うさこちゃん』でも、みんながお話の世界に入っただけを発見。ろうそくを灯して、語り聞かせもする。読めないのに厚い童話を借りて行った人たちも、絵本の本当のよさがわかるようになって、絵本を借りていくようになった。

「字、すこしはよめるけど、Eちゃんによんでもらう。こないだのホラ、『おれのほねをかえしてくれ!』っていうの、おもしろかったよねー。こわかったよ。トイレにもいかれなかったよ。どようびになると、ほっとするわ。はやくどようがこないかなーとおもってる」(FT)

お菓子の教室

初回は料理教室のつもりで、お好み焼きを作る。次第にケーキが作りたくなり、



お菓子の教室になっていった。

絵画教室

教室といっても何も教えない。絵の具と画用紙と筆を用意し、自分の描きたいものを好きなように描く「教えない教室」。

すぐに描き始める人、自己決定が難しい人、3枚描く人、同じものばかり17枚描く人、様々だ。そのときの心に動かされて描いていく。大切なのは、ひとりひとりが自由に自分の心を表現できる温かい雰囲気をつくること。

退院してきたばかりのOEさんは、自分の居場所を見つけられずラジオの音が大きいと注意すれば怒鳴る、おかずが少ないといって怒り散らすなど、やっかいな存在だった。



絵画教室にやってくると、どっかり座り込み、ときにはごろりと寝転がる。そうすること20~40分。「さ、かきましようか」と、可愛い声で言って起きあがって描き始める。「ここ何色にしようかね」と聞かれれば、「何色にしようかねえ」と答え、決定するまでの時間を共有する。答えは、その人の心の中にあるのだ。

この日の絵は、紫色のストロークと山吹色の点で構成されているが、同じ繰り返しはなく、創造的で明確、しかもOEさんの日ごろの姿からは想像できないほどデリケートで、余白も美しい。

- 24日 大倉謙二氏案内でノルウェー宣教師エーリック・フロイラン氏、カウンセラー広瀬勝久氏来訪。佐倉市で『ディアコニア・センター』を開所し、酒害問題、不登校問題に取り組んでおられる方たち。
- 31日 安房南高校社会科教師7名、従軍慰安婦のことを教材に取り上げたいとの意向で来訪。
- 2月13日 ソウルの梨花女子大学院生山下英愛さん来訪。卒論『挺身隊問題』研究のため。
- 3月13日 職員研修会。70歳のMZさんのケースを通して、高齢者の処遇について学ぶ。
- 24日 『平和を願うコンサート』19名参加。
- 4月1日 大泉ベテル教会9名来訪旧交を温める。
- 16日 居住6棟床下のシロアリ駆除及び床下換気システム設備工事始まる。
- 28日 LBFの加藤氏、鈴木氏、大型連休を利用して27年目の労働奉仕のため来訪。食堂西側から下への階段完成させる。
- 30日 山に果実発送所『みかんの家』完成。秋山ちえ子氏を通し、ソニーよりの指定寄付による。
- 5月14日 甘夏の発送始まるが、今年はいへんな不作ため一般注文者はお断りする。
- 23日 朝鮮時報の金美嶺氏、統一評論の姜明姫氏来訪。従軍慰安婦問題の取材。
- 6月11日 全社協にて厚生省・東京都主催婦人保護事業35周年記念行事。天羽道子、厚生大臣表彰。記念講演『女性が真に自由に生きるために』とシンポジウムがあり、パネリストとして深津理事長登壇。
- 18日 洗濯班に救世軍社会鍋寄贈による乾燥機設置。
- 24日 館山市社協による市内社会福祉施設長連絡会議に天羽施設長出席。施設部会が発足。
- 7月2日 職員による週1回の共同作業再開。果樹園周辺の樹木を伐採し共に汗を流す。

- 3日 食堂東の道沿いのガードレール取り付け工事始まる。
- 10日 県立暖地園芸試験場、中井滋郎氏来訪。果樹剪定など指導を受ける。
- 8月5日 夏祭り2日目の映画会『仔鹿物語』で新規購入の液晶ビジョン使用開始。
- 9日 のど自慢を改め**優劣をつけない『演芸会』**を開催。
- 12日 上尾合同教会青年部8名来援。ワークキャンプ15年目。階段手すりのペンキ塗り、階段造り、児童館の床張替を依頼。夜は共にフォークダンスを楽しむ。
- 24日 ソウル梨花女子大学院生山下英愛さん来訪、MYさんに面会。
- 27日 県内高校歴史研究会の教員8名来訪。「歴史教育の中に従軍慰安婦のことを組み入れたい」
- 30日 韓国の海外犠牲同胞慰霊事業会会長、李龍澤氏他2名訪米の帰途立ち寄る。
- 9月19日 従軍慰安婦問題取材のため毎日放送より3名来訪。
- 25日 日帰りでディズニールランドへ。昨年不参加の寮生20名職員13名。
- 26日 在日韓国民主女性会会長金知榮氏他3名来訪。
- 10月8日 浴室棟修繕開始。ボイラー交換、タイル張替、脱衣室整備。大東製糖の援助にて。
- 24日 クロッカス、エリカ寮の排水工事コンクリート打ち、共同作業でバケツリレー。
- 29日 神奈川1名入所。
- 11月7日 参議院議員清水澄子氏他12名来訪。見学後、深津理事長と懇談。
- 13日 東京都社会福祉協議会より、創設功労者として深津理事長、特別功労表彰。
- 21日 市民センターにて『衣料市』、入場者2千人超の大盛況。
- 12月9日 TMS下村健一氏、MYさん取材。

テレビのない村

開設後11年目、かにた便5号に、『テレビのない村』(深津文雄)が掲載されている。

「——常時100人ほどの日本人が共にくらす、電灯のとぼる村なのですが、開設以来11年テレビというものが一台もおいてないのです。——そういう村をつくってみたいというのが、ぼくのながい夢だったからです。——

監督官庁のひとつから苦情が出ました。かにたでは何故テレビを見せないのか、入所者が『テレビのないところへ行くのはいやだ』と抵抗して困ると——深い考えあってやっている指導に口を出さないでほしいと答えました。

——とにかく現代ばなれした無い物づくしで——悪いと気がついたら遠慮会釈なく何もかも取り去ってしまって——素朴きわまりない生活をみんなで11年間たのしんできて——それで失われたものは何だったのか？こうしなければ得られなかったものは何だったのか？

かにたにもしテレビがあったなら、いま朝ごとに響くような歌声、いま日曜ごとに展開されるような対話、あちこちの壁を飾っている絵画、陶板、全山をおおう豊かな実り、12におよぶ創作的な作業——この労働観、人生観がはたして生まれたであろうか——要は、人間の精神の自主性なのです。ほんとうに必要なものを必要なときに必要なだけ吸収する——その生きたリズムからはずれたものは、どんな良いものでも無意味です」

そして、自主的に視覚情報を得るため

に取り入れられたのが、ビデオ録画機だ。
以後週1回のビデオ教室が始まる。

グース・ジョンQ最後の決断・小公女・天の瞳Ⅲ・
かあちゃん・盲導犬クイールの一生・阿弥陀どうだ
より・さとうきび畑の歌・アンの結婚・ドクタード
リトル・ラスムス君、幸せをさがして・葡萄の木・
ほたる・フランダースの犬・マイフレンドメモ
リー・ストレイトストーリー・山の郵便配達・海
上のピアノひき・アカシアの道・アイアムサム・パ
ピヨンの贈り物・コーラス・星になった青年・3丁
目の夕日・子ぎつねヘレン・涙そうそう・はだしの
ゲン・夢を駆ける馬ドイリー・白い船・北京バイオ
リン・バッテリー・アニー・アンネフランク・男はつ
らいよ全シリーズ・奇跡のシンフォニー・豚のいた
教室・レイシングダービー……

現在までに120本以上の映画を上映す
る。一人ひとりが、自分の意思で映画を
見るために時間を使い、きちんと向き合
い、鑑賞する。このことが心の恢復、精
神の成長の糧の一つの役割を担っている。

現在は食堂に60インチのテレビが置か
れている。週に一度、録画した番組を見、
カラオケ大会も行われている。

坂田祚子さんからの贈り物

絵の作品展の後、
「日がたつにつれ、
かにた村で体験し
た心温まるできご
とが私を感動させ
ております」との
お便りが届く。現
在も毎月村人一人
ひとりに、誕生日
カードを送って
くださっている。



1992年

- 2月3日 デイジー寮床板一部の異常な盛り上がり原因判明、穴埋め工事施工。
- 10日 『千葉いのちの電話』の方12名来訪。全国高校女子教育問題研究会及び安房地区高校の教師27名来訪。赤旗日曜版担当記者が『鎮魂の碑』取材。
- 17日 デイジー寮脇排水溝沈下の修繕。職員
の共同作業で。
- 26日 坂田祚子さんによる絵の作品展『小さな花だより』を食堂にて開催4日。
- 28日 三重県婦人相談所所長、相談指導員課
長来訪、入所希望者の相談。
- 4月2日 安房高JRC生徒8名教師1名来訪。
午前中農園を手伝い、昼食を共にして
午後村内見学。
- 16日 会堂にて2夜連続で『マタイ受難曲』
を聴く。毎年青森からの参加者あり。
- 5月13日 三重より初めての入所1名。
- 6月12日 医療保護受給者監査の一環として、館
山福祉事務所係官の案内で厚生省2名、
県厚生課2名来訪見学。
- 13日 林千代氏、五味百合子氏他4名来訪。婦
人保護問題について深津理事長と懇談。
- 23日 東京2名入所。
- 8月1日 アジア学院の留学生ウガンダのエリ
シャ・アウプア・カヤバさん来訪。深
津理事長、ウガンダについて聞く。
- 10日 上尾合同教会青年会16回目のワー
クキャンプ。樹木の下刈をお願いする。
- 13日 松戸高校の教師と生徒来訪。広島修学
旅行を前に「戦争加害国としての日本」
を見つめたいと。
- 9月11日 東洋経済日報記者阿部信行氏来訪。慰
安婦問題を取材。
- 23日 『ベテスダの日』41名来訪。
- 10月8日 SNさん長年の願望だった歌舞伎座へ。
11日 茂呂塾保育園職員12名礼拝に出席。村

内見学。

- 11月 8日 会堂ベルタワー建設工事開始。
 14日 ウガンダの留学生エリシャさん来訪。
 29日 アドベント第1主日礼拝で献鐘式。
 12月11日 長崎の鐘製作者西田金悟氏によって、
 未完成の塔に鐘が取り付けられ、月夜
 の山頂に鐘の音が響く。
 13日 この日より礼拝開始1分前に塔の鐘が
 鳴る。

1993年

- 3月 3日 慰霊塔の建立を願ったMYさん逝去。
 4月 1日 作業班衣料仕立部を新設。
 4日 山口放送テレビ取材のため3名来訪。
 18日 朝日新聞論説委員鈴木規男氏、山之上
 玲子記者来訪。MYさんの死を悼んで。
 5月13日 TMSテレビ下村健一氏来訪。MYさん
 の死を悼んで。
 6月11日 東社協婦人保護部会主催『施設の紹介
 と作品展』に裂織を出品、即売をする。
 17日 日中友好協会浦和支部の帆本夫妻、四
 辻夫妻来観。
 21日 織物指導のボランティア柳恵美子氏、
 嘱託となる。
 8月 5日 朝日学生新聞記者布谷昌巳氏来訪。山
 頂の碑を撮影取材。終戦記念日の小中
 学生新聞に掲載のため。
 9日 上尾合同教会青年会17回目のワーク
 キャンプ。果樹園の下草刈り。
 9月 2日 NHK千葉放送局野島学氏来訪、深津
 理事長と懇談。
 10日 ようやく稲刈り、例年は8月下旬。
 14日 雨の中、稲刈りとかけ干し共同作業。
 18日 アジア学院留学生ウガンダのモーゼス
 さん来訪1泊。翌朝の礼拝で交流。
 26日 安房地区身障者スポーツ大会2名参加。
 10月11日 ひと月後れの脱穀を2日ばかりで終え
 る。今年は異常気象。
 21日 雨のため、市内の体育館を借りて初め

鐘のなる丘

吉永和枝さん主宰の『趣味の刺繍・和方の会』が、1985年、初めての作品展の売上げを寄付された。作品展は4年に一度開かれ、その売上げ4回分で会堂の鐘を設置することになった。

会堂の正面に、ベルタワーを建設。鐘の制作は、長崎の西田金悟氏に依頼し、鐘には『和方の会』の名前も刻まれた。献鐘式は、教会歴の最初の日曜日に行われ、丘の上の会堂からは、毎日曜日に鐘の音が響くようになった。



友好の橋を渡って

深津文雄が大連時代の友人・劉榮夫氏^{レン・ロンフウ}に、「心につかえている日中の不幸な歴史をつぐなう術はなかろうか」と尋ねると、彼は「張海迪^{ジャン・ハイディ}にかにたを見せたい」と言った。張海迪氏は重度の障害、高位対麻痺をもちながら、独学で英独日エスペラント語や漢方医学を学び、文化革命の折は、農村で多くの貧しい人々を針灸で治療し、国家から賞を受けている。文学者でもある。

講演に出かける以外は、妹の小雪^{ショウシュエ}さんとかにたに滞在し、村人たちと苦しみを分かちあった者同士の深い交流をもった。

米の完全自給

谷の奥のもち米の田に、近くの農家から7キロ先に借りた田を加え、1.5ヘクタールの土地から100人全員の主食を自給できるようになったのは1984年。除草剤を使わないので、田の草取りは共同作業で、稲刈りも脱穀も村中総出で数日かけて行うが、「主食である米を完全自給することは、誇らしい作業であります」と、農園の“おとうちゃん”は言う。

ウガンダからの手紙

1993年9月19日、アジア学院で学ぶモーゼス・ブスルワ氏が、日曜日の礼拝に出席、ウガンダでの仕事について話をした。彼は足首までの白い礼服を身に着けて現われ、昼食を共にして語り合った。

そのころウガンダのエイズ孤児や寡婦や団体から、助けを求める深刻な手紙を次々と受け取っていた深津文雄牧師は、その683通の手紙の山を彼に見せた。

3か月後にやってきた彼は、ゲストハウスたちばな亭に泊まり、夜を徹して個人から来た手紙を全部読んでしまった。

モーゼス氏は、深津の“底点志向”の思想に感動し、ふたりは手紙の山を前に、どのようにしたら具体的に彼らを援助できるかを話し合った。

「これは素晴らしい男でね、帰ったらウガンダにかいたを作っているですかと言うんですよ。『もしも神の御心に叶ったら、神が道を開いてくださるでしょう』『前進しなさい』と言ったんですね。」

(NHK『こころの時代』より)

て屋内での運動会。

- 11月10日 厚生省社会援護局婦人保護担当事務官田仲教泰氏、千葉県母子福祉係長松沢一美氏、安房支庁福祉課係長土屋倫男氏来訪。当施設の沿革について深津理事長説明。構内見学、昼食をともにする。
- 29日 平和憲法を守り真の戦後補償を求める市民集会で深津理事長講演『従軍慰安婦問題から平和民主主義を考える』。
- 12月3日 ラジオで秋山ちえ子さんのお話を聴き中古衣料の問い合わせ殺到。
- 15日 アジア学院留学生ウガンダのモーゼスさんと兼川尚美さん来訪1泊。

1994年

- 1月20日 東京2名入所。
- 24日 新潟1名入所。
- 31日 新潟からの入所者、タバコ欲しさに外出し横浜で見つかる。
- 2月25日 アルクゾーで初めてのラーメンコース。
- 3月5日 デイジー寮のMTさん非常階段より転落。脳外科病院にて手術、危機を脱出。
- 13日 1月入所のIYさん無断外出。上野公園で保護され翌午前3時無事帰村。
- 24日 前夜半の豪雨によりフリージア寮の崖、再度の土砂崩落。千葉県を通じて厚生省に相談。
- 29日 崖の復旧工事補助金を東京都と厚生省に申請。
- 4月4日 朝食後、村人たちに寮大移動を発表。全寮が2日かけて準備し、6日に大移動。
- 7日 フリージア寮の崖問題、天羽施設長が厚生省に崩落現場の写真を持参し説明。
- 12日 東京都の女性福祉係官石川氏、土砂崩れ現場視察のため来訪。
- 5月11日 栄養士就任。長年の念願かなう。
- 13日 厚生省社会援護局保護課救助婦人保護係長谷口新吾氏他2名、東京都福祉局子ども家庭部育成課女性福祉係長小川

- ヒロ子氏他2名来訪。崖崩れ現場視察。
- 22日 千葉県身障者スポーツ大会に2名参加。
- 26日 料理教室始まる。8名参加。
- 7月9日 安房反核フェスティバルに70名参加。映画『月光の夏』を見た後、ふすま入りすいとん汁をいただく。
- 23日 LBF家族11名ワークキャンプ。27日まで避難階段の整備作業など。
- 29日 慈愛寮百年記念式典に深津理事長夫妻と天羽施設長出席。
- 8月2日 天羽施設長、全国歴史教育者協議会全国集会に招かれ『噫従軍慰安婦碑の叫び』をテーマに語り合う。
- 14日 上尾合同教会青年会、18回目のワークキャンプ。
- 15日 鎮魂祭。深津文雄作詞作曲のカノン『きよらのおとめ』が繰り返し歌われる。
- 9月19日 アジア学院に学ぶ12か国の留学生と職員38名を迎え昼食を共にして交歓。
- 10月7日 安房南高生6名教員2名来訪。文化祭で『ウガンダ支援』を取り上げたと報告。
- 11月5日 安房南高校生2名、土曜の午後ウガンダ行き荷物整理に来援。
- 27日 第一アドベント。ベテスダの姉妹5名来訪し礼拝に参加。

1995年

- 1月6日 深津純子さん『フルートを聴く夕べ』が催される。
- 17日 阪神・淡路大震災。
- 25日 東京都福祉局主催で母子、婦人相談員70名来観。
- 2月6日 村内で集められた阪神大震災義援金を館山市に持参。
- 25日 秋山ちえ子さん久々に来訪。深津理事長と歓談。
- 3月10日 六本木の暮らしの手帖社別館で『かいた裂織展』開催10日。2千人余来観。
- 27日 塩川成子職員ウガンダへ初めての視察

古着から生まれた美

1989年秋より始められた衣料班の機織りは、全国から送られてくるたくさんの和服をほどいて、細く裂き、本物の織機で織った“裂織り”である。

始めてみると、想像を超える美しいものが次々と織られていった。一人ひとりまったく違ったもの、それは教えられたものではなく、もって生まれたその人のセンスや心のありようが、無意識のうちに表現されたものである。

秋山ちえ子氏の紹介で、暮らしの手帖社別館で裂織展を開くことができた。

柳悦孝氏の評を紹介する。

「障害をもつ方々の仕事なので、特別な期待をしていなかったのですが、その製品の一部を見せて頂いたとき、生き生きとした美に溢れたものばかりで、その新鮮さ力強さは、唯々驚くばかり。近ごろこんな感銘を受けたことはありませんでした。

昔から見ていた裂き織りは、経に太めの木綿糸を、緯にはさまざまな古布を細かに裂いたものを、色どりよく織り込んだ厚い布地で、敷物や仕事着の上っ張りにしたもので、静かな美しさがあり好きなものの一つでした。

しかし今度のこの会の作品は、古いものとはまったく異なった力を持ち、明るい色どりで、自由な縞や、悦びの姿を見せ、むずかしい理屈等に捉われず、作者の心が直に語りかけています。織り手の生き生きした姿が見えるようです」

ヘレンケラーのことば

ドキュメンタリー映画『鏡のない家に光りあふれ——斉藤百合の生涯——』（代表者秋山ちえ子、協力・北林谷栄、滝沢修ら）には、深津文雄も出演し、盲教育との関わりを語っている。明治学院英文科3年だった1929年から、全盲で日本最初の女子大生となった斉藤百合のもとへ通い、彼女の目となって、漢文・医学書・外国語の本などを読んで聞かせ、点訳にもたずさわった。神学部へ進むころには、百合の片腕となって陽光会を支えた。

1937年4月29日、ヘレンケラーを招き『講演と音楽の夕べ』を開催。音楽は宮城道雄の琴などだった。ヘレンケラーは講演の最後に、こう語りかけた。

「この中に、目の見える方がいらっしゃいましたら、どうか目の見えない人のお友達になってください。この中に、耳の聞こえる方がいらっしゃいましたら、どうぞ耳の聞こえない方のお友達になってください…。これまでの人類の歴史は、強い者が弱い者を踏みこえて進むことによって築かれてきました。けれども、それは前進のようで前進ではありませんでした。やがて、その強い者も弱くなり、次の強い者に踏みこえられたからです。これからの文明は、強い者が弱い者の手を取って、二歩ゆくところを一步進んでも、それは後もどりのない前進になるでしょう」

深津は「深く、それまでの利己主義を恥じると共に、必ず生涯弱い者の味方になろうと誓った」（『ぼくの自画像』より）

出張。

- 4月26日 4月の誕生会で、かいた婦人の村の誕生30年も祝う。創設者深津文雄、春子夫妻と、初年度入所41名もの仲間一人ひとりに拍手を贈る。深津夫妻と共に3人が30年の感想を述べる。
- 6月1日 新牛舎の上棟式が行われる。
- 8月15日 鎮魂祭。千葉テレビの取材を受ける。
- 21日 安房南高校生15名と教師3名ウガンダ行きの中古衣料の荷造りに来援。
- 26日 初めての乳癌検診を76名受ける。朝日新聞千葉版に大きく『痛みを知る心、世界に届け』という記事が載る。
- 9月17日 超大型の台風12号に見舞われ停電、断水。大木が倒れ、屋根は飛び、ガラスは割れ、電話も不通になる。
- 19日 台風後始末に1日共同作業。
- 11月2日 劇団民芸の斉藤美和氏、ドキュメンタリー映画の撮影に来訪。『鏡のない家に光りあふれ——斉藤百合の生涯——』に深津文雄も出演し盲教育との関わりを語る。
- 16日 館山南高校生11名ウガンダ行き荷造りに来援。

1996年

- 1月4日 深津純子さん、食堂でフルート演奏。
- 11日 三重1名入所。「こんなところにおれへんわ」と入所を拒み、同行の相談員とホテルに泊まる。翌朝「よろしく願います」と戻ってくる。
- 2月3日 安房高生5名ウガンダ荷造りに来援。
- 14日 三重県あかつき寮指導員2名来訪。1月に入所したYSさんの働く姿に感涙。「心配せんで、がんばるで、皆によろしく言っといて」
- 3月24日 受難節第五主日礼拝にシオン少年合唱団来援。食堂で昼食を共にし歌の交歓。
- 4月27日 連休でLBF4家族9名来援。好天の4日間を農園の竹伐りで汗を流す。

- 5月1日 ゼミアのホールで絵画教室再開。
- 14日 岩手出身のCTさんとOMさん、小林いさ職員の帰郷に合わせて盛岡へ。CTさんはホーム入所の老母を、OMさんは牧場で働く姉を訪ねる。
- 30日 厚生省で開催された婦人保護40年記念全国大会において、桜庭歌子、小林いさ両職員大臣表彰を受ける。
- 31日 塩川成子職員18日間の予定でウガンダ出張。
- 6月6日 かにた開設の年に入所のMMさん、脳腫瘍手術後に障害が重度化したため、身障者施設コスモビレッジに移る。
- 6月13日 6寮にガス乾燥機を設置。
- 25日 アネモネ、ペゴニア、クロッカス寮の南側に避難路確保の大工事。併せてペゴニア、クロッカス寮の北崖の法面保護工事も行う。
- 7月2日 天羽施設長、フリードリッヒローダで開かれた『世界ディアコニア会議』に出席のため出発。
- 26日 塩川職員、安房地区小学校JRC60名にウガンダのスライドを見せに行く。
- 8月12日 上尾合同教会青年会の20回ワークキャンプ、ガーナのアドさん、アジア学院留学生インドのシャンミさん来村。
- 15日 鎮魂祭に加え、たちばな亭の前に建てられた『キリシタン燈籠』の火入れ式。キリシタン研究会の松岡ミネさんの実家（京都）より寄贈されたもの。
- 10月18日 ウガンダ大使館よりウォフバ・ブイ総務夫妻来訪。
- 11月10日 第2回安房地域母親大会で『子どもをとりまく性の状況』について、かにた職員から問題提起。
- 12月7日 『プラハ青少年少女合唱団』を聴きに寮生16名職員5名で行く。
- 26日 風呂のトロン温泉化工事始まる。

もうひとつのKANITA

内戦に荒廃し、エイズの流行するウガンダから助けを求める手紙が、深津文雄牧師に次々と届くようになって5年目。ウガンダに孤児の学校を建て、かにた婦人の村のようにしたいというモーゼス・ブスルワ氏の願いに応え土地代を送る。

そこは、ちょうど日本のかにたのような丘と小川の流れる緑深い谷を持つ広大な土地で、1995年春に記念植樹をし、地元の人たちと開墾し、1996年初夏には定礎式を行う。手作りにしたブロックを積んで、1997年夏に一部開校式を迎えた。

丘の斜面を削って、平屋建の校舎2棟



（8教室）と食堂棟、寄宿舎がゆっくりとしたペースで建てられていった。交通事情の悪いウガンダの田舎では、寄宿制の学校が多く、Kanita Education Centreは、孤児たちにとっては、学校付きの養護施設としての役割をしている。

谷の周囲には、主食にするバナナや豆類、芋類、野菜を植え、現金収入を得るためのコーヒー畑も広がっている。

子どもたちは勉強だけでなく、朝早くから谷へ下りて水汲みをし、畑仕事や、掃除・洗濯などもして暮らしている。

かにたの村人が捧げたクリスマス献金は、毎年Kanita Education Centreに贈られ、医療費などになっている。



高校生のウガンダ支援

1994年秋、安房南高校の学生6名が愛沢伸雄教諭らと共に、今後の海外支援について相談に来る。毎年募金をしているが、もっと直接ふれあえる支援をしたいとのこと。その夏にかにた婦人の村を訪れた、アジア学院に在学中のステュアート・センパラ氏を紹介すると、さっそく文化祭でウガンダの展示とチャリティーバザーを行った。

統合により閉鎖された安房南高校の後を安房高校へ、そののち安房西高校へとこの『ラブ・アンド・ピース活動』は引き継がれ、昨年20年を迎えた。中古衣料や文房具だけでなくミシンや自転車も、コンテナで発送。文化祭のチャリティー

バザーで集めた約10万円を毎年送り、センパラ



氏のウガンダでの活動を支援。子どもたちとの交流も続けている。

1997年

- 2月12日 食堂で文化祭開催。
- 3月19日 市原市の水と彫刻の森で開催中の千葉盲学校作品展『西村陽平と仲間たち』を全員で見学。
- 4月12日 ウガンダ代理大使バカヤナ・キュチヨ氏来訪。
- 5月2日 LBFのワークキャンプ。加藤、上松両氏が草刈り。
- 7月12日 **ウガンダ宛に548箱の衣料がコンテナ1台に詰められて発送。**
 - 23日 福岡出身の2名、40年ぶりの里帰り2泊3日。父母の墓参りと姉との和解。
- 8月10日 上尾合同教会青年会21回目のワークキャンプ。農園の竹伐り。
- 9月23日 ベテスダの日に62名来訪。
- 11月22日 創設者深津理事長米寿。一同感謝と共に切なる願い「長生きしてください」
- 12月14日 チェコ・フィル・プラスのクリスマスコンサートに18人聴きに行く。
 - 15日 安房高、安房南高JRC20名来援。事務室のガラス拭きと会堂掃除。

1998年

- 1月28日 ベゴニア寮前の崖崩れ発生。人身事故はなかったが、アネモネ、ベゴニア、クロッカス寮は裏口出入りとする。
 - 29日 鈴木工務店による崩壊土砂搬出及び安全対策が打たれる。
- 2月16日 岐阜1名入所。
 - 17日 **ウガンダよりモーゼスさん来訪。**
 - 28日 舞踏家里見香華さんの厚意により月1回の『輪になって踊ろう』会発足。
- 3月2日 ガーナのアド夫妻来訪。ミーナ夫人は1週間の実習。
 - 4日 滞在中のモーゼスさんのお話とビデオによる『ウガンダを見る会』。
 - 11日 10時から食堂で**文化祭**。余暇に作った作品を40数人が披露。

- 23日 福岡1名入所。
- 4月24日 崖の復旧のための法面改良工事計画書を東京都に補助申請。
- 26日 NHK教育テレビ『こころの時代』に深津理事長の『苦しみと喜びと』放映。
- 5月22日 **深津春子、23時12分永眠。**
- 24日 深津春子の告別式。
- 7月11日 安房高卒業生によるウガンダ支援サークル『ZIPPYの会』第1回会合を開く。午後、衣料の箱詰め。
- 13日 ドイツより来日中のオスト・アジエン・ミッシェン・の理事長シュナイス夫妻来訪。
- 29日 崖修復工事始まる。補助金の対象とならなかったため寄付金をあてる。
- 8月4日 LBF家族9名のワークキャンプ。“男坂”階段の修復。完成後、みんなで登る。
- 11日 上尾合同教会青年部22回目のワークキャンプ。野菜畑横の竹伐り。
- 10月1日 深津春子著『かいた物語』出版。
- 31日 崖修復工事完了。法面の勾配を緩やかにするため、農園へ上る道を1m移動。
- 11月4日 文京学院大学教授林千代氏と城西国際大学講師堀千鶴子氏来訪。コロニー創設の経緯を取材。
- 14日 館山市文化祭参加の舞踏発表会で、手話舞踏『星空のマーチ』に19名参加。
- 22日 収穫感謝祭。村の生産物を捧げた感謝礼拝で“無農薬元年”を宣言。野外炊餐は農園の収穫物だけで芋おこわと野菜汁。
- 1999年**
- 2月10日 東京善意銀行を通して日本裁断機製作所よりウエス作りに使用する裁断機1台贈られる。
- 15日 食堂とエリカ寮間の歩道に手すり設置。
- 3月10日 第3回文化祭開催。食堂の壁面を飾る。「各々の隠れた能力に圧倒される」
- 29日 各寮階段に滑り止め、手すりを設置。

春子ばあちゃん逝く

「彼女はぼくのよき理解者、よき協力者でしたが、内助者というよりも、外助者で、「かいた婦人の村総務」という珍しい肩書で、あるときは、ぼくを補い、あるときは、ぼくに代わって、この村を産み養い、育ててきた人なのです」

(『かいた物語』序文深津文雄より)



かいた便に掲載された、開所当初の困難極まりない19ケースの指導記録を読むと、村人にいかに強い意志を持ち向かい惜しみなく愛情を注いでいたかわかる。

最後の執筆となった、かいた便『折おり』に有機農業、無農薬に切り替わる時は今と記したとおり、よき協力者を得、育て、この年の収穫感謝祭には“無農薬元年”を宣言するまでになる道筋を作り村の“食”を現在も守っている。

死後出版された『かいた物語』は、1961年～90年のかいたの歴史を伝えている。「要はかいたという、空前絶後の成功と失敗が、正しく記憶され、その祈りが、あやまりなく伝えられることです」(文雄)



村人に「春子ばあちゃん」と呼ばれて慕われ愛され、死後も農園さんからは初物が採れるたびに「春子先生に」と、届けられる。

文化祭

98年3月、食堂で文化祭を開く。村人みんなアーティスト。余暇に作った作品、毛糸編み・レース編み・刺繍・手縫いの袋・絵、1人ずつ自分の作品の披露。

村人の歓声、感嘆、驚き、そして絶大な拍手を浴びて、だれもが主演。

「披露される作品に圧倒される思いでした。1人ひとりの外観には見えない隠されていた才能、感性、何よりも素朴な心、ありのままの表現の美しさに打たれました」(『ディアコニア』222施設だより天羽道子)



- 4月4日 復活祭の礼拝で木村典子さんの洗礼式。
- 16日 市役所より87名分の地域振興券受領。
- 5月1日 デイジー寮2階の1室をトイレに改造。
- 9日 日曜礼拝は桑形亜樹子さん奏楽による音楽礼拝。午後、オルガンコンサート2回。
- 18日 北海道出身者6名、長年の念願かない2泊3日の里帰り。
- 7月10日 午前、大房岬少年自然の家のプラネタリウム見学。午後、安房反核フェスティバルに50名参加。原爆体験の話聞く。
- 18日 かにた教会で、青木健二さん、塩川桜子さんの結婚式が行われる。
- 8月2日 LBF加藤氏ら5名来援。洞窟前のキャンパー用炊事場屋根葺き替え。
- 11日 第23回上尾合同教会青年会ワークキャンプ。11名来援。
- 12日 夏祭りの夜店に、初めて近隣8軒を招待。職員の家族も合わせて160人余で大賑わい。
- 13日 鎮魂祭と共にザビエル来日450年をたちばな亭のキリシタン文庫で記念。
- 9月23日 (株)アルバータより粉石けん製造機寄贈。洗濯や食器洗いに、廃油利用の粉石けんを使い始める。
- 11月4日 木田みな子主宰オルガン奏楽者の会18名が、フレスコバルディのミサ曲を題材にしてオルガン研修会。
- 22日 深津文雄90歳の誕生日。朝、全員でお誕生日の歌を歌い握手せめ。
深津文雄著『底点志向者ジェシュアガ』(説教集)出版。
- 24日 山形県の基督教独立学園高校2年生7名と教員来村。2泊3日のかにたの生活体験。
- 12月10日 ドイツから来日の東亜宣教会会長シュナイス氏、深津牧師の上富坂教会時代のことを聞き取りに来訪7日。

2000年

- 1月18日 厚生省社会援護局保護課課長補佐下道耕二氏、係長伊沢功次氏来訪。構内一巡後、深津理事長と懇談。
- 2月9日 JRCの千葉県南部地区指導者と高校生46名来訪。見学後交流会。
- 3月3日 第2回かいた裂織展、東京六本木の暮らしの手帳社別館で開催10日間。
- 9日 救世軍婦人寮職員3名、慈愛寮職員2名来訪見学。昼食卓で交歓会。
- 17日 文化祭開催。余暇の制作品を披露。
- 4月21日 20日に永眠したYYさんの告別式。出身の兵庫県より婦人相談員村井佐和子氏列席し火葬場にも。
- 23日 18年ぶりに復活祭の朝を食堂に集まり、美しい食卓を囲む。10時から会堂で礼拝。礼拝後雨の中卵探し。
- 5月25日 法人の決算理事会に深津理事長、車で上京。最後の上京となる。
- 28日 深津牧師、体力低下のため日曜礼拝の説教はこれが最後となる。
- 6月8日 大泉ベテル教会婦人会他14名来訪見学後、『底点志向者ジュシュアガ』について深津牧師に聞く。
- 7月13日 臨海保育で毎年来訪の茂呂塾保育園児14名引率6名かにたの山に来訪。例年の“おひげのおじいさん”の接待がなく寂しい。
- 19日 病床の深津牧師に面会の桜井房江さん、昼食後ピアノの演奏。その美しさに一同感動。
- 21日 クロッカス寮台所出火の想定で初めての夜間避難訓練。職員にも連絡網で伝達し全員出勤。
- 8月1日 東京1名入所。
- 15日 初めて深津牧師の不在の16回目の鎮魂祭。深津作詞作曲のカノン「きよらのおとめつれさられ、なげきのなみだあ

ALKZO

1986年1月22日に医務よりの提案で、毎月1回



のアルクゾーを始める。体力に応じて4コースに分け、10kmコースといいながら、往復16kmも歩くことも。1年間完歩するとメダルがもらえ、メダルが5個たまると賞状、10個たまると苺狩りなど、それを励みにみんなよく歩く。1994年からは、熱いラーメンを食べに行くコースも加わる。

ALKZOのうた

作詞 深津文雄



ちいさなお客様

1982年夏より茂呂塾保育園（創設者深津文雄）の子どもたちが、館山での臨海保育の1日にかいたを訪れるようになる。

山を散策してセミを追い、牛や豚に会い、自家製のヨーグルトや、カニパンな



どのおやつを食べ、ユッカ寮で歌を歌ってくれた年もある。

おじいちゃん逝く

「死ぬときは家で」と点滴も拒み、“コロニー”の住み慣れた部屋で最後の日々を過ごした。自力で動けなくなっても、「俺の好きなようにさせてくれ」と自分で決め、死の数時間前まで縦笛の音の甘さをチェックし、彼らしく逝った。

告別の時

71人の“娘たち”と共に、近しい者だけのお別れの時をもちました。かにた婦人の村創設以来、45人の仲間を送りましたが、いつもと同じ、弔辞なしの静かな告別式でした。故人がイタリアのピストイアで見つけた小さなオルガンが、ピストイアの教会に伝わる作者不詳のエレヴァツィオーネを奏でる中、ひとりひとりがゆっくりと、その想いをなきがらに語りかけ、祈りに満ちた時間をもつことができました。



遺骨は、「ほくも死んだら入るからね」と言っていたように、かにた教会会堂の納骨室に納められます。——2年3か月前に急逝した妻と末娘と17人の“娘たち”といっしょに。（『かにた便』100号より）

- ともなく」が繰り返し繰り返し歌われる。
- 17日 夜10時20分、創設者深津文雄永眠。90年9か月の生涯を静かに閉じ帰天。
- 18日 朝食後、寮生に“おじいさん”が亡くなったことを告げる。8月初めに容体を話し、居室の窓の外に飾った黄色いバラを見上げては祈る日々を過ごしてきたので、冷静に受け止められた。
- 20日 10時から創設者深津文雄の告別式。ご家族と村人を中心に行われる。
- 24日 杉並区知的障害者育成会親子工芸教室31名来訪。織物で交流のある佐々木清職員が案内。
- 9月23日 『ベテスタの日』に62名来訪。昼食と交流の後、会堂にてベテスタ創設者深津文雄の追悼礼拝。
- 10月20日 兵庫1名入所。
- 25日 誕生会は“みんなで歌う会”『大きな古時計』を歌う。「おじいちゃんを思い出して泣いたよ」
- 11月16日 市民センターで秋の大バザー開催。ボランティア35名の協力、寮生13名、職員総出で実施。
- 23日 法人主催で『故深津文雄牧師追悼のつどい』が茂呂塾保育園でもたれる。

2001年

- 2月21日 管理棟北側の崖が地盤沈下、浄化槽や生活排水の管が地中で破損し大工事。
- 23日 東京1名入所。
- 5月18日 神奈川1名入所。
- 6月9日 塩川成子職員ウガンダに出張2週間余。Kanita Education Centreに滞在して現状視察。
- 7月27日 今夏の酷暑対策に大型扇風機4台を食堂壁に取り付け。
- 8月14日 上尾合同教会25回目のWCは8日間の交流会となり、夏祭り第3夜にはフォークダンスを楽しむ。

- 18日 『深津文雄召天一年のつどい』。会堂の納骨室に納骨され、先に亡くなった村人たちと共に眠る。
- 9月12日 前日の台風15号の後始末。田んぼで倒れた稲の掛け干しを直す。
- 26日 誕生会で松苗禮子さんのパネルシアター『ちからたろう』他。
- 10月8日 上尾合同教会へ1泊2日で訪問37名。
- 11月24日 鈴木はぎ子さんのヘアーカット5日間で61名。92年9月より9年間に感謝。
- 28日 福島1名入所。
- 12月12日 東京1名入所。
- 21日 栃木1名入所。
- 23日 チェルノブイリ原発事故被災者ナターシャさんのチャリティーコンサート、南総文化ホールに37名。
- 28日 田中保夫牧師夫妻、今年も植木手入れに来援1日。

2002年

- 1月15日 12月入所のSさんの成人式を、手づくりの式次第で行う。
夕方、製菓班の外壁が落ち、コンパネで応急手当て。ここは67年夏のLBFの労作。
- 2月6日 かにたに送られたたくさんの毛布を山谷に届ける。
- 3月5日 東京善意銀行より芋洗い機寄贈。
23日 『日韓交流in館山』の一行150名来訪。
従軍慰安婦の碑と戦闘指揮所の洞窟を見学。
- 4月6日 土曜の午後、松苗禮子さんのお話会に40名。
- 5月9日 みかん採りに今年も天良明子さん来援。
14日 職員定員増の要請に厚労省より3名視察に来訪。
15日 ドイツのベテスタよりディアコニッセ13名牧師1名他来村。村を挙げて歓迎。
- 6月6日 東京1名入所。

追悼の言葉

追悼の言葉の内容に、深津文雄牧師の人物像がよく描かれている。

「聖書学者としての深津文雄」を日本聖書学研究所々長・大貫隆氏が、「盲教育に携わった深津文雄」を日本点字図書館理事長・本間一夫氏が、「バツハ研究者としての深津文雄」をバツハの森・石田友雄氏が、「日本で初めて奉仕女を育てた深津文雄」をイングリット姉とエリザベツト姉が、「婦人保護の実践者としての深津文雄」を城西国際大学教授・林千代氏が、「茂呂塾を作った若き日の深津文雄」を茂呂塾々生代表・大野喜久雄氏が、各々の視点から語った。

「深津さんは…『たしか藤井武の言葉だ』と断って、『信仰とはやけくそだ』という強烈な言葉を教えてくださったことがあります。…この言葉の真意は、ものごとを始めるにあたっていちばん大切なことは“止むに止まれない思い”であって計算ではないということです。…茂呂塾、ベテスタ奉仕女母の家、いずみ寮、かにた婦人の村と、次々に新しい仕事を始めたとき、深津さんは『やけくそ』でした。

…深津さんには深津さんだけの、ときには4人の福音書記者すら知らないイエスがいたのです。…直通電話でイエスに問い合わせた深津さんがなされたことは、イエスの要望に応じて『種まき』をすることでした。

このような素晴らしい種を育てる喜びを、私たちすべての者に遺してくださった深津さんに感謝します」(石田友雄)

ドイツの友

ドイツのヴッパータールにあるベテスダ奉仕女母の家から、ディアコニッセ13名他来村。親しく交わりの時をもつ。コラール『よろこびのこえ』を姉妹たちとカノンで歌い、『やすらぎのいえ』もドイツ語に訳してもらって、共に歌う。

後日、職員研修会で、エリザベット姉に、かにたの初期のようす、かにたの原点などを語ってもらう。



広くなったバザー会場

閉鎖された市民センターに代わるバザー会場を、村の中、かにた川のほとりに建てる。新しい会場で、6月6日に初めてのバザーを実施。大きな車の付いた台に品物を乗せたまま、倉庫のシャッターの中に出し入れできるようになった。倉庫の中もそのまま売り場になるように棚がつけられている。今はたんぼぼホールも新品売り場として使用されている。



7日 ドイツから来日中のエリザベット姉と妹さんが来訪、滞在5日間。職員にかにた創立当時のことを話していただく。

8日 安房地域母親大会に11名参加。ユニセフの二見氏の講演とアフガニスタンの子供たちの写真とビデオに涙する。

7月4日 村内にテントを張ってバザー開催。市民センター閉鎖でバザー縮小へ。

17日 深夜1時40分、全村の非常ベルが鳴り、全員管理棟前にパジャマ姿で集合。会堂納骨室の煙探知機劣化のための誤作動と判明。夜間避難訓練になる。

8月4日 早朝4時仔牛誕生。真っ黒な女の子。

14日 上尾合同教会5名来援3日。

22日 第10回日韓歴史教育交流会参加者80名来訪。山頂の従軍慰安婦の碑を見学。

9月4日 第1回全国裂織展にかにたからも出展。

10月18日 同法人いずみ寮TYさんの遺骨、かにたの納骨堂に納められる。

29日 埼玉1名入所。

2003年

1月6日 南房総では珍しい5～6cmの積雪。階段、坂道は凍結して危険のため、朝食は職員が各寮に届ける。

2月11日 インフルエンザ罹患者が出たアネモネ寮閉鎖1週間。

3月9日 YSさん肺炎で入院するも治療に応じず2日後に退院。インフルエンザでデイジー寮閉鎖。

4月20日 雨の復活祭。恒例の卵探しは食堂で。

5月2日 共同作業で植樹。ユッカ寮の南斜面に内山緑地建設より寄贈された8種170本の苗木を植え込む。

26日 神奈川1名入所。

6月6日 構内に新設のバザー会場が完成して初のバザー開催。たいへん便利な倉庫。

8月3日 第9回安房地域母親大会に12名参加、『国境なき子どもたち』の報告を聞く。

- 7日 夜、創作オペラ『華狐』の公演を観に白浜町フローラルホールへ。
- 13日 嘱託医赤門整形外科内科の鈴木勝先生が亡くなられる。開所以来38年かにかたを見守ってくださった。
- 15日 ウガンダから柴田忠彦、モニカご夫妻と重度障害をもつリチャードくん来訪。
- 17日 深津文雄召天3年記念にあわせて『召天者の日』のつどいを持ち、48名の亡き友の永遠の休息と平安を祈る。以後毎年をつどいとなる。
- 9月14日 元江戸川寮指導員の佐藤美喜さん、姪御さんと来訪。江戸川寮出身者7名と親しく交流した後、老健施設入所中のSTさんを見舞う。
- 10月18日 『もうひとつの歴史館・松代』より6名来訪。戦闘指揮所と山頂の碑を見学。
- 11月3日 館山市民文化祭に衣料班の裂織作品を出展。
- 12月22日 山形基督教独立学園高校で天羽施設長講演。

2004年

- 3月14日 共産党参議院議員吉川春子氏、従軍慰安婦問題研究会金英姫氏、館山市議神田守隆氏他来訪。山頂の碑を訪ねる。
- 20日 春分の日の午前、3頭の牛が売られて牛舎が空となる。牛飼い27年の歴史に幕。
- 27日 石けん作りの講習会に横田職員他参加。
- 5月12日 甘夏の収穫に3月に退職した重田忠さん、安田寿太郎さん来援3日。
- 6月11日 SMさん、生後まもなく手放した娘さんと25年ぶりの再会。里親さんに聞いたと岩手から単独で来訪。市役所からの連絡で天羽施設長が出向き、一緒に『にじのいえ』に1泊。翌日、南房パラダイスで親子のひとときを過ごす。
- 17日 東京都婦人保護施設従事者会の5施設10名来訪。2日間にわたり交流見学と

医療機関とのつながり

開所1か月後より、赤門鈴木病院（産婦人科・内科）の鈴木勝医師と田村第二病院（精神科）の清水哲医師を嘱託医にお願いし、週1回の診察を、村の医務室ですることになった。開所式の翌日には自殺未遂のKMさんが田村第二病院へ入院、その夏には、妊娠とは気づかれなかったYMさんが未明に赤門鈴木病院で出産……。それ以来50年、現在は赤門整形外科内科の田中医師と田村病院の安藤医師、北条歯科の石井医師に、月に2回、医務棟での施設内診療をお願いしている。

病状によっては総合病院等にも受診。知的・精神的なハンディキャップをもち、家族のない人たちにも十分な治療を受けてほしいので、時には他の医療機関にもセカンドオピニオンを求めている。

召天者の日

8月17日、この日は創設者深津文雄牧師が天に召された日です。早くも召天3年。どのような形で記念したらよいか——今まで38年間に亡くなったすべての友を、共に記念してはどうか、きっとこのことを先生も喜んでくださるに違いない——と、『召天者の日』を行いました。

在りし日の友を偲び——『レクイエム』を歌い、主の祈りの後『みそらにむかう』を歌って——平安に満たされていました。

かにかた婦人の村の記念日の1つとなった『召天者の日』を、かにかた創設の原点に立つ日としたらどうでしょう——創設者を記念するとは、創設者の意志を確か



め、そこに立ち、引き継ぐ自覚をもつことではないでしょうか。

「すべての不可能が可能になる。その根本にあるものは、ただ一片の信頼なのです。信ずべくもないときに、それを信じてやる、——その信頼の貸しこしが、この世界を生んだのです」見学者の質問に答えた創設者の言葉です。——もう一つ、創設者の造語「底点志向」。この4文字に込められた心、志。——現在のかにたの姿が、日々の働きが、この本質からそれず、この精神の上に営まれているかどうか、確かめなければなりません。

(『かにた便』110号より 天羽道子)

農園の縮小

牛を飼っていると、365日休みなしの搾乳とそれに伴う作業が欠かせない。作業する村人たちも高齢化で体力が衰えてきた。朝夕の搾乳をしていた酪農担当の職員2名が定年退職となる2004年3月末、ついに牛舎を閉鎖することになった。最後の牛が売られていった春分の日の朝、“おとうちゃん”は顔を見せなかった…。豚舎は1997年秋に閉鎖。今は山羊のモコが草取りの仲間入りをしている。

谷の奥の“平田”だけを残して田んぼも返却。野菜と果樹、粉石けん作りの他ハーブにも力を入れる。ビワの葉のお茶は、バザーの時や来客にも販売し、好評。

- ボランティア。
- 21日 14日に無断で東京に出たDMさん、「かにたに帰りたい」と戻ってくる。
 - 26日 NPO南房総文化財・戦跡保存活用フォーラムより7名草刈りボランティア。
 - 7月3日 『鈴木大介ギターソロリサイタル』8名参加。
 - 4日 母親大会『太田真季平和コンサート』と『反核フェスティバル』参加45名。
 - 12日 10日未明に急逝した奉仕女青木しのぶ姉の告別式に“心の母”として支えられていたMFさんも参列。かにた創立から14年間を寮母として担う。
 - 24日 NPO戦跡保存フォーラムのメンバー17名山頂の碑周辺の植木手入れ。
 - 27日 元職員佐々木房江さん、週1回ユッカ寮で朗読ボランティア開始。
 - 8月10日 夏まつり第2夜は元職員野田昌敏さんの出前コンサート。以後毎年のように来てくださる。
 - 12日 上尾合同教会より8名、夏まつり第3夜の夜店に焼きそば屋を。
 - 14日 山頂の碑の前で鎮魂祭。ビデオ塾の池田恵理子さん取材に来訪。
 - 16日 稲刈り。今年からもち米の平田1枚だけとなる。かけ干しして20日に脱穀。
 - 18日 職員総出で食堂の床張り替え2日。元職員重田忠さんも応援。
 - 21日 第8回戦跡保存全国シンポジウムが館山市で開かれ、天羽施設長も発言者に。かにた構内の地下壕と慰安婦の碑見学に早乙女勝元氏はじめ多数来訪。
 - 26日 館山郵便局より郵政弘済会寄贈の壁掛け扇風機6台届けられ各寮に設置。
 - 9月17日 SMさん群馬県の姉宅へ一時帰宅。
 - 20日 久しぶりの絵画教室、12名参加。
 - 30日 いずみ寮より40名、南房総1泊旅行の途次来訪。定員110人の食堂にみごと

- に150人座り、カレーライスで交歓会。納骨堂に眠る青木しのお姉に花を捧げる。
- 10月6日 昼食時、糖尿病の人たち5名の特別テーブルを『キャベツテーブル』と名付け、キャベツダイエットを試みる。
- 23日 絵画教室参加者で川村記念美術館の『ロバート・ライマン展』を鑑賞。抽象画に感激する姿が印象的。
- 24日 インドネシアから海洋大学に留学中のウィングさん礼拝に参加。今日が誕生日とのことでお祝いの歌で祝う。
- 25日 朝食卓で新潟中越地震義援金の話が出て、お小遣いの中から募金箱に入れられた135,000円をHSさんの出身地川西町の社協へ送金する。
- 11月12日 韓日文化交流通訳の黄慈恵さんと職業性疾患疫学リサーチセンター綱岡孝夫氏、山頂の碑見学に来訪。足尾銅山に強制連行され塵肺で亡くなった韓国、朝鮮の方たちの記念碑建立の参考にと。
- 21日 収穫感謝祭。礼拝後の野外炊爨に山頂の碑見学を訪れた新日本婦人の会の方々や元職員類家栄子さんも加わる。
- 12月8日 韓国の元従軍慰安婦姜日出ハルモニと通訳の姜済淑さんが、東京都女性相談センター秋山さんの案内で来訪。
- 17日 館山市社協より中古の車椅子対応リフトカー寄贈。
- 19日 『プラハ少年少女合唱団』公演に16名。
- 2005年**
- 1月12日 山谷へトラックいっぱい毛布、ジャンパー、米など届ける。
- 2月2日 **かにた40周年を記念する多目的ホールの定礎式。**
- 15日 スマトラ沖地震へのカンパ72,461円をNPO『国境なき子どもたち』に送る。
- 3月14日 JR東労組74名来訪。平和学習の一環で山頂の碑と地下壕見学。

糖尿病対策

痛いとか苦しいとかの自覚症状がない病気だけに、糖尿病とのつきあいは難しい。知的なハンディキャップがある人にはなおさら、病気の理解、血糖値の数字の高い低いなどがわかりにくい。ともすれば、制限を受けることばかりで、人格を否定されたような感じを受けてしまう。カロリー制限のある食事を、仲間と楽しく食べたいと試行錯誤が続く。

2004年秋、昼食時に糖尿病の人たち5名の特別テーブルを開設。話題のキャベツダイエットを参考に、山盛りの千切りキャベツをテーブルにドンと置いて、『キャベツテーブル』と命名。医務の職員や食育インストラクターの資格をもつ職員が同席し、ゆっくり噛んで食べる。その日のメニューと、キャベツ、キノコ、ところてん、無糖コーヒーゼリーなどのローカロリー食品を添えて、疎外感を和らげる工夫を続けた。

しかし、「寮の人と同じテーブルで食べたい」「量もみんなと同じがいい」と、キャベツテーブルそのものが徐々に負担になり始め、3年半で終了。

昼食だけ工夫しても、小遣いを制限しても、担任がいない夜間に食べたり、仲間がお菓子をくれたり、血糖値のコントロールは思うようにできない。ついに血糖値の高い2人が、24時間職員のサポートがあるユッカ寮で暮らすことになった。数年間の努力の成果が出て、現在は両名ともアネモネ寮に移り、極力自力でコントロールできるように奮闘を続けている。

みんなが集う『たんぽぽ』

40周年記念として建設された多目的ホール『たんぽぽ』は、村人たちにとって長年の念願だった。それまで大勢が集まる行事といえば屋外か、食堂で食卓を端に寄せて場所をつくり出すしかなかった。また、高齢化が重要課題となり、みんなが集まって体を動かすことができるホールの必要性は差し迫っていた。

1階はキッチン付きの小ホールで、図書コーナーもあり、読書、学習、編み物、お茶会など、2階は体育館で、大人数での各種レクリエーションや大スクリーンでの映画鑑賞などを楽しむことができる。

多くの方々の支援で完成した『たんぽぽ』は、現在ではバザー会場や外部の方々の会議等にも利用され、みんなが集まって楽しむ場所、か



にたの村人たちにとってなくてはならない場所となっている。

書初め大会

わたしは「ひかり」って書きたい。わたしは「世の光」「平和」「朝日」「新春」——とお手本を書いていた。



- 4月29日 東京女子大園遊会で裂織り作品を展示即売。
- 5月18日 東京善意銀行招待の『木下大サーカス』観覧に調布へ。春のバス旅行の一部。
- 6月16日 オルガンビルダー土屋昭彦氏来訪。飯沢牧師の案内で辻宏氏作のパイプオルガンを見学。
- 28日 多目的ホール『たんぽぽ』落成感謝の集い。厚生労働省母子家庭等自立支援室の山本麻里室長から祝辞をいただく。その後、深津純子さんらによるコンサート。
- 7月3日 安房反核フェスティバルに56名参加。
- 9日 母親大会『子どもたちに平和を手渡そう』で天羽施設長講演。
- 8月4日 西千葉教会20名来訪。会堂のパイプオルガンで小礼拝を行う。
- 15日 上尾合同教会5名来援2泊3日。鎮魂祭に参加。
- 17日 『召天者の日』のつどいで、上尾合同教会の羽倉信彦さん、創設者深津文雄への思いを語る。
- 9月11日 最高齢（当時）のTFさん91歳で永眠。かにた婦人の村最初の入所者。
- 16日 終戦時、アメリカ軍本土初上陸が館山港だったことを記念して来日したモントレイ市民グループ42名、山頂の碑見学。
- 17日 『安房平和のための美術展』の売上金より22万円寄贈される。
- 18日 高校時代卓球選手だった宇佐美希美佳さん、日曜の午後、たんぽぽホールで村人たちと卓球を。
- 28日 たんぽぽホールにて岡田ひさとし氏の指導で転倒防止ストレッチ体操。
- 10月9日 映画『赤い鯨と白い蛇』の撮影のロケ地として村内の戦闘指揮所跡が使われる。
- 30日 千葉県少年少女オーケストラのコンサートに招待され南総文化ホールへ。
- 11月3日 在日韓国人・女性同盟足立の51名来訪。

- 19日 南総文化ホールでかにた婦人の村主催の映画会『石井のおとうさんありがとう（岡山孤児院物語）』上映。
- 12月3日 たんぽぽホール2階も使いバザー開催。
- 17日 脳梗塞で入院中のHFさんに、もういないと思っていた娘さん一家のお見舞い。50年ぶりの母子再会。
- 22日 かにた教会のオルガンをつかったオルガン建造家辻宏氏永眠。

2006年

- 1月12日 ボランティア江尻恵子さんの支援により、Sさん週1回の学習開始。
- 21日 たんぽぽで料理教室7名参加。
- 30日 西船アートギャラリーで『かにたフェア』開催。オープニングに3名出張。
- 2月9日 婦人保護民営施設長会が休暇村館山で開かれる。1日目にかにた見学、協議会をたんぽぽホールで行う。
- 3月4日 斎藤陽子さん、造園業者連れてソメイヨシノの“てんぐ巣病”の病枝切除。
- 7日 いずみ寮職員同行で、韓国ナムムの家に就職する村山一兵さん来訪。
- 8日 かにた教会で教会員松岡九二男氏の告別式。深津文雄と会堂へ登る男坂の階段を造った同志。
- 14日 韓国の小学校教師崔鐘順氏、東大大学院を終えて帰国前に来訪。
- 4月25日 ボランティア江尻恵子さんによる初めての習字教室に16名。
- 5月11日 福祉新聞福田敏克氏来訪。『売春防止法50年、原点と視点』をテーマに取材。
- 6月6日 西船アートギャラリーと千葉友の会の協力でかにたバザーを西船で開催。続いて9～18日には『古布の市』を開く。
- 18日 たんぽぽホールで吹奏楽コンサート。館山吹奏楽団と高校生含め18名来演。
- 30日 辻宏氏作のポルトティーフ（抱えて演奏できる小さなパイプオルガン）が届く。

かにたフェア

裂織り・裂織り体験・裂織りの製品・古裂・陶芸班作品・洗濯班制作の魔法のたわし(アクリル)・農園生産の大根、キャベツ、蕪、キンカン、赤とうがらし、ウコン、大豆、びわの葉茶、ローズマリー、ポプリ、切り干し大根、漬物(大根白菜)、梅干し・パン工場の天然酵母パン、オスターツォフ・廃油から作った粉せっけん、かにたの山で咲き誇る水仙など作業班が心を込めて準備した物が売られた。

また、村人たちの日ごろの生活の中で生まれた作品の展示室が設けられた。作品のもつエネルギー、美しさ、完成度の高さはお客様の感動を呼ぶ。



この展示を通して、私たち自身もかにたとは、どういう村なのかを再認識する。

お習字教室



あまりの達筆に教えてくださる江尻さんは思わず「お手本よりずっと上手！」

字を持たぬOさんの埋もれていた生命が引き出される瞬間。



楽しいキャンプ

元気で体力がある人を中心に、車で30分ほどの大房岬キャンプ場へ。「昔、小林先生とキャンプしたよ」という人も。リヤカーでの荷物運びに始まり、テント設営、海岸での釣り、薪割りや火つけ、野外炊さん、キャンプファイヤー、寝袋・毛布でテント泊、岬の散策……不便なが



らも自らの手で作り出す楽しみや、豊かな自然を直に感じる喜びは、かいた

の生活の原点を凝縮したかのようでもある。楽しみにしている村人たちのため、不定期ながら現在も続けられている。

運動教室で健康づくり

『たんぼぼ』の完成に加え、スポーツ好きな職員が就職したこともあり、月に1回の運動教室が始まった。村人たちのADL低下を少しでも防ぎ、かつ楽しい時間を過ごすのが目的である。

年齢も身体能力もさまざまなので内容は試行錯誤したが、ストレッチから始まり、手足を動かす体操、ボールを使った運動を行い、最後にボウリングゲームを楽しむという形が定着した。内容はもちろん楽しい雰囲気づくりが功を奏し、ボウリングは村人たちの楽しみの一つになっている。



- 7月2日 館山音楽協会のご招待でミュージカル『白雪姫』に48名。
- 10日 映画『筆子、その愛』を山頂のゲストハウスたちばな亭で撮影。
- 16日 2年前に25年ぶりの再会を果たしたSMさんの娘さん、婚約者の青年をお母さんに会わせたいと来訪。
- 8月9日 未明の豪雨でエリカ寮玄関脇の土砂崩れと製菓作業棟の床上浸水。
- 18日 上尾合同教会ワークキャンプ30年皆勤の記念品として陶芸班の花瓶を贈る。
- 9月2日 館山ユネスコ協会のご招待で『楽しいコンサート』に56名参加。
- 3日 恵泉女学園大学平和研究グループ『占領期の性』研究プロジェクト8名来訪。
- 29日 大房岬キャンプ場での1泊キャンプに18名参加。
- 10月7日 この日のバザーから、地元の知的障害者施設中里ワークホームのラーメンとうどん、福祉作業所ふれあいハウスのパンとコーヒーの出店あり。
- 19日 売春防止法制定50周年記念に婦人保護事業功労者大臣表彰を7名、感謝状を7名受ける。
- 11月4日 たんぼぼホールで月1回の**運動教室**始まる。
- 7日 日本基督教社会事業同盟の研修会会場となる。
- 12月9日 現代座によるハンセン病をテーマとした歌と朗読『遠い空の下の故郷』をたんぼぼホールで。外部の方も来観。
- 10日 韓国『ナムムの家』のカン・イルチュルさん他6名2年ぶりに来訪。
- 29日 餅つきにLBF10名、上尾合同教会8名来援。田中保夫牧師夫妻は植木の剪定に来援、里芋をいただく。

2007年

- 1月19日 ノロウイルス発生。各寮に広がり対策

に追われる。

- 22日 保健所が来てノロウイルス対策会議。
- 5月3日 たんぽぽで山口恵子さん他によるジャズコンサート。
- 5日 ユッカ寮前広場で知的障害者通所施設中里ワークホームが出張ラーメン店を開く。
- 28日 たんぽぽで週1回の毛糸教室始まる。
- 6月12日 市管理栄養士渡邊侑子氏らによる食育出前授業をたんぽぽホールで開催。
- 17日 ミュージカル『眠れる森の美女』に招待され、南総文化ホールへ41名。
- 8月13日 ペルセウス座流星群を見る会8名参加、23時から管理棟前で。
- 14日 上尾合同教会7名来援。夜は川崎のグループホーム職員による『テイクケア5』のコンサート。
- 15日 山頂で鎮魂祭。wam（女たちの戦争と平和資料館）16名、アジア心情文化交流会7名参加。
- 22日 映画『筆子、その愛』を南総文化ホールで鑑賞48名参加。
- 27日 韓国挺身隊問題対策協議会3名来訪。
- 31日 上野の森美術館にて全国裂織展。OHさん、HTさん2名の作品が入選展示。
- 9月6日 会堂の鐘のメンテナンスに製作者西田金悟氏長崎より来訪。献鐘されて12年。
- 24日 『ベテスダの日』に38名来訪。
- 11月14日 天羽施設長、フェリス女学院の奉仕週間礼拝で中高生にかにたの話をする。

2008年

- 1月26日 館山駅西口で開かれた里見朝市に、かにたの衣料班も出店。
- 30日 1月の誕生会、SMさんが編んだ色とりどりの帽子82個を飾る。
- 3月8日 盛岡市民福祉バンクより3名、バザー用品の受け取りにトラックで来訪。以後、交互に行き来するようになる。

毛糸教室

Hさん 7年の入院生活を終え帰ってきた。ひととき繊細なHさん。かにたで生きていくのさえ大変で、お山のカラスが、夜中の風の音が、親切でおせっかいを焼くKさんが怖い。退院1か月で「こわいよ、こわいよ」が始まる。でもかにたには病院にない“生活”がある。仲間のやさしい助けで、ここで生きることを選ぶ。

週1回の毛糸教室。担任の洋服の端をしっかりと握り、離れられないが、織り始め



ページェントの衣装に

るとその心を表現する。どんな人も、内在するものを吐き出す手段さえあれば、命はよみがえり、新たな力を生む。

Tさん 小さい体を90度、いえ、もっと曲げての生活。働き者のTさんも、胸水



がたまりもう働けません。時として、大声をあげドスのきいた怒鳴

り声。午前中は編物をしているAさんの足元でぐっすりと。ある日、小さな織り機を拵えて声をかけると「できねえよ、そんなむつかしいもん」ほんのちょっと間があいて「やってみるか、できんかねえ」

見る間に目が輝き、声が高揚。「ほーほー、ええねえ」作り出す自分に感動の声をあげる。

そして100個のボウシに

かにたの村人は手仕事が好き。みなさまが送ってくださる豊富な毛糸があり、テレビを置かないこの村には時間がたっぷりあるからでしょう。みんなせつせと編んでいます。どれも宝石のような輝きを放っています。作品は、たいてい誰かの贈り物になります。どんな小さな編み物も、お手紙も、絵も、心から「ありがとう」と受け取ると、また次の作品が生まれます。病気がちなSMさんを励ますつもりで「帽子100個編んでくれる？」の



お願いに、生まれた色とりどりの帽子。村人たちに贈られて、贈り主も、贈られた人もなんとしあわせ。

(『かにた便』123号より)

盛岡市民福祉バンクと交流

「衣料班が、今の形をとるヒントを与えてくれたのが、西ドイツのベーター、アメリカのグッドウィル運動、盛岡市民福祉バンクです」(1979年『かにた便』17号より)

37年前の出会いが、新たな繋がりとなり動き始めた。かにたへ全国各地から送られてくる貴重な中古衣料。福祉バンクの精神——修理、リフォーム、リサイクルまで視野に入れ、再生できない物もすべて資源に戻すことを徹底し、社会の在り方、人間の生き方も同じである——とに共感し、交流が始まった。

現在は盛岡での自立を目指すTさんの実習をバンクショップでお願いしている。

- 4月5日 かにたに協力してくださるボランティアの方々60名を招待して『ボランティアの集い』を開く。
- 8日 DMさん、養護施設で育った息子の高校入学式に上京。
- 15日 女子栄養大学栄養クリニックのヘルシーダイエットコースを職員が受講。肥満グループの健康指導につなげる。
- 5月5日 南総文化ホール『童謡まつり』41名参加。
- 7月4日 『世界がもし100人の村だったら』著者池田香代子氏来訪。
- 6日 安房反核フェスティバルに38名参加。
- 8月14日 上尾合同教会来援4日。朝食時の讃美歌に自然とハーモニーが加わる。
- 21日 上富坂教会より由緒ある大きな木製のテーブルが届く。たちばな亭に設置。
- 9月13日 OKさんの息子来訪、48年ぶりの対面。
- 10月8日 参議院会館での『慰安婦問題の早期解決を求める院内集会』に天羽施設長参加。
- 16日 職員研修会。ドキュメンタリー『街に生きる』を見て、かにたのあり方を考える。
- 11月10日 天羽施設長、横浜共立学園の特別礼拝で中高生にかにたの話をする。
- 25日 安房地域JRC高校生メンバー協議会をたんぼぼホールで行い、昼食時に交流会。午後は食堂の床磨きと村内見学。
- 26日 肥満対策のための健康教室が始まる。
- 12月4日 桜井房江さん主宰の『タクトF』によるアドベントコンサート。リコーダーアンサンブルの音色もコーラスも、みんなの心に吸い込まれる。
- 25日 降誕祭。ページントの牧人たちの衣装が、毛糸教室で織られた美しい布で仕立てられたものになる。

2009年

- 1月25日 館山若潮マラソン2kmコースに3名参加。毎年フルマラソン出場の職員を熱心に応援してきたが、今年は自分た

ちも走りたいと挑戦。週2回の練習を重ねた甲斐あり完走。

- 3月7日 小林正俊さん来訪。1964年かにかに上る道路1号線を切り開くワークキャンプに参加、当時は野宿だったとのこと。
- 4月28日 誕生会。館山子ども文化研究会3名によるボードビル『てたたきのうた』と『ドレミの歌』を楽しむ。
- 5月4日 中国海南島のハイナンネット来訪取材。
- 6月9日 近くの田で第1回ホタルを見る会、10名参加。
- 24日 誕生会。須藤牧場の絵本『牧場のおはなしモモコ』を携え、モモコ読み聞かせ隊7名が登場。
- 8月2日 『コバケンとその仲間たちオーケストラ』に招待され25名南総文化ホールへ。
- 10日 上尾合同教会来援、ペンキ塗りの仕事を依頼。
- 9月2日 崖の非常階段のペンキ塗り共同作業。
- 10月3日 フィリピンの水害援助用として衣類16箱を福祉バンクへ送る。
- 11月5日 村人全員での『あるけあるけ大作戦』始まる。朝の心地よい空気にふれながら、平田まで往復の田んぼ道を歩く。
- 22日 収穫感謝祭。
- 創設者深津文雄生誕100年記念日**なので、納骨室に下りて“おじいさん”に誕生日のあいさつ。

私たちも走ってみたい!

『館山若潮マラソン』は、遠方からも多くのランナーが集まる人気の大会で、館山市の一大イベントである。

Cさんの「私たちも出てみたい」という一言がきっかけで、昼休みにマラソンの練習が始まった。ほとんどウォーキングから始める人、かにかの坂を駆け登る人と走力はバラバラ。糖尿病で激しい運動の影響が心配な方もいて、参加の是非についても議論された。伴走の他に沿道にも職員が立つこと、また、短い2kmコースはファミリーの部で、成人と小学生の家族・友人という条件のため、職員とその子どもの協力を仰ぐなど、多くの助けを得て参加が実現した。

参加した3名のうち最も心配された発案者のCさんは、前半は走って、後半は歩いて無事“完走”。他の2人もしっかりと走り切ることができた。



翌年以降は、このチャレンジで自信を深めた人や、新たに刺激を受けた人など、メンバーは入れ替わりつつ、10kmコースへ数人の参加が続いている。



かにたの入所者と家族とのつながり

姉との和解

1997年7月23日、「福岡に行ってみたい、姉さんに会いたい」と訴えたYTさんと、福岡県出身のNYさんが、故郷を訪問する。

NYさんの姉は、「主人が泊って良いって言っているから」と、門司港駅から小倉の姉の家へNさんを連れて行ってくれた。2人が会うのは37年ぶり。散々迷惑をかけた姉とこうして和解できる日が来て、本当に行ってよかった。

一方のYTさんは、奇跡的に探し当てた父母の眠るお寺を訪問。住職がYさんの父のことを覚えておられ、話してくださる。帰途、新大阪駅で姉と姪に会い、昼食を共にする。何度も断られたがお願いし続けて堺から連れて来てもらったのに、本人同士の会話はまったくなかった。が、並んで撮った写真は大切にしている。

神様の誕生日プレゼント

2004年6月11日、SMさんの生後すぐ乳児院に預けた娘が、25年半ぶりに母の居所を探し当てて訪ねてくる。父親のことを聞かれると…と不安でしり込みしていたが、農業の勉強をした娘と熱帯植物園での会話も弾み、再会を約束。Sさんは6月生まれ。「神様の誕生日プレゼントだね」。2年後、婚約者と再訪。

50年ぶりの再会

2004年12月17日、脳梗塞で入院中のHFさんに、「母親はもういない」と思っていた娘一家が来訪。以前から「私にはT子という娘がいる」と言っていたが、やっと居所がわかったの再会。口はきけなかったが、その名を聞いて涙をこぼす。

亡くなって初めて

2005年3月10日、裂織りの名手YIさんが亡くなる。夕方、黄色のラッパスイセンと百合の花を抱えて、娘が岐阜から来村。色とりどりの花に囲まれてお別れし、迷惑をかけた娘の胸に、亡くなって初めてしっかりと抱かれ、故郷へ帰って行った。

心のよりどころ

2015年3月7日、入所1年7か月で入退院を繰り返している若いNKさんが、福島の実家に1泊する。姉も仙台から帰省して、家族でドライブしたり食事をしたり、とてもよい時間を過ごしたようだ。別れ際、余命を宣告されている病身の父が「がんばるんだよ」と、Nさんの顔をしっかりと見て、繰り返し言い聞かせた。その思いを託されて帰途につく。

その後も2回の入退院。父は5月に死去し、今はまだ地元に戻れないが、年に数回の帰省を続けることで、自分の心の居場所をもち、安定してほしいと願う。

* * *

この他にも、息子の入学式に行ったり、100歳の母と姉が訪ねてくださったり、1泊旅行の時に家族を訪ねたり、毎年呼んでくださる方もいる一方で、かにた婦人の村に入所する方は、もっとも困難なケースの方なので、たとえ肉親がいたとしても拒否されることが多い。家族との関係修復は、焦らずに繰り返し連絡をとり、機会を捉えて行うようにしている。

2010年

- 1月7日 SKさん無断外出。真夜中に横浜南署の連絡で迎えに行く。
- 4月12日 西船アートギャラリーにかにたバザーの常設店オープン。
- 16日 ユッカ寮ボランティアとして山岸育子さん来援。折り紙やお菓子作りをする。
- 6月25日 栃木より相談員2名来訪。自立を希望するSさんの今後について話し合う。
- 30日 THさんの成年後見人手続きを始める。
- 7月15日 サイクリングしたいという声に応じて自転車検定を行う。29~70歳7名参加。
- 27日 館山市の小高記念館の『知恵袋講座』で天羽施設長『かにた婦人の村のあゆみ』を話す。
- 30日 AED導入。ユッカ寮入口に設置。
- 8月5日 第9回日中韓青少年歴史体験キャンプ160名、2組に分かれ地下壕と山頂の碑見学。会堂で天羽施設長の話を聞き質疑応答。
- 9日 日韓学生フィールドワーク第15回ピースロード27名来訪。昼食を共にし、天羽施設長の『かにた婦人の村と山の碑』を聞いて話し合う。
- 16日 上尾合同教会第34回WC。納骨堂の清掃と戸外非常階段のペンキ塗り。
- 9月1日 THさん、認知症対応グループホーム『やつかガーデン』に移る。高齢者の地域移行支援第1号。かにたで長年にわたり結ばれた絆を絶やすことなく、今後も退所者支援として交流が続けられる。
- 7日 AEDを使った救急救命講習会を消防署の指導で実施。職員全員受講。
- 23日 『ベテスダの日』に39名来訪。
- 24日 天羽施設長、自由学園初等部6年生と父母総会でかにた婦人の村の話をする。
- 10月5日 天羽施設長他3名、横田全婦連会長同行で厚生労働省訪問。母子家庭等自立

入所者の高齢化対策

かにた婦人の村を創設するにあたって、創設者深津文雄は、終生入所できる施設を希望していたが、厚生省が認可した施設形態は長期入所が可能な婦人保護施設であり、正式名称は『婦人保護長期収容施設（2011年4月婦人保護長期入所施設に改訂）』となった。精神障害や知的障害など課題が重複する利用者が社会復帰できる資源や退所先は、当時の社会状況では見当たらず、施設での生活が長期化する中で、入所者の高齢化が進み、生活支援のマンパワーがしだいに不足した。

そのため、2000年に厚生省に対して、職員2名分の事務費の加配を願い出たが、その年は保留となった。2001年の省庁再編により、婦人保護事業の担当がそれまでの社会援護局から雇用均等・児童家庭局となり、加算が再検討された結果、2002年と2003年の2年間の臨時加配が認められたが、高齢入所者に対する「他方他施策を用いた健全な運営計画」を法人が提出するまで、新規入所を停止するという措置が同時に取られた。

当時の天羽施設長は、全国の措置元都道府県に、高齢入所者を措置元に戻して、措置元内で高齢者施策により支援してもらうことが可能かどうかについて尋ねたが、「かにた婦人の村で長年積み上げてきた安定した生活を、本人の意向に反して、急変させるべきではない」との回答が大半であり、入所の継続を求められた。

そのため、臨時加配終了後は寄付金の一部を高齢者支援に充当し、高齢者の生

活の質の維持に配慮してきたが、新規入所がない中、施設の財務状況は年々厳しくなった。2007年1月、この状況を打開するべく、施設内に『高齢者問題検討委員会』を立ち上げ、1年間協議したが、具体的な結論を見出せなかった。

2010年に再度協議の場をもち、厚生労働省にも内容を逐次報告した。厚労省は、①事務費の単価の計算式の改訂（事務費総額÷定員数⇒事務費総額÷実員数）を約束し、②高齢者棟ユッカ寮の高齢者共同住宅化、③外部介護サービスの導入、の計画を認めた。ただし②については、館山市が年金収入のない入居者の生保負担に難色を示したことから見送られ、その代わりに、ユッカ寮は婦人保護施設を維持しながら、介護保険サービスを在宅利用できるようになった。こうして2011年4月より、ユッカ寮に住む高齢入所者全員が要介護認定を受け、通所や訪問サービスの利用を開始した。

成年後見制度の活用

介護保険サービスを利用するためには、利用者が事業者と直接契約をする必要があるが、認知症などで契約能力が低下している場合、申し立てをして後見人を裁判所に選任してもらい、適切な契約ができるように支援する制度が成年後見制度である。かにた婦人の村では、上記のように介護サービスの在宅利用が可能になった2011年4月より制度の利用支援を開始し、2015年10月1日現在まで、市長申立てにより7名、本人申立てにより1名がこの制度を利用している。

支援室長他3名にかにたの状況説明と新規入所再開の検討をお願いする。

- 10日 成年後見制度活用講座に職員1名参加。
- 28日 浜松の十字の園創立50周年記念式典でディアコニアについて天羽施設長講演。
- 11月16日 たんぽぽホールでのお茶会に38名。お手前は天良つるゑさん92歳。
- 22日 医務棟の建設工事始まる。
- 12月12日 辻紀子著『峠の樅の木と3台のパイプオルガン』出版記念オルガンコンサート。演奏はイタリアのR・ベラッティ氏。

2011年

- 1月12日 ALKZOで初めてボウリング場へ行き、本当のボウリングを楽しむ。
- 25日 厚生労働省の竹林悟史室長、岡本裕太係員、相澤孝予女性専門官、館山市役所訪問後に来訪。運営改善のための現地視察とヒアリング。村人たちと昼食、交流の後、職員との懇談会を19時半まで。丸1日を精力的に、好意的に。
- 27日 読み聞かせボランティア岡田尚香さんユッカ寮に月1回来援。
- 3月11日 厚生労働省に職員4名訪問。今後の運営方針について厚労省の意向を竹林室長が話し始めた途端、大地震発生。会議を中断し日比谷公園に避難。翌午前3時ようやく帰村。村内は農園の甘夏が落ちた程度で被害なし。
- 14日 臨時職員会議で計画停電への対応確認。
- 24日 Sさん入所から9年半を経て、婦人保護から知的障害者ケアホームに移る。自立を目指した地域移行は初のケース。衣料班より盛岡市民福祉バンクへ毛布、タオル、石けん等の被災地救援物資を、救援車両の許可を得て搬送。
- 4月6日 「募金しかできないよね。わたしたち、いつもみんなのお世話になっているんだから」とのOMさんの言葉に村人た

ちから60万円余が集まり、東日本大震災の義援金として送る。

- 11日 東日本大震災被災地への『なつみかんプロジェクト』に、かにたの甘夏3箱と野菜など集めて石巻へ送る。
- 16日 地域の織物グループと合同で、かにたの裂織作品を館山駅ギャラリーに展示。
- 30日 **医務棟完成。**
- 5月11日 小林いさ職員退職によりフリージア寮閉鎖。在寮5名は他の寮に各々引越す。
- 31日 千葉県地域定着支援センター設立記念研修会に職員参加。
糖尿病のTTさん、女子栄養大学クリニックの講座に職員と参加。
- 6月11日 天羽道子、法人理事長を退任。新理事長は茂呂塾保育園長大沼昭彦。
- 7月1日 オルガニストのR・ベラッティ氏演奏によるパイプオルガンCD制作始まる。
- 21日 DMさんとOMさん、市内のNPO夕なぎの手芸サークルに月1回の参加。
- 23日 安房反核フェスティバルに参加。今年から始まった『すいとん食堂』で昼食。
- 8月13日 夏の恒例、野田昌敏さんのコンサート。野田さんが運営するケアホームに移ったSさんも同行して里帰り3泊。
- 17日 召天者の日のつどい。法人新理事長大沼明彦、深津文雄の思い出を語る。
- 9月13日 SFさん、近くに開設された老健施設『みやぎの郷』に希望して移る。
- 10月20日 婦人保護事業55周年記念厚生労働大臣表彰式と全婦連指導員研修会1泊2日。かにたからも表彰5名、感謝状2名。
- 24日 日比谷アメニス、公園緑地協会より松の苗140本寄贈、南側坂道に植樹。
- 11日 **運営委員会5名千葉県庁訪問。**高齢者問題やDV被害者の受け入れなどについて協議。
- 12月12日 降誕祭のフルーツケーキ60個余を焼く

新しい医務棟

高齢化に伴い、ユッカ寮に移りたい人が増え、南側にある医務室を個室2部屋に改修しなければならなくなる。

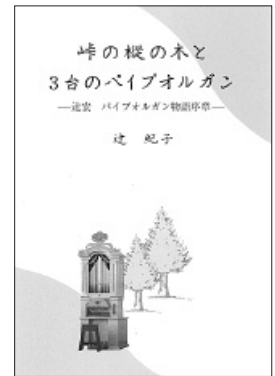
医務棟はユッカ寮の庭に、キウイ棚を取り払って新築。新しい医務棟は待合室も作り、整形外科・内科や精神科、歯科の施設内診療にも使いやすくなった。



ユッカ寮に隣接して
新設された医務棟

パイプオルガンの響き

オルガン建造家の故辻宏氏の妻・辻紀子氏による『峠の樅の木と3台のパイプオルガン』というかわいらしい本が2010年早春に完成。この本は、かにたのオルガンが峠の樅の木から作られたという童話。



その出版記念コンサートに招いた辻宏氏の秘蔵っ子、イタリアのオルガニスト、ロドルフォ・ベラッティ氏が、かにたのオルガンの音色に感激し、CD制作が実現した。

おしゃべりくらぶ

月1回のグループワークで、歌や手遊び、読み聞かせ、おしゃべりなどを気軽に楽しむ自由参加の集まり。2008年7月から活動している。“けんかではなく、自由に自分の考えを言ったり、他の人の考えを聞いたりする”“同じ体験を通して、達成感や仲間意識を共有する”というねらいがある。

個性豊かな村人たち……認知症の症状が出始めた人、村でいちばん重い知的障害の人、難聴で意思の疎通が難しい人、精神疾患で長時間いられない人……どんな人にも、その人なりの考えや意志、思いがあり、その人なりの楽しみを求めて参加していることがよくわかる。

メンバーから声上がり、2012年4月には近くの老健施設みやぎの郷を“音楽の贈り物”を携えて訪問。前年にユッカ寮から入所したSFさんも車椅子で出てきて、懐かしい顔との再会。その歌声に涙する場面も見られた。



老健施設へ“音楽の贈り物”

ため、元職員小林いささん製菓班に来援3日。翌年以降も毎年来てくださる。

29日 かにたを巣立ったSさん、里帰り6日。

2012年

1月20日 五十嵐逸美職員、社会福祉士として岩手県山田町に震災支援のボランティア。

24日 耐震化促進事業アドバイザー4名来訪。築47年の建物や崖を調査。後日届いた報告書は厳しい内容。

29日 館山若潮マラソン10kmコースにSNさん、DMさん、里帰りのSさん出場。職員も伴走者として参加。

2月4日 NHK歳末たすけあいの助成により、インフルエンザ対策として新衛生超音波式噴霧器購入。

3月1日 五十嵐逸美、副施設長に就任。

5日 いずみ寮とかにた婦人の村の職員交換研修5日間。

22日 地域包括支援センター職員とケアマネージャー来訪。ユッカ寮利用者のケアプラン立案と利用が本格的に始まる。

25日 『夢と希望を奏でる絆コンサート』29名参加。福島と南房総市白浜の中学生の吹奏楽と民謡の交流。

4月27日 おしゃべりくらぶの15名、老健施設みやぎの郷を訪問し“音楽の贈り物”。

5月3日 日本郵便年賀寄附金の助成により、調理場に念願の食器洗浄機が設置される。

16日 夜、たんぼぼホールを会場にして『安房精神保健福祉を考える会』。

30日 いちじく農園の斉藤陽子さんからいちじく9本寄贈。

6月12日 男子職員6名で建物地下の洞窟を探索。デイジー寮や食堂の地盤沈下の原因か否かを探る。

22日 東京都女性相談センターより出身者の面接に来訪。地域移行を希望する2名の面接は具体的に。

- 7月11日 地域の介護関係者グループ『安房介護一揆』の勉強会に職員1名参加。
- 9月10日 神奈川1名入所。**2003年以來9年ぶりの新規入所再開。**
- 13日 天羽施設長、横浜婦人相談員研修に講師として招かれ、かにた婦人の村について講演。
- 10月4日 ボランティア愛沢香苗さんの支援により、MMさん週1回の学習開始。
- 10日 故YTさんの娘さん、救護施設職員同行で、かにた納骨室に眠る母の墓参り。
- 26日 『安房平和のための美術展』の収益より、寄附金をいただく。
- 11月23日 『安房介護一揆』研修会にユッカ寮職員4名参加。
かにたを巣立ったSさん連休に里帰り。
- 28日 エイブルアートジャパンの太田好泰氏と世田谷美術館学芸員来訪。かにたの生活の中から生まれた作品を見て称賛。
- 12月2日 R・ベラッティ氏によるアドベント・オルガンコンサート開催。地元の方53名来訪。
- 5日 TTさん、地域移行に向けて盛岡市民福祉バンクで実習6日。
- 14日 **館山市高齢福祉課4名来訪。**今年度から始まった**介護保険利用の実情を視察。**

2013年

- 1月10日 矯正施設の職員来訪。行き所のない累犯障害者問題について話を聞き、受け入れの可能性を探る。
- 2月6日 職員研修会。社会福祉士山口康二氏による『障がいのある利用者の自己決定を促す支援』。
- 14日 東社協婦人保護部会主催の『東日本大震災現地視察研修』に職員2名参加。
- 4月1日 **五十嵐逸美、施設長就任。**天羽道子は名誉村長へ。
- 24日 神奈川1名入所。

運営要領の改正

かにた婦人の村は、売春防止法に基づき国が定める『婦人保護長期収容施設運営要領（旧）』により、入所対象、入所定員、職員定数等が定められていたが、2002年から止められていた新規入所の受け入れを再開するにあたり、2010年度末に、国はこれを改正し、『婦人保護長期入所施設運営要領』とした。最大の改正点は「収容」が「入所」に改められたことであるが、より人権に配慮した、利用者の意向に沿ったソーシャルワークの展開が求められているものと私たちは理解している。

また要領中には、「婦人保護長期入所施設は終生利用を目的とする施設ではない」と明記され、2年に一度は措置元と協議し、本人の意向も踏まえた自立支援計画を策定することが義務付けられた。創始者深津文雄の理念であった“終生コロニー”としてのかにた婦人の村は、ここで一つの役割を終えたのかもしれないが、障がいのある方も健常者と同じように権利を行使しながら地域で生活することが当たり前とされる現代の福祉サービスの考え方からすれば、当然のこととして受け止めるべきである。しかし、地域における障がい差別は依然としてあり、かにたのように、お互いに助け合い、どんな弱者にも健常者と同等の存在価値を認めるような社会が実現しているとは言い難い。

私たちは、再び地域で生活することを希望する入所者の地域生活移行支援を通じて、豊かなコミュニケーションのある

地域づくりや、弱者に優しい社会資源の開発などに積極的に関わりつつ、“終の棲家”として、村での生活の継続を希望されている開設初期からの入所者の健康管理と、村の中での豊かな生活づくりを、最後まで支援していかなければならない。

地域生活移行支援

運営要領が改正される前年の2010年4月に、20歳で入所して9年間をかいたで過ごした女性が、知的障害者ケアホームに移られた。地域生活移行を希望される方を、ゴールまで支援できた第1号である。この方の退所をきっかけに、高齢者棟で元気に生活しておられた方が、ある日車の中から見える建築中の老健施設を見て「あそこは何かね、私もああいうところで生活したいんだがね」と話されたので、さっそく数か所の施設見学を実施し、建築中の施設への入所を希望されたので、成年後見人を付けて契約を結び、翌年2011年に退所となった。

退所者支援

2014年春に、50代の女性が12年のかいたでの生活を経て、障害者サービスを幅広く提供する、東京のNPO法人の施設で地域生活を送ることとなった。私たちはこれらの退所者とは継続的に関わり続け、里帰りの受け入れ（彼女たちには故郷がない）、退所先施設の行事への参加、電話やメールでの連絡等で、絆を保つよう努めている。高齢者施設に移られた方については、家族として面会やケアプランのチェックに参画している。

- 5月1日 かいたを巣立ったSさん、連休中はデイズ寮に帰省。
- 6月28日 フィリピンから出稼ぎのMさん、体調を崩して入院したが退院後の静養場所がなく、かいたで2か月静養する。言葉は通じなくても心は通じ、フィリピン料理を作ったりして和気あいあいと過ごす。
- 7月24日 TTさん盛岡のグループホーム体験入居と市民福祉バンクでの実習1週間。
- 28日 茨城1名入所。
- 8月15日 上尾合同教会WC来援3日間。
- 9月18日 福島1名入所。
- 23日 『ベテスダの日』に31名来訪。
- 10月11日 お茶の水女子大名誉教授戒能民江氏来訪。19日のシンポジウムに向けてかいたを見学。
- 16日 台風26号直撃。早朝、入院者の衣料を保管していたプレハブが全壊。管理棟屋上の避雷針も倒壊。
- 19日 東京都社会福祉協議会児童・女性連絡会『共に語る会「婦人保護事業の歴史を振り返って」～未来への道を開くために～』のシンポジストとして天羽名誉村長参加。
- 12月12日 陶芸班担当の太田悟職員逝去。
- 15日 川崎の『生活工房』で、かいたを巣立ったSさんの緊急ケースカンファレンス。翌日Sさん、かいたに一時帰省。地域移行後も継続的な支援が必要。
- 25日 降誕祭礼拝にお茶の水大名誉教授戒能民江氏も参加、昼食を共にする。

2014年

- 1月19日 千葉マリンマラソン10kmコースにTTさん、NSさん出場。職員2名の伴走つきで無事完走。
- 29日 映画『ガイサンシーとその姉妹たち』の監督班忠義氏と高橋敬子氏来訪。
- 2月6日 DMさん、東京のNPOゆきわりそう・

- ピア館で地域移行を目指して実習 8 日。
- 23日 ミュージカル『この森で天使はバスをおりた』を鑑賞17名。
- 25日 東京都婦人相談員の事例発表会で、地域移行したSさんのケースを発表。
- 3月5日 日本財団の助成を受け、車椅子対応の軽自動車ハイゼット納車される。
- 22日 佐藤千郎牧師の司式により『太田悟さんを偲ぶ会』を行う。
- 24日 福島 1 名入所。
- 4月1日 **DMさん、東京のNPOゆきわりそう・ピア館へ移る。**
佐々木清、茂木美昭、開設準備中の『かいた作業所エマオ』（就労継続支援 b 型）に異動。佐々木清が施設長就任。
- 20日 かいた教会に協力牧師として勝亦一江就任。
- 19日 福祉大相撲に招待され館山運動公園体育館で12名観戦。
- 23日 ボランティア勝原佳さんの支援により、TTさん週 1 回の学習開始。
- 24日 アネモネ寮で静養中のAKさん、ターミナルケアが必要となり、グループホーム相浜ガーデンに移る。
- 5月29日 五十嵐施設長、入所希望者面接のため神戸へ出張。
- 6月4日 草刈り共同作業。昭和女子大30名とNPO安房文化遺産フォーラム来援。
- 13日 兵庫 1 名入所。
- 21日 『かいた作業所エマオ』（就労継続支援 b 型）**開所式。**
- 23日 東京 1 名入所。
- 31日 故SKさんの姉森公子さんの厚意により、会堂屋根と外壁の修復工事を実施。
- 8月12日 夏祭り第 3 日、たんぼぼホールで網代芳明さんコンサート。
- 14日 上尾合同教会WC 3 名来援 3 日。
- 15日 鎮魂祭にてTBS『石の叫び』から城田

エマオ開設

2010年度の厚生労働省との話し合いの中で、地域貢献事業にも少し力を入れてはどうか、という助言があり、今後婦人の村が地域生活移行支援を展開して行く中で、地元を受け皿を作ることは、地域の障がい者向けに社会資源を開発することに繋がるという認識のもと、障害者サービスの提供について法人内の『かいた問題検討委員会』で検討と準備を重ね、2014年の6月に『就労継続支援 b 型施設かいた作業所エマオ』を、かいた婦人の村に隣接して開設した。

かいた婦人の村に送られてくる寄付物品の仕分けやバザー準備、裂織などをする「作業Ⅱ班」の指導を長年担当していた佐々木清が施設長に就任し、同作業をエマオに移管した。

2015年10月1日現在10名の障がい者が通所利用されている。3名の卒業生を送ってくださった特別支援学校高等部進路担当教員からは「とても大事にしてもらっており大変感謝している」との感想をいただいている。毎月行われる誕生会や、夏の夜店、共同草刈など、かいた婦人の村の入所者と共に楽しむ機会もあり、毎回楽しい交流の時間が過ごされている。『エマオ』の名は聖書から出典されており、イエスが復活後、弟子たちと会われた地の名前であるが、語源に「温かい泉が湧く場所」という意味があり、佐々木施設長は「エマオを地域の温かい場所にした」と話している。

かにたの建て替え

かにた婦人の村の主な施設である、居住棟、食堂棟、浴場棟、管理棟は建築後50年を経過しており、1997年に大規模修繕をしてはいるものの、経年変化による老朽化で、使用の限界である。また2014年8月に広島市安佐南区で起こった土砂災害をきっかけに、国土交通省による、全国の崖地や山裾にある施設や住居の調査が実施され、かにた婦人の村の居住棟全体が大雨時の危険地域に指定され、避難情報や勧告、警報等の発令等への迅速な対応が求められている。

入所者の安心・安全な生活を担保するためにも、建て替えは急務となっており、厚生労働省担当者への相談、現状視察を経て、建て替え計画を策定しているところである。

建て替えにあたっては、今まで住んでいた準小舎のよい点（顔が見える暮らし、共に助け合う暮らし）を残しつつ、プライベートスペースの拡充、地域の方にも社会資源として使っていただけるスペースの確保、心に傷を負って休息を必要としている女性が豊かな自然環境と弱者に優しい価値観と雰囲気の中で休めるスペースの提供、の3つをテーマとして計画を進めたい。

何よりも、現在住んでいる女性たちの希望を聴き、より豊かな生活環境を提供できるよう、利用者主体の支援が展開される場所になるよう、多くの方々のご意見や助言を頂きたいと願っている。

すず子さんの肉声を聞く。映画監督班忠義氏来訪取材。

- 16日 『召天者の日』のつどいにて、故SKさんの姉森公子さんに感謝状贈呈。嶺尚牧師と『光の子どもの家』の菅原哲男氏、創設者深津文雄の思い出を語る。
- 9月8日 安房西高『ウガンダ支援・交流20年の歩み』の集いに五十嵐施設長出席。
- 18日 福島1名入所。
- 24日 コープみらいの会で天羽村長講演後、100名が山頂の碑を見学。
- 10月13日 体育の日に野田昌敏さんコンサート。
- 15日 『安房精神保健福祉を考える会』例会で、いずみ寮寮長横田千代子氏より婦人保護の現状と課題についての話を聞く。
- 24日 五十嵐施設長、大沼理事長とドイツ訪問1週間。ベテスタ訪問も。
- 12月18日 館山市の土砂災害防止法区域指定説明会に職員出席。

2015年

- 1月13日 五十嵐施設長、大沼理事長と厚生労働省訪問。居住施設の建て替えの相談。
- 22日 杉原建築士と大沼理事長来訪。土砂災害危険区域指定を受けて村内の調査。
- 25日 館山若潮マラソン10kmコース、TTさんとNSさん出場、完走。
- 2月4日 中央競馬馬主会の助成により、調理の省力化にスチームコンベクション設置。
- 9日 KTさん体力減退のため相浜ガーデンに移る。
- 3月10日 東京都保健局、建て替え調査のため来訪。陶芸班に、千葉県生涯大学南房学園陶芸科准教授湯野川恵氏、佐藤昭子さん他1名来訪。新年度の陶芸班再開のために助言と助力をいただく。
- 26日 福島1名入所。

かにたで生まれた歌

かにた婦人の村では、毎朝の讚美歌、童謡唱歌から、フォークソングや歌謡曲まで、日常生活のいろいろな場面で、たくさん曲が歌われている。

かにたで生まれた歌もいくつかあるが、その中でも『やすらぎのいえ』は、“かにたのうた”として、村人から愛されている。

やすらぎのいえ

作詞・作曲
五十嵐 遼美
1990.11.22

みどりのもえる さかみちを、いきき ぎらして のぼれば

なないろにさく はなのよう、ここが わたしたちのいえ Fine

きれいなものがこわされてく、よわいものだけが すてられる

けれどかみさまがおぼえてた、ここにわたしをみちびいたかぜ

のおとつちのにおい、よるのほしのあかり みえ

るものきこえるもの、みんなわたしのやすらぎ

だれもが みんな、しあわせていてほしいのです

かなしみもくるしきも、わかちあえるひとになりたい

なにかができる だれにでもできる

あいされあいするならば、なにかができる D.S.

1994.8.15 F

きよらのおとめつ 此さら ぬ

ながぎの なみち"おともな く

『きよらのおとめ』 作詞・作曲 深津文雄
毎年8月15日の鎮魂祭で繰り返し歌われる。

村人たちの座談会

(2015年7月22日実施)

かにた婦人の村ができて50年。昔のことを覚えている人が、だんだんと少なくなってきました。かにたはこうやってできてきたんだよ、ということを残しておくために、最初の開拓期のころからいらっしゃる村人のみなさんに集まっていただいて、お話をうかがいました。実際にかにた婦人の村をつくり上げてきた方々の生の言葉を、これから新しく仲間になる利用者、職員のみなさんにも伝えていきたいと思います。



座談会 その1

参加者：Mさん(75)、Iさん(72)、Oさん(74)、Kさん(72)

※年齢は座談会当時

進行：五十嵐逸美

同席者：天羽道子、中村健二郎

かにたに来たころ

五：自分がかにたに来たとき、何か印象に残っていることはありますか。

M：私はいずみ寮からかにたに来たの。大きな車、ベツトさんの車があって、それで山川先生が館山駅に迎えに来てくれた。かにたは本当に貧しいと思ったよ。最初はテーブルもなかったの。段ボール敷いて、その上にベニヤ板を敷いて、その上で包丁も調理から借りて切って食べた。土曜日になると薪を拾いに行ったり、石炭のストーブを焚いたり、川に洗濯に行ったり。川に洗いに行くと田んぼに石けんの水が入ると「石けんの水を入れたらだめじゃないか」って近所から苦情が来たり、お風呂屋さんに行くと馬鹿にされるし、買い物に行くと「かにたの変な人が来た、頭の狂った人が来た」そう言う人もいたし。

五：寮に入ったときにはテーブルとかなかったの？

M：ないないない、そういうのはない。

K：何にもないよな。

M：今はみんな労賃もらうでしょ？昔は出勤簿つけてたの。それで病院に行ったりすると何日は何時に（作業に）出たって出勤簿につけられるの。

五：作業に出た分だけもらえた？

I：そう、休まず出ると3千円。ちょっ

と具合が悪いって休むと引かれて2千円とか。

五：今とだいぶやり方が違ったんだね。

I：それで私が入院から帰ってきたら、いつのまにか4千円になってた。

五：Oさん、何か覚えてることは？

O：今の農園、昔のⅢ班によく働きに行ってたの、臨時でね。あとは子どものおむつを洗いに行ったり。

五：子どもがいたの？

O：うん、フリージアに…

M：吉川先生だよ。

五：あー、職員のお子さんね。

O：そう、吉川先生の女の子がいて、その子のおむつを洗いに行ったり。雨の日でもよく行った、おむつ洗いに。あとは自主献立の買い物に行ったり。自分たちで好きな献立を立てて、よく〇〇屋に買い物行った。

五：〇〇屋さんってけっこう遠いよね。

みんな：そうそう。

O：日曜日になるとみんなで買い物に行くと、それで自分たちで作って食べてた。

五：Oさんは北海道から来たでしょ？当時はフェリーに乗ってきた？

O：連絡船の大きな船で来たよ。それで青森の駅に着いて、今度は汽車に乗って。

五：初めて来たときはどうでした？

O：みんなと同じだけどね。川に洗濯し

に行ったり、石炭焚いたり…たいへんだなあと思った。

K：初めはそう思ったなあ…

だまされて来た…

I：最初な、だまされたんや。

五：だまされて来たってこと？

I：そう。だまさなくたってわかるのにだましてな、かにたっていい所だから、そこへ行ってみんなで仲よく生活すればいいって。それはわかるけどな、来たっていいところじゃないわ(みんな笑)。お小遣い3千円でな、貯金千円すれば2千円、おやつ買ったら千円。それでやりくりさせられたんや。

五：不満だったんだ？

I：そりゃ不満や。最初から普通に、かにたっていう所へ行って生活するのがいいよって言うなら話はわかるよ。それをだまして乗せてきて、自分らは帰っていくけど、うちらは帰れないんや。

五：今の人たちはみんな見学して、どういう所か見てから決めるんだけどね。

I：そうやろ。昔はそうじゃないんや。

だましたまんま乗っけてこられたんや。

中：いい所としか言われなかった？

I：景色はいい所だと思ったけど…来たはいいけど、人間はあんまり慣れないな。職員とも慣れない…

五：それで入院したんだね。たいへんになっちゃって…

I：そりゃそうなるわな。それで強い人にガーッと言われると言い返せないから、こうなってこうなって…(小さくなる)。

五：それから退院して生活できるようになったのはどうしてだろうね？

I：そりゃ薬飲んで合わせて慣れたからでしょ。それで落ち着けるようになったから。それでいろいろな作業、洗濯や調理、農園に行ったり…

五：自分のやることができ、少し自分がみんなの役に立ってるかなとか、やりがいがあるかなとか…

I：そう、みんなの手伝いもやるようになったのはデイジーに来てからや。それでようやく慣れるようになって、何年か経つやろ？

五：安心して生活できるようになるまでずいぶん時間がかかったんだね。

I：かかり過ぎたんや。若いときは慣れるどころか、飛び出してな。そんな遠くまでは行かずにこの辺をぐるっと回るぐらいだけど…、あれ必ず迎えに来るな。最初Oさんがバイクで来て、次にIさんが車で…、時間になれば帰る、歩くからいいって言うんだけど…。そしたら次にミチ先生が来たやろ(みんな笑)。次に小林先生が来て…

五：それはだいぶ後の話でしょ？

I：後だけど最初もあったよ。誰だっけ…〇〇さんの寮にいたとき、1人と2人がけんかして2人の方を注意すればいいのに、全員寝てるのたたき起こして、みんな並べて叱られたんやで。それで嫌になって寮を替えてって言ったんや。アネモネからベゴニア、あとエリカに行ったりして…それで入院したんや。最初は長くて、それからだんだん短かったり長かったり…、今デイジーで長く続いているけど。でもたまにな…(笑)、たまに頭がぼーっとなって飛び出したいときもある…。

M：私も Iさんと悪いこといろいろやったよ、なあ。

五：何したの？

M：歌子先生に見つかって、「あなた方！こんな所で何やってるんですか！」って言われて。

I：ああ、あれか。

五：何？

M：ここでは言えないよ…（みんな笑）。

中：今さら隠さなくてもいいよ（笑）。

I：あのな、寮から頭冷やすって言って△△屋に行つてな、私ジュースとまちがってビールの缶買っちゃった（みんな笑）。

五：え？ ビールの缶？

I：それで隠れて飲んでたら、歌子先生に見つかった。「何飲んでるの！」って。

M：2人で飲んだの。

I：（歌子先生が）缶を「私が内緒で捨てるから」って…、今はせえへんで（笑）。

深津先生のこと

五：深津先生のこと何か思い出は？

M：おじいさんが具合悪くなってね、よく「ちょっと肩貸してくれないか」って言ったの。私がこっちの肩貸して、Mちゃんがこっちの肩、一緒に連れてった。おじいさんはもう年取ってるからくたびれるんだよ。本がたくさんあって、それも「持ってくれないか」って言うから持ってあげた。名前が深津文雄でしょ。私は「フミちゃん名前が同じだから一緒に長生きしようや」って言われて、「深津先生長生きしてよ、私も長生きするから」って言ったの。「長生きしよう、しよう」って一生懸命言ったの。そしたら病気しちゃって、私を置いて行っちゃったんだ

なと思って、私はそれを思い出すよ。

たいへんだった作業

天：会堂を建てたときはどんなだった？

M：たいへんだった。ブロック積んでいくときに、コンクリート入れて突っついて、また積んで、また突っついてってやってな…。みんなの力で会堂ができて助かったなあと思うよ。

I：ここの坂道をやったときにさ、雨が降っててカッパ着て、道造ってコンクリやったのはいいんだけど流れるんや。そしたら大ちゃんが怒ってるんや。さっさとしないと流れる！って。雨降ってるからでけへんやんか。

五：大慈さん厳しかったんだね。せっかちだったのかな？

みんな：（いっせいにうなずいて笑う）

天：ミキサー車が置いていくのよね。コンクリートを。

I：置いてったのを平らに均すんだけどさ、そのたんびに大ちゃんがカッカカッカ怒るもんやから、うちらさっぱり進まへんのや。

五：早くしないと固まっちゃうからね。

I：そんなこと言うたってできへんわな。難しいもん。

M：エリカのところのポンプ小屋があるでしょ？ あそこに石炭が積んであって、それを担いで食堂の前に並べて、各寮に背負ってくの。それがまた重たいんだよ。お米の袋ぐらいのやつ。それと土曜日になると薪拾いに行くの。嫌がって行かない人も中にはいて、「薪拾いに行かない人はストーブにあたらなくてください」って言われるのよ。しかたないから

みんな拾いに行ったよ。

五：火を焚くのもたいへんだったでしょ？
石炭はなかなか火がつかないから。

M：ストーブから火がついてさ、フリー
ジアの崖の方で…

O：そう、山火事になったな。

I：それから石炭やめてガスのになった
んだよ。

M：そのときおじいさんが消しに来た。

I：行ったら深津先生がな、フリージア
で火を消してたんだよ。毛布みたいので。
最初Nちゃんがやってて、その後深津先
生が来てやったんだよ。そこで止めよう
としたけど止まらなくて広がっちゃった。

五：で、消防車が来たんだ？

I：消防車が来るのが遅いんや。うちら
が消した後に消防車が来た。狭いから大
きい車入れなくて。それでえらいさまが
見に来て深津先生と話をしてたんや。

五：きっと深津先生が謝ったんだね。けっ
こう出てくる話は苦労した話が多いね。

I：そりゃそうや。楽しい話ちゅうのは
今年になってからだよ。

M：そう、今年になってからだよ。

五：今年になってから？

I：今年の…、最近になってから。

五：今は楽しいけど、昔のことはみんな
苦労ってことね。

M：そう、苦労なの。

牛や豚の思い出

M：私、牛小屋が印象に残ってる。

O：牛とか豚がいたね。

五：最初に牛が来たときはどうだったの？

M：Mちゃんが、(牛が) 小ちゃいとき
に上まで引っ張って連れてった。

五：仔牛で来たんだよね。

みんな：そうそう

M：だんだん親になってきて…、今考え
ればな、前より寂しいとは思うな。もう
1回牛をやりたいと思うよ。仔牛が生ま
れればさ、乳飲ませるのも楽しいし。

五：クリスマスのビーフシチューは食べ
られない人もいたもんね。

M：私いっぺん(屠場に) 行ったよ。か
わいそうだった。

I：あれ見たら食べられないわ。

M：(トラックに乗せるとき) 後ろに戻っ
ちゃうんだよ。

I：牛は売られていくのわかるんやな。
お尻押しても全然乗らへん。

M：トラックに乗せて屠場に行くでしょ。
それで殺す人が連れてくでしょ。そうす
ると殺されると思って戻ってきちゃうよ、
バックして。かわいそうだと思った。

五：豚だってそうだもんね。

今の暮らしとかにたのこれから

天：みなさんがよく50年ね、たいへんな
所に来たなって思うのはよくわかるわ。
今は道も舗装されて、崖もちゃんとなっ
て、お家もたくさん建って。いちばん最
初は十しかなかったの、家が。今見るか
にたとあなたがたが来たときのかにたは
まったく違ってね、寂しい所だったし、
周りも田んぼでね。今は周りにお家が
建ったでしょ。寂しい所じゃなくなった
し、かにたの中にもいろいろ作業場が
建って。ワークキャンプの方たちも大勢
手伝いにいらしたでしょ、若い人たち
が。それからあなた方の手で道が舗装さ
れたし、作業場が建つときにも、会堂が

建つときも、みんなで力を合わせてね、今は見違えるようになったでしょ。それはみんなあなた方の汗が流されているからと思って、いつも感心してね、とても大切な一人ひとりだなあとと思っています。

K：みんな若かったからね。

天：若かったからできたのよね。来たときは、何て所に来たんでしょうって思って、それからつらいこともあったでしょうけど、きっと楽しいこともたくさんあっただろうし。それに1つの寮に家族みたいに生活してきたでしょう？ よく生活してきたなあと感心しています。

M：最近テレビが入ったんだもんな。うちに来たときテレビも何もなかった。

天：ここ（会議室）でおじいさんがビデオ教室してくださってね。

I：北海道から来るときな、テレビもあるし毎日見れるって言われて来たのにテレビあらへんし…

五：（笑）本当にだまされて来たんだね。

I：だまさんくたって…

天：Iさんはだまされて来て、50年経って今はどんな気持ちですか？

I：今はましな方やな…

M：今の方が楽しいと思うよ。

O：今の方が楽しい。昔は嫌なこともいっぱいあったけど。

中：50年は長かった？

みんな：長いな。

I：人間関係や職員との付き合いが難しかったけど、だんだんと今は慣れてきたけど、それがまた変わったらちょっと難しいな。生活でけへん。だってあれつくるんやろ？

五：新しいのね。

I：新しいのつくったら、また人間（関係）が合わなくなるわ。付き合いがでけへん、難しくて。今の寮で暮らして慣れてるのに、またガチャガチャやられたらおかしくなるわ。

五：今の寮のスタイルはできるだけ崩さないようにしようと思ってるの。建物が1つになっても中で寮は別々。寮と寮が廊下でつながってる感じかなあ。

K：おトイレついてるよな？

I：便所つかんかったら建ってもしょうがないじゃん（みんな笑）。

M：だけどお金がかかるでしょ？ お金がどこから出るかっていうのが心配なの。

I：集めるのにたいへんやぞ。

M：かにたのお金じゃ足りないでしょ？ だからバザーのときとかに募金をしてもらったらいんじゃないかっていうのが私の考えです。

I：うちらがいつまで生きてるかわからへんやろ？ 生きてる間に建たなかったらしょうがないやろ？ それにはこれ（お金）がいるぞ。

M：ミチ先生も年寄りでしょ？ 施設長はまだ若いけど、成子さんも年とっていくし、みんなも年とるでしょ？ その前に建てないと困るし、みんなでかにたの建物建てるときにどうやって建てるか、お金がどこから出るか、あちこちから寄付してもらうのもたいへんでしょ？ それが心配。

I：だから私は言ったんや。生きてる間にお金向こうにやらんで、こっちで使うようになって。言ったんやけど返事が来ないでそのままや。

五：自分のお金のことね。でもそれは自分が亡くなったらの話でしょ？

I：亡くなる前に相談しなかったら死んじゃったら困る。

K：それで終わりだもん、そうだよ。

I：生きてる間に少しずつ出すから、死んだら向こうへやらないで、かにたで全部使ってもらいたってことや。それを弁護士かなんかに話すって言ってたやん。その話それっきりになってる。

五：いや、探してるけど館山ではなかなか弁護士さんって少ないんだよ。

M：土曜日に反核フェスティバルに行ったときに年金の話をしたの。年金が少なくなるんだって。

五：少なくなるし、介護保険で取られるし。

I：そしたら建てられへんやん。

五：いや、みなさんのお金を当てにしてるわけじゃないから心配しなくていいよ。

I：当てにしないって言ったって、うちらがいつまで生きてるかわからへん。その前にお金の相談しとかんと…だから言ってるのに、その返事が来やへんのや。

五：もう遺言を書きたいと…。

I：そうしないと向こうにやることになるで。一銭もやることない。だって（身内が）死んだときだって呼びに来ないし。それに私死んだら新しい家に住めないやん。

五：長生きしてください。

K：いつ死ぬかわかんないからな。

天：それはもう、だれでもわからないからね。



座談会 その2

参加者：Nさん(82)、Tさん(73)、Oさん(67)、SMさん(65)、Cさん(62)、SNさん(68)

進行：五十嵐逸美

※年齢は座談会当時

同席者：天羽道子、中村健二郎

最初のころの思い出

五：最初は、自分が来たころの思い出を教えてください。

N：初めて来たときは、フリージアに入って吉川先生と幸子さんが寮の担任で、吉川さんが部屋に案内してくれて、2人で日曜ごとに礼拝のお説教してました。

五：当時はパン屋さんはまだなかったんですよね？

N：はい、まだそのときはなくて、寮の周りの草取りとか…、フリージアの手前の作業場で籠を編んだりしていました。

五：いろんなところから最初はいっぺんに人が集まってきたんですよね。

N：はい、次から次に。

五：知らない人同士が入ってきて一緒に生活を始めて、どういうふうになくなっていったんですか？

N：みんなやっぱりいい人だから、そんなにたいへんじゃなかったです。

天：東京から17人も一緒に入ったんですものね。その前に兵庫県から5名入っています。

N：Mさんが先に来て…。

天：そう、Mさんは初めにここにもういてね…、入ってきたときは朝昼晩の食事はどこでした？ 食堂に出ました？

N：食堂のような気がした…日曜日だけが各寮で。お盆持って並んで自分でハッ

チからもらってきて。

五：日曜日は献立も買い物も自分たちでしたそうですけど。

N：〇〇屋に行きましたね。△△屋にも。

天：〇〇屋さんとも50年のお付き合いですね。

O：すごいねえ。

五：その次に古い人はだれかな？

T：かにたに入寮したときはね、何にもなかったです、テーブルも。あと薪拾いにも行きました。銭湯にも行きました。

天：銭湯に行ってどうでしたか？

T：何か言われました。馬鹿にされて、熱いお湯をかけられました。

天：悲しい思いをしたのね。

T：はい。作業はいろいろ経験しました。最初は皿班（農耕）に入りました。草取りや…キャベツの移植をやりました。コンクリもしました。バケツリレーで。アネモネとかデイジーのところの壁の。

五：ああ擁壁ね。コンクリを運ぶのは重かったでしょう？

T：はい、重かったです。固まっちゃうからね、手早くやらないと。

天：みんな並んでバケツリレーね、上手だったね。

C：私はね、初め岩手から来たときは、下の方は家が全然ありませんでした。フリージアに入って、何か月か休んで農園

に入って、小川辰蔵さんが先頭に立ってみんなに教えてくれました。「畑を作るから手伝ってください」って。開墾したり、ミカンの苗植えたり、いろんな野菜の苗を植えたり。初めてではなかったと思いますが、やっぱりたいへんでした。あとは毎日薪拾いしてね、冬寒いからね。

五：昔の冬って今より寒かった？

O：寒いね、だって石炭まで背負って運んだよ。

N：洗濯物が凍ってたりね。脱水機もなかったから。

SM：昔はさ、雪が積もったよ。今はあんまり降らないからいいけど。

C：管理棟の坂も車通れないくらいだったもんね、滑って。

O：今より冷たかったよ。すごく厚着しなきゃいられなかったんだよ。上から下までセーターやら上着やらいっぱい着て。

五：SNさんはどうですか？来たころの印象は。

SN：この辺は来たときは畑ばかりで家が全然なくて、私は心細かった。

五：寂しい所に来ちゃったなど。

SN：そうそう。(かにたへ行きたいと)頼まなければよかったと思っちゃった。本当は私は行く人じゃなかったの。でも行かなくなった人がいたから入れたの。ここに7人で来て、深津先生と話して、それから寮に分かれた。私はフリージアでしのぶ先生のところに行って。そのときNちゃんがリーダーだったから「Nちゃんに聞いてください」って言われて、いろんなことを聞いた。私不安になっちゃって、足に来るんだよ。心の病気って言

われて、もう歩けなくなって、寝たきりになって。それで田村病院に入院を繰り返してたの。だから寮はいろんな所行ってるけどね。作業もいろいろ行ってるの。初めは土方の仕事でね、吉川さんがやってた。それでコンクリートやって。早くしないと固まっちゃうから、怒られながら一生懸命やってさ、若いからバケツ2つ持ってやったよ。練ったりするのもやった。そこがもうきつくて、辰蔵さんから「畑は人が少ないから来ないか」って言われて畑に移ったの。私は東京の人だから何にもわかんなくて、初めからいろいろ教えてもらった。辰蔵さんはすごくいい人だった。それでIX班(木工)、そのときこれ(指)切っちゃったんだよね。これがいちばんショックだった。自分でやったから仕方ないんだけどね。で、入院しちゃったでしょ。今度は腰がヘルニアになって。それで退院してきたら、今度は春子先生が亡くなったって聞いて。春子先生にはお世話になったからね、でもお葬式には行かなかったの、退院してきたばかりだから。後は園芸も行ったしII班にも行ったし、清さんが若いときね。それからVIII班も行ったしI班(編物)も…。今は切手班だけど、いちばん落ち着いてやっています。今のところいいですね。

五：SMさんはどうですか？

SM：かにたに来るときにここの写真見せてもらったよ。行く前の日にね。

五：どんな写真だったの？

SM：アネモネが写ってた。農園のときにさ、管理棟の崖をコンクリートでやったの、バケツリレーで。それからアネモ

ネの階段、あそこも野田さんと松岡さんとコンクリートでやった、土の階段だったから。それから日曜日のたんびに〇〇屋や△△屋や□□商店まで買い物に行った。いちばん嫌な思い出はさ、あるところにもやしを買いに行ったら「ありません」って言われたの。しばらくしてよその人が来て「もやしください」って言ったら奥から引っ張り出してきたの。

五：意地悪されたこともあるんだね。

SM：「早く出てけ」って言われたこともあるよ。

天：そこは奥さんがね、かにたの人だからってことじゃなくて、人付き合いがちょっと難しい方だったのよね。

SM：その話を職員の〇〇さんにしたら親戚なんだって。

中：この辺りは親戚が多いからね。何かしらつながりがあるよね。

五：〇さんなんかは、かにたの生活ができあがりつつあるときに来たでしょ？

〇：私が来たときはね、ゼミアがまだ建たないからだめだって言われたのよ。もうちょっと待ってくださいって。それで来たはいいけどびっくりしちゃったよね、手でみんな開墾したり、スコップでこんなことしたり。リヤカーとか一輪車で野菜とか芋とか全部運んだの。そのときはね、辰蔵さんでしょ、佐々木さん、堂山さん…。畑はほら橋のところがあるでしょ。バケツにつるを付けて水を汲んで、かにたは水がなかったから、そうやってつるべで汲んでやったの。それと夏休みがあって、夕方になってから農園の仕事をやったのよ。昼間は暑くてでき

なかった。それから、薪を拾って石炭を運んで、それで火事になって…(笑) そんなこともあったよ。楽しいことって言ったらさ、日曜日ごとにおにぎりを作って、山登りとか、西岬とか砂山…いろんな所に遠足に行った。フリージアだけだよ。で、おじいちゃんはこちらに入れますからって言って、フリージアに来たの。とてもたいへんな思いしたよ。つらいよ、あんなの本当に。今は少し楽になったけど。草取りだけだから今は。昔は牛や豚の糞を運んだりあったんだけどさ、今の人は楽だと思う。仕事だって1か月してから仕事出なさいって言われて。今の若い人は2、3日見ただけで仕事出られるんだもん。うちのときは1か月だよ。

五：作業に出るまで1か月？

〇：そう、ようすを見なさいって。

五：その1か月は何してたの？

〇：寮の周りの草取りしたり、散歩したりしてたよ。

五：生活に慣れてから作業に出ましようってことね。

〇：そう。そして会堂造ったでしょう？牛小屋造ったりねえ。コンクリート練ったりやったよ。ブロック積んだり。鉄筋でこう並んで突っついて…にいちゃんもいたでしょ？

五：そのころはいないよ。牛乳処理室を建てたときは私が設計図書かされて、平原（鉄工所）さんがそのとおりに鉄骨建ててくれて、重田さんとかみんなでブロック積んだのは覚えてるな。その辺りがみんなで建物を建てた最後だったんじゃないかと思うよ。

おじいちゃんの思い出

五：おじいちゃんのことでは何か思い出はありますか？

C：おじいちゃんと相撲取ったよ、山の上で。畑になる前のね、あの大きい木があるでしょ？あそこで。

五：どっちが勝ったの？

C：そりゃおじいちゃんさあ（笑）。「お前たち、かかって来い」って言ったものでね（みんな笑）。

SM：海に行ったときに股くぐりやったよ。

C：股くぐりねえ、夏はもう毎日やらされてね。

SM：それからその後に、水の中で手で押さえて足だけバタバタやってるうちにさ、泳ぎ方覚えたよ。もう1つ思い出あるけど、夏まつりのときに「働かして」って言ったら「何したい？食べ物か陶器売る方かどっちがいい？」って言うからさ、陶器売る方って言ったの。そうしたら、おじいちゃんいろんな物集めてたね。骨董品をいっぱい持ってきて、鉛筆の削ったやつとか、インクの入ったやつとか、下駄とかさ…

五：下駄を集めてたの？

SM：うん、そういうのを私安くして売ったの。そしたら「あなたは商売上手だ」って言われた。全部売れたから。

O：おじいちゃんは有名な人だったでしょ？だからテレビの人が多過ぎてね、私たちまで映されたのよ。もう年中NHKだTBSだって来てね、たいへんだったよ。今は映さないからいいけどね（笑）。

中：そういうの嫌だったのね。

O：そう。それとさ、食堂で小さい黒板

があったのよね。それでいつも朝、お祈りが終わるとお勉強して。

C：お勉強してその後食事してね。ちゃんとお勉強するのね、みんなと一緒に。

N：聖書研究とかね。

水曜学校

五：昔は水曜学校でもいろいろやってたんだよね？

みんな：やった、やった！水曜学校あったね。

O：私、野田さんのあれだった、体育。

C：ワングルは片岡さんっていう人がいて、おばあちゃんね。

T：ワングルも行った！

C：あちこち歩いていくの。畑の中でも堂々と入っていくの（笑）。

O：野田さんの体育はね、車で行ったの。砂山とかそういう所に車で行くの。あとは音楽ね。

SM：野田さん自分であれ持ってるよ、バンジョー。バンジョー弾いたりギター弾いたりしてくれた。

C：私は佐々木さんのグループだった。みんなの前で漫才やったりしてね。覚えるのがなかなかうまくいかなかったけど。

生み出すよろこび

五：Nさんはパン屋さんに入ったのはだいたい後なんですか。

N：はい、だいたい後です。

五：最初のころからOさんとかいたの？

C：私がいたね。

N：ああCさんとやったことあるね。

C：私、足踏んであれしたとき、いたよ。

N：え？

C：足で踏んで、こねて…（笑）。

N：ああ機械が壊れたときか。ビニールで包んで。芯棒折れたりしてね。

C：農園で味噌を作ったときもね、みんな汚い足で踏んだんだよ（笑）。

みんな：汚いってそんな（大笑い）

C：みんな足きれいに洗えよって言われてね（笑）。

五：そうやって自分たちが作ったものが食卓に並ぶのってどうですか？そういう生活が長いから当たり前になってるかもしれないけど。かにたのいいところって自分たちの生活を自分たちで生み出してるっていうのかな？そこが他の施設ではやってないことだと思うんだけど、そういうことをやってきてよかった？それとももう少し何でもいろいろ揃っていた方がよかったと思う？

C：揃ってたらほけちゃうね、きっとね。

O：やっぱりね、楽しいよね。できたあ！っていう楽しみがある。

SM：そうだよな。

O：みんなに食べてもらえるなーって思っとうれしいんだよ。で、調理でこうやって作ってさ。

天：作り甲斐があるわよね。パン屋さんもそうでしたでしょ？「今朝のパンはNさんが焼いたパンです」って言うときもあったしね。

O：ほとんどNさんが責任もってね、計ってこねて。うちらNさんに習ってやったんだよ。

これからのかにたは？

五：これからのかにたはどういうふうが続いていってもらいたいですか？

SM：いつごろ新しい建物ができるの？

五：建物はね、やっぱりお金のこともあるから何年かはかかるだろうね。

O：私もやっぱり心配なの、新しい建物になるっていうと。今のが好きだから。

五：それはわかるんだけどね。50年経ってるから危険があるんだよ。地震が来たら倒れるかもしれないし、下は洞窟だからボコッと落ちるかもしれない。今新しくしないとあと50年かにかたがやっついていけないんだよ。

C：あと50年したら、私100歳だよ（みんな笑）。

中：Cさん100歳どころじゃないでしょ（笑）。

SM：じゃあ五十嵐さんあと50年経ったらいくつ？

五：いや、もういないでしょ。

中：今ここにいる私たちは50年後にはたぶんいないけど、かにたを必要としている人ってまだまだいるからね。ちゃんとしたものを残さないかね。

O：そうだねえ…名残惜しいけどね（笑）。

五：長年住み慣れた所が変わっちゃうのは寂しいよね。だからなるべく今の感じと似ているようにできればいいなと思ってます。

SM：それにはお金を集めなきゃなんないじゃない。

C：厳しいよお。お金のない人ばかりだから。

五：昔かにたをつくるためにいずみ寮でコロニー運動したときには、寮生さんも寄付のお願いとかしたって聞いたけど。

SM：かにたを建てる前に国会議事堂に行ってお願ひしたみたいよ。

天：Nさんも行ったんでしょ？

N：行きました。Kさんとか。

五：じゃあ今度、Nさん霞が関と一緒に
行きますか？お願いします。

C：見たいねえ！国会議事堂ねえ！

SM：だから今度も行ける人で行ったら
いいんじゃないの？

五：それもいいかもね。厚生労働省にお
願いに行くときに、施設長だけじゃなく
て寮生さんも一緒に「お願いします」っ
て行くのもいいかもしれないね。

N：深津先生の礼拝のお説教とか、シュ
ヴェスター・ミチの礼拝のお説教とか、
いいなあと思って…よかったです。

五：礼拝にはずっと行ってたんですもの
ね。今はどうですか？ユッカからだど。

N：もう体が弱くなったから…

五：ビデオでも撮ってユッカでも見られ
るといいかもしれませぬね。富津に同じ
クリスチャンで婦人保護施設があるんだ
けど、そこは老人ホームとかいろんな施
設があって、全部ちゃんと礼拝やってる
んだよね。利用者さんがどこにいても、
ちゃんと礼拝に出られるようにしてる。
ユッカでも何かできるといいね。

SM：私、礼拝必ず行ってる。

五：どうしてもね、山の上だから、年取
ると体がしんどくなってくるからね。い
い教会なんだけど。

O：山の上に造っちゃったからね。

五：そのときはみんな元気だったから。

天：“山の上のチャペル”って言ってね。

SM：今日見えたの、あれ会堂？

中：ああ、(アルクゾーで行った) 棧橋
から見えたのね。屋根塗り替えて鮮やか

になったからね。

SM：緑になってよく見えた。

C：向こうから？棧橋から？

中：今日みたいな日はくっきり見えるよ。

五：亡くなったSさんが遺したお金を、
お姉さんが教会に使ってくださいって言っ
てくださいって、それで塗り替えたの。

SM：きれいな色だね、あのグリーン。

N：デイケアから帰ってくるのときに見え
ました、目立って。

五：Nさん、デイケアはどうですか？

N：いいです。体操なんか、10時半か
ら、私は座ってやるグループで、教えて
くれる人がいて、楽しいし、体のために
いいと思って。

五：専門の人が教えてくれるから効果も
出るんですよ。ずいぶん元気になりま
したよね。そろそろ時間ですけど、みな
さん言い残したことはないですか。

N：かにたのおかげで長生きできてよ
かった、ありがたいです。迷惑かけて…。

O：Nさんがいちばんかにたのこといち
ばんよく知ってるから。

天：NさんとMさんと2人だけだもん
ね。(一緒に来た)15人の方たちがもう亡
くなって…。

五：じゃあ時間なのでこれで終わります。
ありがとうございました。

SM：これからも施設長がんばってくだ
さい。

五：はい！(笑)

『ベテスタ奉仕女母の家』の姉妹たちから

かにた婦人の村の創生期に大変な任務を担ってくださったベテスタ奉仕女母の家の姉妹のみなさまに、かにた婦人の村の思い出を語っていただきました。

創立50周年に寄せて

桜庭歌子

1967年、エリザベット姉の後を継ぎ、医務職に就きました。当時は管理棟2階に医務室



『ベテスタの日』に集った姉妹たち
2015年9月19日いずみ寮にて

があり、午前中はほとんど通院。街の人たちはこんなウワサを。「女の人たちを連れてきたのは、白い帽子をつけた制服の外人さんだったよ。今度は同じ姿の日本人だよ」と。午後は週に1回くらい赤門HPの先生が診療に來られました。

78年に看護棟としてユッカ寮が建って、医務室も移動。医務の仕事しながらユッカ寮の担任をし、日曜祭日の各寮自炊は自主献立で3食を調理。WMさんがよく手伝ってくれました。

仕事の合間に、東社協の籐編み教室で籐編みを習得し、イースターエッグ入れの籠を6寮の担任と一緒に作ったり、初期にはボランティアの先生によるお琴の教室で、希望者数名と一緒に習いながら教える立場に立ったりしました。

海水浴

山下 操

私は1965年4月から1969年3月までの4年間C寮の寮母として勤務しました。

初めての夏、寮生たちはみな、いただいた古い水着を着て、畑の中の道を歩いて大賀の浜へ行きました。深津先生自ら海に入り、泳

げなくてバチャバチャ歩いている者たちに「この下をくぐれ!」と股を広げ、一人ひとりをくぐらせたのでした。おかげで知らぬ間に水に潜れるようになり、「浮くときはこうするのだ」と上を向かせ、「布団に寝るときのように力を抜く!」と言って、頭の後ろだけちょっと支えて浮かせたのでした。その指導はじつにみごと。すぐ隣りでは海員学校の新入生がビート板を持って泳ぎを習っていたのでした。かにたの者たちは1日で犬かきやカエル泳ぎができ、快い疲れを覚えて水着のまま帰ってきたのでした。しかし、水不足で体は流せず、拭くだけでした。

かにた婦人の村の思い出 細井陽子

1965年4月1日、開所当時にD棟の寮母の職に就きました。

全国から入所される方々を温かい気持ちでお迎えしたい……と思いました。

殊にD棟は病弱者の方が主だったので、一人ひとりの対応は、表現できないほどたいへんでした。

当時の生々しい記録は寮母日誌に記してあると思います。

生活面で水不足が深刻で、1日バケツ1杯の水制限、お風呂は銭湯へ、調理はお米のとき水で野菜を洗うなど、2人の病人は小浴室でエリザベツ姉と入浴介助をしたことなど……。

私が早めに夏休みで東京に来ているとき、崖崩れでD棟の玄関が埋まり、E棟に移ったこと。

そんな中で、秋ごろには共に生活する喜びが多くなり、自然環境の癒し、心の交わりが深くなりました。

24時間、ひとときの休みも取れなかった凄まじい生活に体調が悪くなり、残念ながら一人ひとりのことを心に秘めて、4月末、東京へ帰りました。

自然に癒されて 眞山知恵子

私は1967年4月から1977年3月まで勤務しておりました。初めの1年はD寮で、次の3年間はバラ、コスモスの2寮の寮母として、寮舎の中の寮母室に住み込みで働きました。1971年からは調理部の担当として、献立、材料発注、栄養計算等の他、朝夕の調理、そして作業班の1つとしてある調理室に通ってくる利用者の指導をしておりました。

寮母の時代は、毎日夕食後、寮生数人と海岸へ散歩に行きました。磯の岩の間からツボと言われる小さな巻き貝を採り、持ち帰って塩茹でし、針で身を取り

出して食べるのがみなも楽しみでした。田畑の畦道では土筆をたくさん摘み、ハカマを取って煮て食べるのもみな好きでした。桑の実を摘んで食べたり、町ではできなかった楽しみがたくさんありました。晴れた日は海を往き来する船を見、沈む夕日に見とれた日々が懐かしく思い出されます。

かにた婦人の村の思い出 植木道子

会計事務の任務に就いたのは1967年11月、開設して2年数か月のころでした。今では考えられないほど、何もかも異なり想像以上だったと思います。入金になるべき措置費が遅滞し、必要とする支払いすらできない状況が続きました。しかし立場として、通常の調整処理をしなければならぬ葛藤でもありました。

そのような日々の中で、直接村人の姉妹がたとふれあう機会は少なく、食事時ぐらいだったでしょうか。全体を通して思い出に残る事柄が浮かびません。何しろ40数年前になりますから——。記憶も乏しくなり、これくらいでお許し願いたいと思います。

健康的なこともあり、1973年6月、5年7か月を経て退任させていただきました。得難い経験であったと感謝しております。

思い出 小川都代

1967年春から約11年間を、かにた婦人の村で暮らしました。初めは寮母として、あねもね寮で17名の寮生と暮らしました。朝、目覚めるとすぐから賑やかな

やりとりで、調停が必要でした。でも仲よく助け合っているいろいろな経験をしました。作業のない日は摘み草をしたり、海岸へ行って貝を採ったり、楽しみがいっぱいありました。みな働き者で、道路づくり、崖工事など、力仕事もワイワイとやって、その成果は今もよくやったものと思います。

誕生会、夏まつり、運動会など、行事も楽しかったです。復活祭や降誕祭も思い出深いものです。

寮母職から作業指導に替わって、未経験の畑仕事や椎茸づくりをして、それは大変だけど、楽しいものでした。天気がよい日は山も海も、空気が良くて素晴らしい所ですが、台風が来ると崖のことが気遣われます。

ドイツ・ベテスダのエリザベット姉からも、お言葉をいただきました。

フォルクスワーゲン、よい思い出です。大変でしたけれども。いろいろの人いました。HSさん、弱い人でした。

深津先生は、具体的な愛をもって奉仕しました。シュヴェスター・ミチもよくがんばっています。いつまでも、かにたの寮生の世話をしてください。

わたしたちも、人数も少なくなったし、今までの仕事、できなくなったが、交わりと祈りは大切です。

何もできないと言わないで、小さいこと、できます。祈ることができますね。

2015.5.20

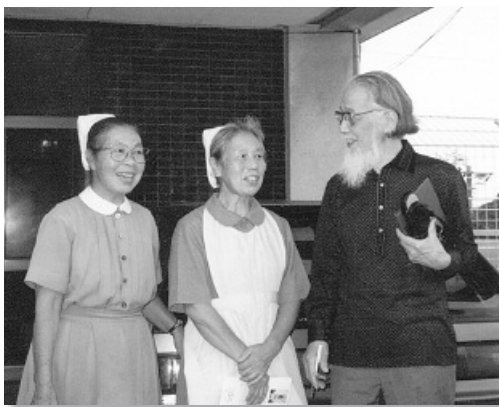
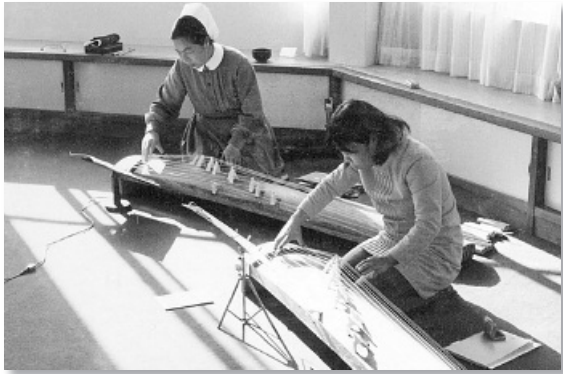


1992年の『ベテスダの日』



2015年ドイツで再会した
エリザベット姉と天羽道子姉





イングリット姉と村人たち

42年間のかにた生活を終えて

小林 い さ

元職員小林いささん（1968～2011年勤務、2014年12月逝去）からの退職時の聞き取りを、『かにた便』132号より再掲。

* * *

かにた婦人の村に来る前は、札幌で会社に勤めていました。その会社が倒産して残務整理などをしているうちに、自分が人生の転機に来ていると思ったんですね。それで、教会でつながりがあったシュヴェスタ歌子を通じて、かにたで2週間のボランティアをさせていただきました。それが終わるころに、深津先生から「かにたで働いてもらえないか」と言われたんです。

そのときは、札幌の教会で新しい伝道所を立ち上げる事業にも関わっていて、途中で抜けるのは悪いと思ってかなり迷いました。でも、やっぱり小さいころから「人のために働きたい、手助けしたい」という気持ちが自分の中にちょっぴりあったんですね。それで、短い期間でしたが、かにたの寮生とのふれあいがあって、長い目で見ると、かにたでの生活、この自然の中で働くということが、自分に与えられた仕事のような気がしました。

かにたへ来た当初はもう無我夢中、やることなすことが新しいこと、自分が経験してきてい

ないことなので、本当にびっくりしました。そして、寮生と一緒に力を合わせて働くということがいかに大切かと感じました。かにた自体がまだできて2年半で、新しい入所者が来たかと思えば「こんな所にはられない」とか言って無断外出がしょっちゅう。そんな中で働くのは本当に無我夢中だし、すべてを一緒に造り上げていくという感じで、本当に開拓時代でした。

泥だらけの中、みんなで「ホイッサ、ホイッサ」ってバケツリレーをして道路や階段を造ったり…。壁だって素人の工事だからきれいではないけど、風情があるでしょう。ステキなのよ。会堂を建てたことも、寮の屋根のペンキ塗りをしたことも…、ずいぶん大変でしたが、苦労だとかしんどいなどとは思いませんでした。自分たちの生活、住まいをつくり上げるために、みんなで力を合わせてやってきたのが本当に楽しかった。「自分たちの力でやりましょう」ってね。それで現在のかにたがあるのだと思いますね。

それから、新しい入所者を最初に受け入れるフリーズ寮の担任もずっとやってきました。家庭生活に恵まれてこなかった人たちばかりですから、受け入れるためには、まず安心感

をもたせることがだいじです。食事一つとっても、準備から感謝して食べることまで、ていねいにやりました。ちゃんと箸置きを置いて箸を並べてから頂くとかね。誕生日のお祝いもろくにしてもらってこないような人たちですから、安心して落ち着いて暮らせるように、ちょっとしたことから細心の気配りをしてきたつもりです。

深津先生は「おいしいものを食べさせれば出て行かないだろう、だからごちそうを食べさせなければ」とおっしゃっていましたね。「ゴミだめ」なんて悪い言葉も使ったけど、でも本当に社会では「あんたなんて！」という言われ方をしてきた人たちですから。まず、そういう人たちから快く受け入れなくては、というのが先生の精神でした。

夏祭りだって当時は1週間びっしりやりましたよ。街中のにぎやかなところに目を向けさせないで留まらせておくためにね。行事にしても作業にしても、いろいろなことを職員が一緒になってやりました。それでもけんかして出て行ったりして。やっぱり最初は何事においてもたいへんだということです。落ち着かせるためにはね。

振り返ることなく、とにかく前に進んで、いろいろなことを経験して、心身ともに育てていただきました。後はみなさんにかにたをしっかり守っていただきたいです。深津先生が、このきれいな自然の中に、彼女たちが安心して暮らせる場所をつくってくださった。それを持続して、安定した生活をさせていただくということ。

今、かにたもいろいろ変わってきている時期ですけど、今いる人たちが不安にならないように。ようやく落ち着いた生活というのが

身についているわけですから。どこかにやられるんじゃないかみたいな不安を感じさせないように。それだけは願っています。

相談所の方々は彼女たちのにこやかな顔を見て「考えられない。あんな顔見たことなかった」とおっしゃいます。でもそれは私たちがやっていることではない。この包容力のある自然の中に暮らしてきているからこそ、「ああしろ、こうしろ」ではなく「ああしたい、こうしたい」ということを伸ばしてあげられる。それで現在の彼女たちの姿があると思います。

深津先生がイエス様にならって、ご自分も仕える者としてやってこられたように、到底及びませんが、私もそうになりたいという思いでやってきました。残された人生もそういう精神で生きたいと思います。今までかにたで受けた恵みに対して、今後はお返しするという生活をしたい。本当に素晴らしいところで働かせていただいて、感謝の気持ちでいっぱいですよ。

かにたを憶えて、支えてくださっている方々には、同情ではなく、ご自分と同じ立場で考えていただけたらなと思います。私もここへ来て、彼女たちの過去の生活を知り、恵まれない環境で育ってきた人たちがこんなにもいるということが驚きでしたから。今まで自分がいかに知らなかったかということも。文面ではお伝えしきれないと思いますが、本当に、一人ひとりが寂しい人たちです。自分ではわからない人もいるかもしれないけど。寂しくしているんだなあという思いは、ずっと一緒に生活してきてよくわかります。そういうことを感じていただけたらうれしいです。

職員から一言

氏名（あいうえお順）

- ①勤続年数、現在の担当
- ②かにたに勤めていちばんうれしかったことは？
- ③日々の入所者支援で大切にしていることは？
- ④50年経ったかにた婦人の村に一言

天羽道子

- ①37年、名誉村長
- ②就職して2か月、崖崩れが発生し、土砂運びのバケツリレーが行われた。みごとなバケツリレーの中に入って共に汗を流し、“共同体”の一員になったことを実感。まず最初に味わった喜びであった。うれしかったことを一言で言うと“仲間入りできたこと”。
- ③基本的に入所者と職員という立場を超えて、すべての人間平等の立場に立つ。故に同じ村人という考えをもち、すべての人を尊重する。その上で、一人ひとりが負っている痛みを共感しうる者でありたい。共に泣き、共に喜ぶ者でありたい。そして一人ひとりが、“生き生きと生きる”世界を共に創造したい。
- ④措置施設である以上、行政指導の下に置かれているが、行き場がなく本当に困った人々の問題に対応する施設として、“底点志向——底点の優先”という理念を生かし続けられますように。

五十嵐逸美

- ①通算13年、施設長
- ②再就職したときに、かつて自分が作詞作

曲した『やすらぎのいえ』をみなさんが歌う声を聴いて感動しました。

- ③入所者の立場に立って彼女たちの話をまずじっくりと聴くこと。思いや希望、願いをそのまま受け止め、肯定し、叶えていく方法を一緒に考えます。そこに障壁があれば解決可能なことかどうかを伝え、難しい場合は迂回路や調整的な方法を提案し、説明し、納得していただきながら支援を提供できるように、努めなければならないと考えます。
- ④住んでいた地域での支援では日常生活も困難な状態と評価された方が、かにたでは平穏に生活できるまで回復されていくようすを、私たちは何度も見てきました。かにたは、どんな人にも価値と役割と尊厳があることを証明できる場所です。地域にこのような雰囲気と場があれば、そこで生活ができる人たちです。かにたのような、どんな人にも優しい地域づくりを提案し、実際に地域づくりに参加していくことが、かにた婦人の村のこれからの役割の一つであると考えます。

五十嵐仁美

- ①通算10年、ユッカ寮担任

- ②19年ぶりに再就職し、入所者のみなさんの変わらぬ笑顔と日々「ごくろうさま」「ありがとう」「気を付けてね」という優しい言葉に触れられていること。
- ③みなさんが私にとってとても大切な人たちです。話は全部、お気のすむまで聞くこと。日々心地よく過ごしていただけるよう、物心ともに心がけること。厳しいことを言わなければならないときや身体介助などにおいては特にその方の尊厳を損なうことのないよう心掛けています。
- ④デイサービスなどで高齢者の施設に通うようになった方たちは、すべてを受容されることの心地よさを知り、生き活きと日々を楽しまれています。かにたでもより利用者に寄り添った支援を行っていきたいものです。

伊佐悦子

- ①2年、ユッカ寮
- ②バランスの取れたおいしい食事がいただけること。
働きやすい職場に恵まれたこと。
- ③利用者さんに言われたこと、問いかけなどに対しては、なるべく向きあってお話を聞いてさしあげられるように…。自分がしてほしい、こうしたらうれしいなと思うようなことを介護してさしあげられるように、お互い気持ちよく過ごすことができるように努力しています。
- ④かにた婦人の村の創生期から歩んでこられた方々も高齢にさしかかっています。これからの人生を穏やかに過ごしていただけるようなかにた婦人の村の環境であってほしいと思います。

石原八重子

- ①8年、ユッカ寮
- ②お世話させていただいて、笑顔で「ありがとう」と言われたとき。今も「ありがとう」に勇気が湧きます。

大砂玉子

- ①26年、調理
- ②入所者が自立したとき。
- ③入所者の気持ちを大切にしている。
- ④入所者の高齢化が進んできたので、みなでがんばってほしい。

小川千代

- ①39年、農園
- ②利用者の目線に合わせて毎日を過ごし、作業やいろいろな行事に参加でき、共に楽しく過ごした日々。
- ③利用者の話すことに関心をもち、お互いに思いやりを考えながら、向き合って話を聞く。そのときに、理解できるよう、こと細かに答えを出してあげる。
- ④これから時代と共にかにたを変えていかなければならないと思います。いろいろたいへんでしょうが、深津先生の名前が続くようなかにた婦人の村になるように。期待しています。

小倉文好

- ①0.5か月、調理
- ④みなさん和気あいあいで、いつまでも楽しく明るい場所でありますように。末永く。

勝亦一江

- ①1年、かにた教会協力牧師、洗濯・浴場清掃
- ②かにた教会協力牧師で主日礼拝を担当させていただけることになったこと。そればかりでなく、パートとして月～金、か

にたのみなさまと一緒に働くことができるようになったこと。

- ③働き場でパートとして、入っている方と職員のもとで一緒にその一員として共に働くよろこびと、できるだけ風呂場トイレは清潔に気持ちよく手抜きのないように協力していくこと。

あいさつは出会いの合言葉と思って、さわやかにいつでも。かにたに来た方々へもしっかりあいさつしたい。

- ④未来に向かって何を大切にしていくかを共通に、みなが認識できるように。過去の踏襲、長年いる者だけが了解しているのではなく、新しく入った者への教育と連携をだいじにしていってほしい。

黒田房子

- ①19年、ベゴニア寮担任、編物・織物
- ②とてもつらかった日々がありました。1人の入所者さんの「神様が見ているからいいことがありますよ」という一言がとてもうれしく、勇気づけられました。
- ③みんな同じように接することに心がけをしている。希望、要望をできるだけかなえられるように努力している。
- ④自律の方向に生活ができるよう支援する。無理のない作業、運動で穏やかな日々をみなさまが過ごせたら、と思います。

小汐奈緒美

- ①1か月、後援会事務
- ④かにた婦人の村は、自然に囲まれ、穏やかな環境の中、寮生の方々はもちろんのこと、職員の方々も健やかに生活されていると感じました。新しく働き始めた者にも明るく親切に受け入れてくださることに感謝しております。これからもこの

ままのかにた婦人の村であってほしいと思います。

小村三津子

- ①11年、調理
- ②病気やけがをした際、家族同様に親身に想ってもらったこと。
- ③食の安全を大前提とし、満足できる食事をすると共に、入所者と顔を合わせて、声をかけコミュニケーションを図ること。
- ④50年間で多くの心身ともに傷ついた方々を迎え入れ、現在のように、入所者を明るくやさしい人に導かれたことに共感します。今後も入所者が、安らかな生活を送れるようなかにた婦人の村であってほしいと思います。

塩川成子

- ①26年、庶務、担任補助、切手整理
- ②よく歌い、よく遊び、よく泳ぎ、よく歩いたこと。9km先の崖観音へ行った帰り、7人だけでバスに乗らずに歩いて帰り、ものも言えないほど疲れて座り込んだり、道なき道を探検して山道をおしりで滑ったり、という無茶を、村人と一緒に大笑いできたこと。
- ③待つこと。一人ひとりの心の中に、必ずある宝物を大切にし尊敬すること。彼らが描く絵が、その宝物を見せてくれることを、わたしはよく知っている。日常業務に追われて、最近はなかなか一人ひとりと向き合えないでいるが、また原点に戻ろうと思っている。
- ④50年たって、すっかり“かにたの村人”になって、安定して暮らしている人と、最近入所した、精神科疾患を抱えて不安定な人との差がとても大きい。今まで、

不安定な人が荒れているときに、どのくらいまわりの村人に助けてもらったかわからない。彼らは、どんなにトラブルがあった後でも、「いいんだよ、またやりなおそうよ」という赦しの精神が身につけている。しかし、高齢になった彼らに、もうそろそろ、ゆったりした時間もつくってあげたいと思う。

重田尚美

- ①11年、出納係、受付
- ②今までの職場は気が滅入ることが多々ありましたが、かにたに勤めてからは、そう思うことがほほないこと。
- ③入所者さんが傷つかないような言葉選び、態度などに気を付けていること。
- ④日本に1か所という施設なので、末永く続いてほしい。

嶋田和子

- ①1年、エリカ寮担任、製菓・製パン
- ②今まで勤務してきた人間関係とは違い、上司や先輩たちが親身に助言や相談を聞いてくださる職場であることに気付いたときに、自身の気持ちが安堵を感じたこと。また、時間と共に過ごしていく中、入所者たちが少しずつ心を開いて接してくれるようになったことに嬉しさを感じました。
- ③常にコミュニケーションは大切にしている。そうすることにより入所者たちも秘めることもなく、悩みや相談ごとを話してくださるので、対応もしやすくなると思っています。
- ④入所者が安心して過ごしやすい環境やそれぞれに合ったクラブなど設けたり、退屈しない施設に変わることが目標だと

思っています。時代と共に、今後新たに若い世代の入所者が入ってこられることを考え、生活しやすい環境は大切だと思います。担任の立場では、入所者が自分でやれることは自立していただき、できないことは支援する。まだまだ難題はありますが、人として関わる職場である以上は、入所者の立場を考え、安心して生活できる環境をつくり上げられたらすばらしいでしょう。

鈴木恵子

- ①2年、調理
- ②初めて入所者が話しかけてきてくれたとき。
- ③コミュニケーション

武田敏尚

- ①11年、農園
- ②縮伐した甘夏の木が4年たって実がついたこと。
- ③入所者の気持ちに伝える。
- ④苦楽と安心を相互に分かちあえる村であってほしい。

多田富美子

- ①13年、看護師
- ②勤務して数年経ち、桜庭さんに「かにたにずーっといてよ」と言われたときに。
- ③ケースバイケースがあるが、“ちゃん”付けで呼ばないようにしている。
- ④長期入所者、もっと文化的生活をさせてほしい。

角田秀一

- ①6か月、施設整備
- ②かにた婦人の村で勤務させていただいていること。
- ③只今勉強中！
- ④先人たちの知恵を借りつつ“日進月歩”

天良さゑ子

- ①19年、デイジー寮担任、陶芸
- ②いちばんがいくつもあります。共に生き、彼女らの再生・成長に立ち会え、村人の一員となってたくましく生きる姿を見られることは、他では味わえない幸せです。
- ③「あなたと私は同じものを神様から与えられている。よい心も、わるい心も……生きる力も。そのよき使い方を一緒に考え搜しましょう」
- ④50年という時間の中で培ってきた文化と、成熟したかいた婦人の村の精神性を失わないと同時に、新たなことへの挑戦も忘れてはいけないと思います。また、この村で50年近く生きてきた方たちに、平安で心地よい生活ができる環境を提供できなければ、この村ができた意味の成就とならないと思います。“最期の時”への時間をどう提供するのか、最期の時をこの村で迎えるのは不可能なのでしょうか？

中村育子

- ①2年、看護師
- ②行事の際、利用者さんと楽しく会話できたこと。利用者さんに、かいたがあったから今がある、という話を聞いたこと。
- ③利用者さんの訴えを、まずはご本人の発言をそのまま受け入れること。その上で、いろいろな情報を集め、客観的な判断をしていきたいです。
- ④50年という歳月は想像の難しいほどで、時代も入所者の年齢層も大きく変わっていますが、情報のありすぎるところから離れ、静かな自然の中で、よく歩くことで体を整え、行事や芸術を楽しみ心豊か

に生活すること、みんなの中で暮らしていくことなど、かいたらしさを有効に活かしていきたいです。

中村健二郎

- ①9年、編物・織物
- ②キャンプをしたとき、ギターを弾いて歌ったとき…などなど、自分が楽しいことをやると、みんなも楽しんで喜んでくれること。
- ③起こったことの結果だけではなく、経過をよく理解すること。結果は事実として冷静に受け止め、どうしてそういう結果になったのか、状況や心情、精神状態などにしっかり目を向けること。
- ④どんな人にとっても、安心していられる村であり続けますように。

畠山沙絵子

- ①3年、栄養士
- ②仕事をしながら自然と触れ合えること。
- ③何かしたい、してみたい、こんなものが食べてみたい、どこかに行ってみたい、だれかの役に立ちたい、入所者さんのキラキラした気持ちを大切に思っています。
- ④これから先も自然や音楽、人の温かさを大切にすることのできる、唯一無二のかいた婦人の村であってほしいです。

藤波重昭

- ①3年、農園
- ②農園の豊作の作物を、みんなでウハウハ言いながら収穫したこと。
- ③ともに働くこと。
- ④ますます充実していくことを願っております。

藤谷むつ子

- ①1年、ユッカ寮

②勤めて初めての誕生日、ミチ先生と他寮の入所者さんからカードが届きました。また、プレゼントを届けてくれた方もいました。他寮の方々とは挨拶程度の日常だったのでびっくりして、とてもうれしかったです。誕生日をお祝いすることで1人ひとりを大切にしている、その心が入所者にも根づいている“かにた”を感じることができました。

③「壁に強くボールを投げると強くはね返ってくる。やさしく投げるとやさしく戻ってくる」昔、先輩に言われ、やさしいボールを投げる心をもてるよう、日々大切にしている言葉です。

④かにたに勤め、初めてこういう施設があることを知り、入社してから本を読み、かにたの歴史を知りました。50年こつこつとこの村をつくり上げてきた方々の皆あかるく元気に過ごしている姿に接し、学ぶことがいっぱいあります。かにたに出会えたことでの笑顔だと思います。これから先もこの笑顔が続きますように。

山田幸江

①27年、食堂清掃

②勤め始めたころ、入所者さんの温かい言葉、あいさつは、今でも忘れられないうれしいことでした。

③笑顔で接するように心がけ、声かけをすること。話を聞いてあげること。

④今までどおり女性の味方でいてほしいです。

森 節子

①15年、クロッカス寮担任、農園

②とてつもない大家族だけれど、2番目の家ができたこと。

③今日1日を無事に終え、明日の活力を養

うために、その場その場で解決できることは、その日のうちに。自由に自分を表現できるような場づくりをしてゆく。

④都会では経験できないことが、地方（館山）にたくさんあります。ここでの豊かな自然の中での生活を守り、従来の施設のもつ専門性に、地域の機関との連携をプラスして活動していくことを願います。

和城均始

①1年、調理

②料理を「おいしかった」と声をかけてくれたこと。

③コミュニケーション

④これまで以上に、かにた婦人の村がよくなればいいと思います。

渡辺恵美子

①26年、アネモネ寮担任、洗濯・浴場清掃

②「おはよう」「またねえ」「おばあちゃん元気？」などあいさつをしてくれること。気持ちが落ち込んでいるとき、みんなから元気をももらったとき、うれしかった。時間をかけて作りあげたときの自身に満ちた顔と、作品を喜んで着たとき、「ありがとう」と言ってくれるときです。

③一人ひとりの役割（できること）を大切にすること。共に作業をすること。そして安心感、信じること、時間をかけ、焦らず、ありのままを受け入れること。

④グループホームがかにたの中にあってもよいのでは。テレビ、食洗器、エアコンと設備をし、住みよい環境をつくること。日本で1か所しかない長期婦人保護施設、続けてほしい。

かにた婦人の村 入所者数推移（1965年4月～2015年10月1日）

	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978
愛知	2	4	4	4	4	4	4	4	4	5	5	5	4	4
石川	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩手	1	1	1	1	2	4	4	3	2	3	3	4	4	5
大阪	3	4	4	4	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4
神奈川	6	6	6	8	9	9	9	7	6	6	5	4	4	4
岐阜	2	3	2	3	2	3	2	2	1	2	2	3	2	3
群馬	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1
佐賀	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
静岡	2	2	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
東京	17	37	38	35	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
栃木	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
長野	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
新潟	0	1	1	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3
兵庫	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	3
広島	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
福岡	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
福島	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北海道	7	10	10	10	11	10	10	11	10	10	10	10	10	10
三重	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宮城	0	1	0	0	0	2	3	3	3	3	3	3	3	3
山形	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3
埼玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
茨城	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	56	87	86	86	95	99	98	96	92	95	94	95	94	94

	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992
愛知	4	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
石川	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩手	6	6	6	6	6	6	6	5	4	4	4	4	4	4
大阪	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
神奈川	4	4	6	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	8
岐阜	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3	1	2
群馬	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
佐賀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
静岡	4	4	4	4	4	4	4	4	3	2	3	3	2	2
東京	40	40	40	40	40	40	40	40	39	39	39	37	36	36
栃木	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
長野	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
新潟	3	3	4	4	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5
兵庫	3	4	4	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5
広島	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
福岡	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
福島	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
北海道	10	10	10	10	9	8	8	8	8	8	8	8	9	8
三重	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宮城	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2
山形	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2
埼玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
茨城	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	94	97	99	102	99	99	99	100	96	95	94	93	90	91

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
愛知	4	4	4	4	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4
石川	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩手	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3
大阪	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4
神奈川	8	8	9	9	9	8	8	8	8	9	9	10	10	10
岐阜	1	2	1	2	1	3	2	3	2	3	2	3	1	2
群馬	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
佐賀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
静岡	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
東京	34	36	35	35	35	35	35	34	36	37	38	38	38	36
栃木	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1
長野	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
新潟	5	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
兵庫	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
広島	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0
福岡	5	5	5	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	3
福島	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1
北海道	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
三重	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
宮城	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
山形	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1
埼玉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1
茨城	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	89	91	90	89	87	89	87	87	88	94	95	97	93	89

	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
愛知	4	4	4	3	3	2	2	2	2
石川	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩手	3	3	3	3	3	3	3	3	3
大阪	4	3	3	3	2	2	2	2	3
神奈川	10	10	9	9	6	6	7	7	8
岐阜	1	2	1	2	1	2	1	1	1
群馬	1	1	1	1	1	1	1	1	0
佐賀	0	0	0	0	0	0	0	0	0
静岡	2	2	2	2	2	2	1	1	1
東京	34	33	33	33	32	30	29	26	24
栃木	1	1	1	1	0	0	0	0	0
長野	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新潟	3	3	3	2	2	2	2	2	2
兵庫	5	5	5	5	5	5	5	5	6
広島	0	0	0	0	0	0	0	0	0
福岡	3	3	2	2	2	2	2	2	2
福島	1	1	1	1	1	1	1	3	5
北海道	8	8	8	8	8	8	7	7	7
三重	1	1	1	1	1	1	1	1	1
宮城	2	2	2	2	2	2	2	2	2
山形	1	1	1	1	1	1	1	1	1
埼玉	1	1	1	1	1	1	1	1	1
茨城	0	0	0	0	0	0	0	1	1
計	85	84	81	80	73	71	68	68	70

○1965. 4. 1～2015. 10. 1

入所 188名
 移管 42名
 死亡 76名
 現在 70名

○年代別

20代 2名
 30代 3名
 40代 5名
 50代 2名
 60代 19名
 70代 24名
 80代 13名
 90代 2名
 合計 70名

○在所期間

40年以上 34名
 30～39年 10名
 20～29年 3名
 10～19年 11名
 10年未満 12名
 合計 70名

あとがき

歴史学者で文章を書くのが好きだった深津文雄の書いた本や3種類の機関誌を、山のように積み上げて、読み始めたが。あまりの面白さに、何も書かずに読みふけてしまう日々が続いた。

かにたの開所時に大学生だった私は、毎日海水浴に同行したり、村人の入院に付き添ったり、毎年訪問していたので、かにたは身近な存在だった。しかし今回、歴史を一行ずつ辿ってみて、職員や村人たちが、その時代その時代にこの村を築き上げてきた燃えるエネルギーを、これでもかと、突きつけられた思いだ。

これからの日々をどう築いていくのかが問われている。(塩川 成子)

立ち上がってくる。深津文雄の思想が、哲学が。一人の人間とイエスとの対話から生み落とされた“あかご”。その成長の過程をたどる50年という時間の検証。

この冊子に記されたことは、ほんの一部に過ぎない。数千倍、いえ数える事ができない事柄が、記されたその奥にある。

この村の“今”が在るのは、決して奇跡…ではなく、数知れぬ多くの人、血の出るような闘いの日々の上にあること。また、その戦いの一員に村人が含まれていることも忘れてはいけない。

「おもしろかった」というと語弊がありそうだが、じつにおもしろかった。そして多くの宿題を投げかけられた。

(天良さゑ子)

できるだけ“生の言葉”が残る記念誌にしたい思い提案した座談会、おもしろい内容になったと思う。他にも載せたかった写真や文章、やりたかった企画、試したかったデザインやレイアウト…できなかったことが山のようにあるけど、時間が足りなくてできないのは編集作業の常。50年後の100周年、文の1行、写真の1枚でも関われたらうれしい。

(中村健二郎)

婦人保護長期入所施設 かにた婦人の村 創立50周年記念誌



編集 かにた婦人の村
294-0031 千葉県館山市大賀594
TEL : 0470-22-2280 FAX : 0470-24-1562
MAIL : kanital965@ybb.ne.jp

発行 社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家
178-0061 東京都練馬区大泉学園町7-17-30
TEL : 03-3924-2238 FAX : 03-3921-4962

印刷 (株)印刷センター

Kanista

社会福祉法人 ベテスダ 奉仕女母の家